

カワセ の 賦



STUDIO 4951

カワセミの 渡せる橋の 斜めから
ゆくえも知らぬ 眉の山かな



主な登場人物

①



大塚一路(おおつかいちろ)

大塚家の長男。明美の息子。
何を考えているのかわからない昼行灯。カメが好き。

②



大塚幾美(おおつかいくみ)

大塚家の長女。明美の娘。
一路と同じく何を考えているのかわからない問題児。

③



大塚太一(おおつかたいち)

大塚家の次男。明美の息子。
大塚家待望の常識人。悪たれで喧嘩っ早い、姉の幾美が怖い。

万葉集にも詠われる、あの山は、どうやら女であるらしい――。

眉山のことを言っている。

寒冷化が騒がれて久しいというのに、山肌は、まだら模様の淡いピンクが、花に嵐かむらくもか、ビルの際間から申し訳程度に咲いている。眼下には年中咲き誇るチューリップ畑と場違いな風車にそよがれて、のどかなのか息苦しいのか春の気配が浮遊していて、
(これも佳趣（かしゅ）かねえ……)

北島の高層ビル内にある空中水族館から、都心(旧市街地)の方を眺めて、ふと思った。

マオの日課だ。一人で来ている。

ガラスには背後の家族連れやらカップルがうっすらと反射し、魚を見ているのやら人間を見ているのやら定かではない孤独な自分がどうも可笑しい。買い物袋を引っさげて、男物のジャンパーを羽織り、眠そうにソレを見ている自分を魚も見ていた。

空調の具合で頭のとっぺんがなびいている。気付かないフリですましたが、背後の女の子が、指さした先に自分がいて、この自意識過剰の女は、するりとかわした。

拍子に、錯覚だろうか、奇妙な遠近法で、その子どもがマンボウに食われてしまった。

年始の初売でフリーパスをもらい、通っているうちにはまってしまった。

徳島は、空中権取引による公正を市場に聞けという、ほとんどデタラメな市場原理と後ろめたいセンチメンタルが眉山の裏側に「案件」を集中させてしまったがために、正面側からみると、尖ったビルの頂上やら電波塔が気持ちのいいほど不自然に山の裏からのぞいていて、かつて“眉の山”とよばれた眉山にはエクステでも付けられたかのように、この女の目には映るのかもしれない。

一方で、

(見てもいないくせに……)

たかだか心象風景で詠んだだけの、たいそうな歌人のディティール感覚を斜めから眺めて、眺めているうちに、

(やっぱり眉か……)

などと、どうやら、この時分のマオは、物事を考えることが好きらしい。

側面の水槽には、イワシが大量に泳いでいる。内側からみると、まるで、魚が空でも飛んでいるかのような光景である。

二〇三六年になっている。

徳島はずいぶん変わってしまった。マオも年をとるはずで四十八歳。見てくれは三十代であるが、それは手入れされたキレイさであることも自覚している。

なにより、四十五を過ぎた辺りから自分の臭いが気になりだしたし、ときおり関節が痛くなり

、胸もないのに肩がこる、頭痛とめまいはほとんど恋人で、天気と時間帯による躁鬱も激しい。
(これじゃ、お姉と同じだ(更年期障害).....)

新聞を読んでいても突然、不安になったりムカムカしたりして、それを解決するために、何度も同じ箇所を読みなおしたりイスに座りなおしたり、コーヒーを淹れなおしたり、自分をリセットするかのような、そういう、神経質な部分が、この女のなかに宿ってしまった。

髪型はポニーテールやら三つ編みというふうに子ども帰りして、そのくせ、デコルテの露出を季節を問わず好んだ。客からは衣装であると捉えられていたが、実生活でもそのまま、思いつきで、髪の色を赤にしたり青にしたり、五十五の明美からすると、

「どこか悪いのではないか.....」

そう心配させるほど、マオは自分に表現を求めた。

「アーティストみたいや」

十五の太一に言われると、

「そうだ」

と、気づいた。

アーティストだから、題材があれば極めるまで扱い倒すという性質がマオの中で出来上がるのか、例えば、魚のヒラメが美味いとわかると、毎日ヒラメを食べ続けたり、ノースリーブが再び流行ると、年中ワキを出して過ごした。

「細くても、たぶたぶするもんだ.....」

さしずめ、ランニングウェアがよく似合う。

「足腰を 無駄に鍛えて ガンで死に〜♪」

目的もないのに、ただ走り、体力の衰えをわけもなく嘆いて、どういうわけか、犬の足裏のような香ばしい汗のニオイに、自分は、

「ポップコーンだ.....」

と、わけのわからないことを思うのである。そのわけのわからない自分に対してコーラを欲する心は、感覚的な「公」の心が信心深くなっており、歩き遍路にもらった“緑色の納札”に触発されて、五回も遍路をやる（※遍路はランク（回数）によって札の色が変わる）自分を妙だとも厭わず、母親の死去後は徳島に本籍を移して、うどんばかり食べて過ごした。

（大丈夫なのか.....）

そう明美が心配している矢先、折しも、一路が東京から帰ってきて、その頃になると、マオの素行もすっかり治った。

ただ、さみしかっただけかもしれない。

年月のブランクを埋めておく。

あれから一路は、マオと暮らし続け、大学進学を機に東京に出た。しかし、一度出てしまうと何年も音信不通で、

「生きているのか、いないのか.....」

この“母親たち”は、一路はどこか二人のものだと思っていて、互いに遠慮しあい、もしくは、ど

ちらかが何とかしてくれるだろうという安全感覚としてのかまけが、結果、息子を放置してしまった。

「何かあったら、（千葉の）ばあちゃんのところへ行け」

と言い聞かせておいても、現れたためしは一度もない。大学三年を二回やったが、不思議なもので主席で卒業、そのあとは、就職活動もせずに突然帰ってきて、マオの店を拠点にフラフラしている。

「よう帰ってきた！」

両手を上げて喜んだのはマオだけだったが、この頃の大塚家では、なにぶん、幾美のことでいっぱいだ。

＊

幾美には、もうじき一歳になる娘がいる。翠（みどり）という。十九で産んだ。

不幸なことに、父親が誰かもわからないまま、この女はシングルマザーの道を歩もうとしている。

「何そのお腹？！」

「太っただけ……」

「嘘おっしやい！」

何をしているのだろうと、この十八歳は自分に対して滑稽に思った。

大学から帰宅し、シャワーでも浴びようと脱衣所で服を脱いだ瞬間だ。タオルを補充しに来た母親にぽっかりと突き出た腹を見られてしまった。

いつまでも、隠し通せるはずがないことくらい承知していた。いつか、打ち明けるつもりでいて、膨らむ腹の不自然さを逆算して、機会をうかがっていたのに、まさかこのようなマヌケな発覚をして、しかも素っ裸の自分に母親が血相を変えている。

こんな恐ろしい母親の顔は、はじめてかもしれない。ふいに、目をそらしてしまったが、それは、後ろめたさというよりも、瞳孔が開いたような危なげな目でこちらを見て、力いっぱい洗面台に押し付けられた反動だ。

「ママの目を見なさい！」

そう、言われるがまま従ったが、母親の目には何も映っていないかのように幾美には映った。

十七歳ではじめたブラジリアンスタイル。見晴らしがよくなった辺りに、蝶のタトゥーを貼っている。不良になりたかったわけではないが、ストレス発散でやってしまった。

なるほど、これでは遊び人と大差がない。

これは、シールだ、と弁明したところで、論点はそこではないことくらい知っているのに、これが貼ってあるから尻軽なのだという結論に達したまま、母親の顔を直視できないでいた。

パパ、ママ、実は、これこれ、こういういきさつで――、

相成りました。と、何度も、頭を下げる練習をしていた。それが、いざ見つかり、腹の下のタトゥーに後ろめたさを感じる心は、動揺で片付けてしまっても良いのであろうか。

一方で、母としての明美の時間はあ然と止まって、一瞬、日本語を忘れてしまった。娘には、どのような言葉をかければいいのか？

幼稚舎から名門の私立に通い、現役で医学部に入った。難しい子だったが、トンビの娘にしては、でき過ぎかもしれない。

「おたくの幾美ちゃんは、ほんまに偉いなあ……」

(なにが、偉いのですか――)

親の欲目はそこそこに、整った顔立ちで頭も良い。運動は少し苦手であるが、落第ではない。

ご近所の少年には憧れのお姉さんで、教師受けも良い。だが、現実の娘は、百点の答案で不都合な腹を隠す、いまだきの女と大差ない。

それが、(娘は真面目だという)“信奉”の崩壊に繋がり、明美は、あれこれ巡らせているうちに、この何をしでかすかわからない優等生の娘をはじめて、
(得体が知れない……)

と思いつつ、性に見ざめてしまうと歯止めが効かなくなりそうになる、遠い昔の自らの体験を思い起こし、遺伝だと思った。

(ママ、何しとるん……?)

ふと、今にも泣き出しそうな顔で夫婦の営みを気配なく見ていた幼い幾美の顔が思い出された。

帳の下りた深夜二時。母として女として、最大の失態を披露した。あの時の感覚が、なぜ、いまになって降りてくるのか？ また同時に、娘の腹の出っ張り具合から着床日を計算して、
(あの頃は、何をしていたか……?)

などと、のんきな回想を回した。

腹の中の生命が躍動するのか、幾美は、気まずそうな表情を浮かべながらも、そちらへの意識配分とが拮抗していて、明美は目の前のもうすぐ母になろうとする娘が、少しばかり他人のように見えていた。

さなか、明美は学生時代に心理学をかじっていたため、こういう時、どういうふうに着け
ばいいのか、その処方箋を防衛本能として無意識に探った。探ったが、気の利いた病名は、自分
ではなく娘のほうに向くようで、

(パラフィリアかもしれない……)

そんな言葉がふと浮かび、不気味な気まずさが体を冷やした。

パラフィリアとは、適切な年齢に健全な性を経験せずに成長すると、成人(この時代は十八歳)してから性欲が複雑に屈折するというものだ。

幾美の場合、ただでさえ整った顔立ちが男を遠ざけていたし、ボーイフレンドも作らずに十代の後半を過ごしていたのは、幼い頃見た裸で転げまわる両親のせいであるかもしれず、「性嫌

悪症」になっても不思議ではない。

それでいて、この少女はオトナになることに躍起で、小学生の頃は、明美の化粧品は塗りたくるわ、幼い太一に母乳をやるのだと乳首を吸わせるという妙な子で、中学では路上で用を足して警察方、高校では援助交際を未遂に経験している。

弟の太一に触れられると神経質にも風呂に入り、そうかと思えば、太一に抱きつき、暑くなると、下着も付けずに出歩く。

振り返れば、幾美の“性”はゆらぎだらけで、そのゆらぎは、知りつつ知れない、いわば、キンモクセイの残り香のような男性像が元凶だ。

それに反発、もしくは、青春の sunk cost（埋没費用）を回収するがための過激な性が、この一件と接続を希望したのかもしれない。

明美の古い友人に、二人も下ろした女がいる。一方で、違う父親から五人も産み育て、懲りずに六人目を孕もうとしている女。

どちらも、ろくでもない。が、後者を健康的だと捉え、そんなことに娘を重ね比較し、樂觀できるほど親というものは賢くなかったが、その片鱗の匂いくらいは自覚していたから、明美は、（幾美の何を見て育てていたのか……？）

奇妙なほど冷静な自分が不自然に思えた。

不思議だ。こんな状況下で、頭の中では、幼かった幾美の誕生パーティーが行われ、ロウソクの火を見て幾美が笑った……。

いつの間に帰ってきていたのか、その脇で夫は、娘のトンネル工事を受注し、あれこれと運搬してそこに“新しいモノ”を創りだした不屈き者を、さぞ極悪人に想像して、黙って拳を握って震えた。

怒らない父親が怒っているのだ。そんなことが、幾美には少し新鮮に思えたが、素っ裸の娘を前にして視線を気にしながらの父親像に違和感も感じた。

沈黙が生まれつつある。それにはどこか、少し可笑しみを帯びている。とはいえ、娘の一大事に、シンとした空気は似つかわしくないという状況感覚から、明美は母親として、とにかく、怒るべきだと単純に思った。ただ、怒り出すと引込みがきかない、この更年期障害の女は、
「(父親が)わからないモノは降ろせ」

と、倫理的な範疇に怒りを向け、言葉がエスカレートしていくうちに、夫に頬を叩かれてようやく黙った。

そういう一件により、妊娠発覚から出産間際まで、両親は半ば勘当状態で見舞いには来ず、ときおりマオと一路が様子を見にくるだけである。

「な～に、大したことないよ。たぶん。喉元過ぎればなんとやら……って言うしな」

「食べるわけやないだろう……」

幾美は、さみしい反面、自業自得を心得ていて、出産の不安の中、放っておいてもらえることに、一種の心の安らぎをおぼえた。

五月の新緑が青々とした日である。子どもの性はきいていない。

（出てきてからの楽しみ――）

というくだらない信仰があるわけでもなかったが、男だろうが女だろうがどちらでもよかったし、わかったところで、どうにもならないという父親譲りの思考もある。だからとりわけ、名前を考えておこうなどとは思わなかった。

ふと、病室の窓から敷地内の公園の池が目にとまった。そこで、カワセミが一匹鳴いている……。すると、どういう思考が回ったのか、生まれてくる子は、
（女だろう……）

となぜか思った。そして、名前は、
（翠(みどり)にしよう――）

豁然と決めてしまった。が、それ以外の名前はありませんと思った。
女の勘というものは、まことにもって不可思議であるが、神秘性をもった妊婦である状態は、この一風変わった十九歳の思考を静かな鋭さをもって運動させた。

本当に、生まれるのだ。そして、
「そろそろ……」

（陣痛が）来るだろうと思った矢先に本当にきて、難なく翠を生んでいた。

一方、両親はというと、いざ生まれてしまうと、おんぶに抱っこで、幾美にも、
「甘やかすな！」

と言われる始末のじじばばになってしまうのだから、人間とはおよそ、こんなふうにできている。

さて、その翠であるが、母親の幾美は休学（医学部）を取り戻すため大学にかかりっきりで、結果、明美が世話をするという様式で育った。

明美は、ようやく子どもから開放されたと肩の荷を下ろしていたが、孫ができるとまた母性本能が吹き返し、娘のように接した。

しかも、ばあさんであるという自覚をそらすためか、
「グランマ」

と自称するため、翠が言葉をおぼえだすと、明美を、
「ママ、ママ」

と呼ぶのだから、幾美の家庭も少々、複雑になるやもしれない。

その「ママ」というと、会社を辞めて主婦に戻った。それは、“孫”を触媒にした家族のためか、償いのためか……。自ら歩んだ道を振り返り、カウチポテトが日課の乳母を選んだ。

明美に関してはあまり触れなかったが、徳島でのこの女は、子育ての傍らパートを始める。ただ、パートも勤め続けると出世するもので、クオータ制も手伝って、チーフになり副店長になり、いつの間にか役員だ。

健康オタクだから年よりは若く見え、小銭もある。そんななか、若い社員に好かれれば、研修先でハメが外れた。

明美、五十六歳。五十ござ搔くとはいうものの、その年で――、
(よくぞできた……)

と笑いたい。

しかたがない。夫も子どもも、中年の女などには用無しだからだ。一路と幾美は完全に手が離れているし、夫と太一は、口を開けば、

「ごはんまだ？」

「靴下、どこ？」

夜の営みも一歳皆無。これぞ、倦怠期の夫婦というものだ。

この女は、決して封建的な人間ではなかったが、“自由”やら“自己実現”などというものに、そもそも、価値など見出していなかったし、そういう感覚に対してニヒルを貫けたからこそ、結婚して、「主婦業」ができるという勝ち組に入れた。

それでも、夫の優しさは妻にとって都合のいいものでしかなく、いつしか退屈に摩り替わってしまった。

若さとは、そういうニヒリズムを、

「男の一人寝は不潔だ……」

という一種、功德のような感情でごまかし、幾人もの男を通過したが、あのとき感じた何かを蝕まれたような感覚と平凡な人生はどこか似ていた。

それらを“原因”として攪拌（かくはん）させないと、反省へのエネルギーが醸成されないのかもしれない、若かりし頃の恋愛というノスタルジーが最後の暴走を招いた。

重ねて述べるが、筆者は、このお話を官能小説にするつもりはないが、明美は、行きがかり上、およそ「黄昏流星群」であるとして書いておく。

(わかっちゃいないから、やめられない……)

それは、明美も知っていた。

少し脱線してバカ話をする、アメリカのゲーリー・ベッカーというとんでもない男が発表した結婚離婚の経済学を引いてみる。たいそうな話ではない。

結婚離婚とは、およそ、便益（肉体関係を含む好きだという感情）とコスト（あれがほしい、これがほしいとねだられる）でできている。

また、時間とともに便益は下降し、コストはどんどん上昇していく。これが男女の仲というものだ。

ただ、男女の過ちは、便益が最高潮のときに結婚する。ところが、月日の流れで、便益とコストの曲線がクロスし真逆の方向へ向かうと、飽きて浮気し離婚する。

しかし、明美夫婦にいたっては、幼なじみというある意味冷静な関係から出発し便益は横ばいで、しかも、明美も働きはじめてコストが一切かからない。夫もじんわり出世している。

結果、前者とは真逆の相関だ。

革命の経済学では、その差が一番大きいときに革命を起こせというが、この夫婦の場合、革命（浮気）を起こしたことによって、少しだけ便益が上昇している。

「真価を問うには、離れなければならない」

誰かが、そんなことを言っていた。革命とは、変わらぬものを守るために状況が妙になれば変えることとも言う。なるほど、どこか摂理に似ている……。

おそらく明美もバカなのだ。バカだから、単なる浮気を“絆への劇薬”であると理解して、翌日からはベージュの下着に改めた。

「ママ、ネクタイどこ？」

なるほど、落ち着く暇がないわけだ。

そんなホームドラマから逃げるように、一路は再びマオと暮らした。

「月、なんぼ(お金を)入れたらいい？」

「そんなもんは、いらねえーよ」

二十五歳。中肉中背。色が白く、ひげもなく、ひどく中性的で後ろから見たら、女のような輪郭をしている。父親に似たのか、一見するとパツとしない雰囲気をもっているが、他は母親の生き写しのように、いちいちが似ている。

遠視でもないのに活字を読むときに顔を引いたり、紙切れを見つけると無意識に折り紙をする。

「一路」

そう呼びかけて振り向いたさまの挙措や目つきは、若いころのいけ好かない女にそっくりだ。そっくりだから、母親との共有物の延長線上に乗っていて、男のくせに馬の油が入ったようなシャンプーをして、乳液を塗りたくり、すれ違うと、ソレではないかのような匂いがするのだ。

「お“姉”ちゃん、お“姉”ちゃん」

そう客から間違われることもしばしばである。が、本人はさして気にすることもなく、いつもの口調で淡々とこなしていると、ことさら女子学生から支持された。

「一路～、これ見てん！ これ！」

「はい、見た。終わり……」

「ちょ、ちょっと待ちいや～」

若い女というものは、どういうわけか、男で済ませることを女同士でやりがちだ。

何かしら記念日を作って物を贈り合ったり、外見の評価を求めたり、傷を舐め合ったりと、性の傾向すら歪んできている昨今。一路のような中性的な人物から発せられる男性像に浸って、己の文化を満たしているのだ。

「これも商売だ」

と、マオに言われても一路には疎ましく、憂さ晴らしに、吉野川の河川敷で石ころを拾って持ち帰り、何が面白いのか、並べて孤独な品評会をやるところは、大塚家特有の根暗な遺伝だ。

例えば母親の明美は、一度料理を始めると、二時間でも三時間でも味の調整をやるし、妹の幾美も大作(主に少女漫画)にハマると、日に五十冊でも百冊でも延々と読み続ける集中力がある。(妙な親子だ……)

さておき、そのスクリーニングされた小石をカメの水槽に配置して、これまた何が面白いのか

、じっと凝視して、カメラで撮影するとその絵を見ながらデッサンを始めるという変わった男だ。

また、達者なことに、木片を拾っては、何やら鳥の置物を精巧に掘り削り、カフェの手伝いにしておくのは、もったいないほど、奇妙な才能をもっていた。

「石なんか集めておもしろい？」

「別に、おもしろくない」

ないが、この男がいうには、石には偽物がなく、そんな石を見た目だけでなく、カメとの調和やストレスを与えるための意図しない組み合わせを考え、考えたところで、カメに小突かれて台無しになる、いわば、盆栽のように予想矯正してしまう遊びよりも、石を置く確率と思い通りにならない歯がゆい時間がおもしろい。

たまに出かけても、行き先は、本屋かペットショップのどちらかだ。

家事は分担。というのは建前で、大半が一路がやっている。

どこでおぼえてくるのか、食事のレパートリーが多く、持ち前の潔癖は掃除をかかさないし、几帳面に整理整頓。

まるで女と一緒に暮らしているかのようである。そのくせ、部屋には机とベッドくらいしかない素っ気なさで、どれも、マオの使い古しだ。

漫画本しか並べたことのない本棚、よだれを垂らしまくった机、何度飛び跳ねたかわからないベッド。そんなものを好きこのんで使い続ける二十五歳という“系譜”に不思議なエロティシズムを感じてしまうのは、なぜだろう。

部屋では、夜な夜な作業をしている。何をしているのかは、わからない。が、ノックもせずに突然ドアを開けるデリカシーのない中年女においても、一路の部屋には、伺いを立てるという儀式を用いて、まるでその一郭が自分の家ではないように思えた。

「お兄さん、たこ焼き食べるかい〜？」

「もう遅いし、いらん」

「へえ、そうですか……」

リビングとドア一枚で隔てられた六畳の部屋。ここでなにやら気配がする。大人になった一路は、ずいぶん付き合いが悪いが、そんな気配とくだらないテレビを肴に、一人で晩酌をするのが、マオの安らぎのようである。

ときおり、部屋からのっそりと出てきて、深夜に気に入りの“オランダシシガシラ(金魚)”を音もなく眺める。マオは何度も、この男の背中に驚かされたが、当の本人は、水槽に熱中して別の世界に行っている。

はたから見ると、ただそれだけの顔である。

(やっぱり、変わった子だ……)

いつだったか、ゾウガメがほしいと言っていた。冗談かもしれないが、もし、本当にそれを買ってやったとしたら、一路はどんな顔をするだろうかと、冗談半分、半分本気で、この四十九歳は考えている……。

少し飛んで、翠は二歳を迎えた。その母親は二十一歳。一路、二十六歳。

太一は十七で高校生。突如、野球を始めた。なぜなら、

（翠がおる……）

という理由からで、早く家に帰ると二歳児に絡まれ、母親には成績の小言をいつも言われる。いわば、太一の部活動は、母親と姪っ子からのひとときの逃避であるらしい。

また、この姪っ子の気に食わないところは、兄である一路は、ハートマークでも付いていそうなイントネーションで、

「お兄ちゃん」

と呼ぶくせに、太一のことは、呼び捨てか、よくて、

「おじちゃん」。

最近では、

「ハゲのおじちゃん」

と、坊主との区別もせずに呼ばれることが少しばかり傷ついた。

「これは、スキンヘッド言うんやぞ……」

「ちゃうちゃう、ただの小坊主や」

これは、母親のせいである。幾美は、一路に対しては半ば尊敬と憧れのようなまなざしであるのに対して、弟の太一はカス同然の子分である。目が合うと逸らされ、廊下ではち合うと舌打ちをされる、暴力こそ振るわれないが、抵抗すると、

（後々、めんどい……）

という一種の諦めの体質をもっている。まれに優しいときもあるが、普段の態度を勘案すれば、かえって気味の悪さが漂う。

太一は末っ子だから放漫にのびのびと育ったが、右のように姉のことは怖いし、歳の離れた兄には、どこかよそよそしい大人の壁があって、あまり親密に接したことがない。

しかも、東京帰りの兄は、妙な静けさと凄味を涼し気な表情の奥にずっしりと構えていて、なんととはなしに、

（兄貴は違う……）

という、静と動の怖さを持った兄と姉が、本当に自分の兄妹なのかと稀に思った。

その兄はというと、フラフラしていても風当たりは良好なようで、周囲からは、“何かの権威”であるかのような扱いで、マオに至っても、

「先生」

であるとか、

「お坊ちゃん」

と、この二十六歳を呼んでいる。

実家に帰っても母親には黙って金を渡されるし、父親には、コンピューターの手ほどきから投資の助言まで、とにかく小言を言われない。それがかえって、一路の居心地を悪くさせ、マオの

ところで、パラサイトシングルを貰いた。

そのくせ、マオと同じく子煩悩なところがあり、姪っ子の翠が可愛くて仕方がない。

携帯のメモリーには、翠の写真でいっぱい。そんな自分が面映い。

おしめを替えてやる、抱えて公園に連れて行く、女兒用品を見かけると、ふいに買って帰宅する。まるで一路が父親だ。

もともと、男は女ほど母性本能はない。が、いつからだろう……、翠の前では、別の自分が顔を出す。だから結婚も、

(まんざらではないのか……?)

などと自問した。したが、いざ想像してしまうと、変化してしまうかもしれない環境に対して足踏みがする。

「彼女はおらんの？」

二人の母親にいわれても、

「おるようで、おらんような……」

どっち付かずの回答で適当にあしらい、女子大生のようなカラッポの女ばかりをからかった。

この男は、プライベートを人には話さなかったが、ときおり、一路の“連れ”がマオの店を訪ねてくるので、否が応にも目撃情報として、

(こういう女が趣味なのか……?)

二人とも息子の恋路に干渉する気は毛頭なかったが、女っ気をみじんも見せない一路は、むしろ奥手であるかのように見えている。しかし実態は、どこで知りあうのか、若い小娘ばかりを連れている。

しかも、日によって女の顔が変わるから、

(そうとう手がけているな……)

マオは、こんな女たちの小姑になってしまったらどうしよう、と、少しヒヤリとしながら、幾美とは違った不可解な息子を影から見ていた。また、そういうカラーフィルターが出来上がってしまうと、一路の周囲の女が、すべて繋がっているように見えてきて、また、その繋がった場面を想像しては、形容しようのない怪訝な感情をもてあました。

一見すると、この男は、何を考えているのか皆目検討がつかない昼行灯である。というのは、外形的な雰囲気ではない。

近づいてくる女には、子どもが昆虫を喜び、ときに子供性ゆえの残酷さでむしり探求するように接する。たいてい、女は落下(一路に依存する)する。しかもこの男は、女、子どもに手を出さないなどという安っぽい騎士道も持ちあわせていないから、気に入らなければ容赦がない。が、そういう刺激が、かえって、女を惹きつけた。

いつだったか、マオは、

「誰が本命？」

と訊いてみた。

「やっぱり、顔か？ 尻か？ パイオツか？」

すると、

「そんな奴はおらん」

と、呆れたように言う。

「.....」

ウソか本当か、マオは、この“さみだれ男”の言葉に、少しばかりの安堵をおぼえた。

なるほど、エロスとフィリアの間で、女の研究でもしているのだろう。

では、

「どういう傾向で何がいいのか？」

そう、一路の好きそうな表現で迫った。なぜ迫ったのか。わからない。ただそこに、心配と嫉妬を含みつつ、迫りでもしないと、もてあました感情が緩和されない。

それは一種、怖いもの見たさと自己防衛という子どもじみた感覚を、マオは五十にして味わおうとしている。一路は、息子のように一人の男でもある。甥である時間がいくぶん長い、異性が絡むと、とたん息子が男に見えてきて、複雑な気分が訪れる。

一路はとっさには回らなかったが、そう訊かれて、分析をはじめた。そして、おそらく、

「みんなアホやから.....」

としか思えなくなり、突き詰めれば、孤独と純粋が“性”を捉える上での本質で、それを結ぶ作業を機能とするならば、愛やら恋という感情は二の次で良い。それは、作業を惑わせる材料であるとも思考にフラグを立てていた。

なぜなら、この男も、マオの影響なのか、尻に敷かれることが嫌らしく、異性に対しては、いつも受動を貫き、自分を有利に誘導してきた。

女に会えるかときかれれば、

「気が向かん」

手料理を振舞われても、

「料理下手やな〜」

と、万事がこのような調子で、そういう突っぱねが、女に対しての心理的リアクタンスとなる。マオの若い頃と同じかも知れない。

(それでいいのか.....?)

自問したが、この二十六歳には、

(若気の至りで勘弁してもらえないか.....)

結局は、自分がどういう心境であるのか、考える思考作業が滑稽に思えた。周囲にどう思われようとも、そういうものは、道德の世界ではないからだ。

ところが、だ。一回り年上の女とは相性が良いらしく、隠れたように交際を続ける。

既婚者。

顔はきれいだ。体つきもいい。北欧系のクォーターで日本人離れした容姿、それでいて、隔世遺伝とでもいおうか、祖父からという一足飛びの血の攪拌(かくはん)により、「外国人ベースの日本人」であり、ファッション雑誌に登場するような不自然なハーフモデルとは一線を画する。

実に軽妙洒脱で、こんな女が四国の片隅で暮らしていて、スポットライトの一つも当たらず潜伏していることに、欣然とした。

三十四歳。子どもなし。一般人は触れてはならぬような匂いがしているが、
「可処分所得が多いのよ」

と、妙にキレイな標準語で子どもがいないことを糊塗して笑った。

出会いは平日の映画館。暇があるところへ逃げこむ。

マオに似たのか、閑散としてうるさく、けだるくわびしい、それでいて、人気(ひとけ)のする空間が、どうやら一路も好きらしい。

甘ったるいチュロスを買ひ、黙々と口に押しこみ、氷の溶けきったアイスコーヒーを飲む。そんなことが、大して趣味などない、この男の至福の遊びであるらしい。

しばし、面白くもない映画をテレビのように眺めて過ごした。そしてふと、ドリンクホルダーに目を落とすと、隣の女に飲まれてしまった。

「ほれ、僕のやつなんですけど……」

それがきっかけで、弁償するだのしないだのと悶着になり、一食馳走になることで決着する。いわば、この承諾が、一路の女性観にメルクマールをもたらせた。

女は「瑞和(みわ)」と名乗った。

この字面は、スウェーデン（瑞）と日本（和）という意味から来るもので、なるほど、単純ながら腑に落ちた。身長が高くグラマーで、瞳は何色ともいえぬ紺碧碧眼、鼻筋はすっと通り、
「ぞっとするような……」

容姿である。総じて、美人といって良いだろう。ショートカットでボーイッシュなところが、その辺のバランスをはぐらかすポイントのように一路には映った。

大阪でもで育ったのか、歩くのが妙に速く置いて行かれる。硬いのか下着が正確なのか、大ききの割には胸はまったく揺れないが、後ろからでも覗くことが、男心をくすぐった。

わきの辺りからフェロモンが出ている。見えはしないが、自らの集中力を邪魔するあたりを意識しながら、上の空で話した。

すでに、負けているのだ。

この男は、公共の場においての女の露出には一種の無頓着さがあり、胸元が開けていたりすると、

「なんや、その服は――」

と、あえてジロジロと見てやる意地の悪さをもっている。

ところが、この女のその部分は見てはいけないような、なぜなら、どこにもラインが通っておらず、想像が希望的観測と摩り替わって、ふと視線を上げると、ライトの加減か、瑞和の瞳が瑠璃色に光った。

それが、昔、ラムネのビンから取り出したビー玉の記憶と繋がり、大切な物が見つかったような衝動をして一路に電気を走らせた。

ひとしきり正体が知れると、

「特技は、芋掘りなんだ……」

この女は、笑いを誘おうとしているのか、性的意味合いの言葉遊びなのか、ずいぶんと意味深なことをいうので、一瞬、呆気にとられてしまった。そんな刹那的時間に、瑞和の全身を一瞥して、頭で現像された“写真”をそぞろに眺めた。そぞろでなければ、瑞和への視線が、ただの“むっつり”になりかねない観察の難しい対象に、あれこれと抵抗して平常心を保ったつもりでいたが、ジロジロと見られても堂々としているこの女の挙措を見ていると、
(直視したほうが吉なのではないか？)

ということになっていた。しょせん、男の股間というものは、脳ミソの下にぶら下がっているのだ。

しかし残念ながら、確かにこのクォーターは、美人ではあるが、美人が往々にして持っている不幸ないやらしさがある。

ツンとしていても鼻につき、親しみがあってもわざとらしい。

「私、こうみえてモテないのよね」

「そうでしょうね……」

「あら、わかる？」

案の定、この女は、男を“月”にしてしまい、周りをぐるぐると回らせはするが、一向に近づいてこないという残念な容姿をもっており、鋭さを削げばいいものを、モテないことを気にして自分磨きに余念がなく、かえって、男を遠ざける、という単純なループの中で生きている。

「だからね――」

と、この女は、自分が“月”になろうと思い定めた。月にさえなれば、引力が男を連れてくる。

ところが、一路は瑞和に対して障壁を築き、この変わった女を敬遠しようと思った。

それは知りあって間もない既婚者だからという常識的遠慮と、瞬間風速にのぼせた先にある煩わしさや、不幸なことに、この男には、小奇麗な女への免疫が付いており、顔がキレイなくらいでは心は揺れない。

「可愛い子は飽きた。いまは、ブス専門……」

そんな言い回しは、花街の客引きの断り文句だ。

そこで、さて、どうするか。この女は、ひとまず一路が、

「好きだ」

と放った。

一路に近づく女は、いつもそう言う。そして、決まって一路を怖がった。それが、興味本位であることはわかっていたが、日本人特有の舶来崇拜主義なのか、この女の口からこぼれると、どうしてか、酔ったような気分になっているのだ。

想像してみた。いま、この女を押し倒したとする。が、想像の中の瑞和はひどく遊び人で、事がすんだ他所では、男の下半身を比較してティータイムを決め込む下品なアラサーと重なり、そんな辱めに飛び込む夏の虫になるのは、果たして本意であろうか？

考えるだけ、解から遠ざかるような気がした。

「なぜに、どこがいいんです？」

すると瑞和は、こう答えた。

「好きかどうかは、これから考える」

ならば、告白は尚早と言えないか。とはいえ、面と向かって好きなどと言われたことのない、この男は、初めて演歌を聴いたときのような、湿った電撃が走った。

そして、目の前のクォーターに、一抹の興味を抱き始め、既婚者だからというそういう思いが、かえって、心をたわめようとしていた。

この女の面白いところは、女特有の自制と気取りがなく、食事もたいてい「焼肉」で、平気で三人前は腹に収める。そうかと思えば、満腹の腹をさすりながら訊いてもいないのにウエストと体重をさらりとおしえ、男が幻想の塊であると宙で揶揄した。

「なに？ 女子会？ “アンチエイジ”の話しかしないわよ」

ドライブともなると、一路に運転をさせて、
「気分はどう？」

ときいていく。つまり、美人を乗せるのは楽しいか、と。

話はそれるが、徳島は、まだまだ車社会である。絶対的に車が優勢といってよく、男は金を稼いで車を買ひ、横に女を乗せることがステイタスであるといまだに信じられているから、瑞和のボルボを運転する一路は、徳島においての“なにか”である、と、助手席のクォーターは思っている。

「実は、それほど嬉しくないです」

「そうなの？ おっかしいなあ」

「僕は、金あったら誰かに運転してもらおうほうにステイタス感じますけどね」

そう言うと、瑞和は不敵な笑いを浮かべて、妙に上機嫌に運転を変った。そして、行き着く先は想像のとおりで、一路も、この不思議な空気にどこか心地の良さを見出した。

「この車、三台目なんだよね……。

やっぱ臨時収入はダメだわ。同じ事ばっかやっちゃう……」

徳島市の中心部には、眉山という山があることは、本編で何度も触れている。登山の手段は、ロープウェイもしくは徒歩である。車で登るならば、徳島駅から二区間、南に下った「二軒屋(にけんや)」という街から山の裏側であるしらさぎ(八万)区へ侵入すると登山口があり、くねくねとドライブしているうちに山頂だ。道すがら、半ば廃墟の“そういうホテル”が乱立している。

「瑞和さん、既婚者でしょ」

「そうよ、それが――」

どうした、と、もったいもぶらずに、服を脱ぐ。まるで、プールの時間が楽しみな子どものように、瑞和は、無邪気な裸体をおかしげな色合いの部屋にさらした。

「十年ぶりかな」

新婚当初、主と一緒に来たという。穏やかで、少し汗ばむ五月の昼下がりにやって来て、
「ちょうどこの辺りに――」

大きなクモが張り付いていて、それどころではなかったのだと、気味悪そうに笑った。

「あいつら、エビの味がするそうですよ」

「食べたの?!」

「まさか……」

ムードが重要であるなどとは考えなかったが、そんな話をしながらも、一路を剥ぎ取り、何事もなかったかのように事を始める。そんな間髪入れないこの女の突発性の「欲」が、いや、むしろ過程によって「性」を誘発せしめんとするその行為に、一路は少したじろいだ。

なるほど、女は自然にできている。人工的な男とは、同じ人間であること以外、どこもかしこも似て非なる。

道義的、などという言葉は、「義」など知らぬ者が使う言葉であるが、その何かしらの道義を意識することで、一路は、眼前の人妻から逃げようとしている。翌朝、剥がれているかもしれない瑞和の素顔を見るのが怖いのだ。

「ダンナとは貞操だけで結ばれてなんかないの」

(だから、裸で転げろと?)

そういう巡りの中でも、瑞和は能動を受動にすり替えようと、しきりに一路を刺激した。

はじめは、無機質ではあるがキレイだと思った。それには、むやみに触れてはならぬ神聖さが宿っている。ところが、瑞和は、男の神聖さを簡単に扱うかのような都会の雑踏的な暴力性をもっており、また、扱われてしまうことへの無力感や深い嫌悪感が媒介物もなく、一路の脳裏で静かに運動していた。

(ずいぶん、冷静やな……)

一路は、放り出された瑞和の下着を遠巻きに眺めて、不思議なもので、その単価の計算をやっている。

(高いんやろか……)

女など、下着の色でだいたい見当がつくが、どうも瑞和の正体がわからないのだ。

この女は、およそ、黒やら赤の下着を着けていそうなイメージであるが、脱ぎ捨てられたものは、母親も着けていそうなおとなしいベージュで、それが、奇妙な安心感に変わってしまった。同時に、秘めたるものに、とても危ういものがあるような気がした。

「私はオンナよ。あなたはオトコ。男女の仲に道德なんてありゃしないの。だから、世間=(男女の仲)っていうんじゃない?」

この男は、ぽかんと瑞和の声を聞いて思考を回していたが、本能だけは反らせず、あとは、ままよと従った。

一路がこの破天荒なオンナに敗北のカケラを見せられるのは、見目形もそうであるが、一面の心理を瞬時に口にできる思考感覚と、一步間違えると急に老けこんでしまうかのような危なっかしいコケティッシュさにある。

なるほど、雑踏は適度に心地よい。

雑踏は人を独りにし、独りになることで自分の内面に染み付いた生存のための息苦しい秩序を壊そうと試み、そこで、日常性を否定し、不真面目であろうとするものだ。

だからそこでは、自由であると同時に不安であり、また日常の規範を逸脱した開放感とともに後ろめたさも味わえる、と、池井望の『現代娯楽の構造』。

瑞和はまさしく雑踏で、一路の二面性を試す場所であるらしい。

そういえば――、出会って間もなく、自宅に出入りするようになり、夕食の買い物にも出かけたりする。

そこで、この女は、好んで、いたんだ野菜や凹んだ商品を（カゴに）放り込む。

「店に貢献してやってんの」

同じようなことを、昔、マオも言っていた。なるほど、瑞和の中にはマオがいる。無意識ながら、一路は（第二の母としての）マザコンであると自覚した。

＊

「お兄ちゃん、（迎えに）来た！」

翠が三歳を迎えた。日中、保育園にいる。そして、一路が迎えにいくのが日課である。

「そのほうが便利やから……」

という理由から、幾美の通う大学の附属病院内の施設に預けたのに、一路が迎えに行って実家で面倒を見てやるので、明美は、良い伯父を務める一路を複雑な心境でいつも眺めた。

一見すると、妹思いの兄である。一方で、ただでさえ複雑な幾美の家庭をややこしくする行いであるかのようにも思え、それでいて、家に寄り付きもしなかった一路が、翠目当てにやってくる。明美は母親として、嬉しいのか嬉しくないのか、そのくせ、一路の行いが昔のマオと重なり、

（本当に（マオの）息子のように……）

と、奇妙なさみしさも内包していた。

明美、五十八歳。二十七の一路を見ていると、

（あの頃、やれたことは何だったのか……？）

ふと、感慨深い想いが空中を巡った。

不思議だ。二十七歳の頃の記憶がすっぱりないのだ。強いて言えば、飲み会に参加して正体を失うか、家でテレビを見ていたという記憶だけがループしている……。それでいて、何を話していたのか、何を見ていたのかさえ思い出せず、ずいぶん乾燥した花ざかりの自分と息子を重ねて、羨望に似た嫉妬をおぼえた。

当時、友人の子どもに「おばちゃん」と呼ばれて落ち込んだ。なぜか、そんなことが何度も再生されて自分に対して妙だと思った。

「一路、晩ご飯、何がいい？」

「何でも食べるよ」

張り合いのない返事だ。弟妹のように、もっとわがまを言えばいいのに。

「じゃあ、翠は？」

「何でも食べる！」

つくづく、明美は、感慨深いようである。

味覚も一路はマオと似ている。手っ取り早く食べられ、きりよく中断でき、テンポよく腹に収められるソバが好きらしく、回転寿司も好物だ。

他にも、

「アニサキス（寄生虫）がおる……」

といって生のサーモンは決して食べたがらないのも似ているし、食べたことはないだろうが、
「土の味がする……」

と里芋を嫌い、

「名前が気に入らん……」

と“グリンピース”も職人のように隅に追いやる。まるで、親子以上の遺伝である。

ちなみに、幾美はシュリンプピラフ、太一はカレーと唐揚げで、カレーにソレを乗せてやると、

「今日、何の日？」

と、喜びを忘れて目をばちくりさせる始末で、全員、同じように育てたつもりであったが、見事にこの家の子どもたちは、各々好みが違うらしい。

とりわけ幾美は、単にめんどくさいのか、医者の不養生、紺屋の白袴で、放っておくと、インスタント食品やジャンクフードばかり食べており、しかも、父親に似たのか限定合理主義者だから、空腹さえ満たせば食パン一枚だろうが沢庵であろうが平気な性分。

学生の頃から食パンに納豆を挟んで朝食としていて、カロリーメイトさえあれば、生きていけるといわんばかりの生活だ。

今現在もそのとおりで、帰宅しても、温めもせずに冷や飯を無言で腹に収める姿に、一児の母親としての食育感覚が、明美には不安に思うのだ。

「(冷めたほうが)脂肪になりにくい……」

この女は、医学的なアプローチでもって摂取を是とするが、元栄養士の明美にとっては、栄養学的に翠を任せられないという危なっかしさをもっている。

いわば、翠を預かるのは、孫へのご機嫌にかまけた心配からだ。

そして、二言目には、

「育ちがええけん――」

と、その育てた親の前で冷や飯でも問題ないと、おかしなことを娘はいう。

つまり、この女の頭の中では、広い“大豪邸”に住んでいると、女給が食事を運ぶのに時間がかかり、口に入れる頃には冷めていて、温かい食事をとったことがない。ゆえに、猫舌なのだと、茶碗をレンジに放り込む手順の省略を意志にすり替えて不精するのだ。

「翠、おいしい？」

「うん」

「よかった。けど、“ばっかり”食べんと“三角”で食べなさいよ」

「？」

さすがに理解できなかったのだろう、目をぱちくりさせてこちらを見る、翠がとても可愛い。

幾美に似たのか、いや、元を正せば夫である。この親子は、だらしなさに何度注意しても、おかずを順番に食べていくという習癖を持ち、見事に遺伝を翠に繋いだ。

(一路や太一は、行儀が良いのに.....)

放っておいても、この先どんどん、翠は勝手に成長するだろうが、必然だけではなく、無駄とおもわれるようなものを内包し、折り合いながら生きていく、そういう、将来像を勝手に描いた。描きながら、

(自分の娘みたいだ.....)

この無垢な命を前にして、自分は「ばあさんである」という自覚が豁然と芽生えた。

少し、太一に振ってみる。

この末っ子の次男坊は、幼少の頃から血気盛んな悪たれで、ずいぶん両親は手を焼いた。

一路や幾美は、手応えのないほど大人しく育てやすい子どもだったため、父親も、

「キャッチボールができる！」

と、あれだけかわいがった“子どもらしい太一”のパワーにはついて行けず、小言は明美に押し付けた。

「太一！ 太一！ 太一！」

どれだけ、母親は息子を叱ったであろうか。学校や同級生宅からの連絡には、

(また何かやらかしたな.....)

と、いつも冷や汗をかいて、謝ってばかりの日々だった。

そんな太一も、高校生になって少しは落ち着いてきたかと思えば、明美は孫にかかりっきりで、気が付けば、進学問題が眼前にある。

が、当の息子の成績は下の下で、

(就職さえできれば.....)

それで御の字だと両親は考えていたが、高校二年の夏にもなると、どういう風の吹き回しか、

「(旧)防衛大学に進みたい」

というこの一言が、大塚家で太一の序列をひっくり返した。

姉の幾美は、アホの太一がそのような門をくぐれるわけがないと高をくくっていたが、兄の一路は、

「偉い！」

の一言で、その日以来、太一の勉強を見続けた。

徳島では、あいかわらず自衛官は、レスキュー隊か何かと勘違いされている雰囲気があり、国防がサイバー空間を所管するにあたって総務省と重なってしまったがために、まるで、消防団であるかのように語られるのは、基地のない地域(陸軍の駐屯地はある)のエゴかもしれない。

それでも、自衛官が国防のために必要であるのは、度重なる震災によって、日本人はサヨクですらしみじみと知ったし、不謹慎なのであまり書きたくはないが――、あくまでフィクションとして語ると、先の震災から連動して、西日本でも大地が揺れてしまった。

被害は、甚大でこそなかったが、一時的にマヒした非現実な関西の風景や、老朽化した木造住宅が軒並み倒れてしまった光景を、幻肢痛のように、徳島から見ていたあの虚ろで落ち着かない恐怖を、明美一家は知ってしまった。

そのとき太一は、五歳と幼なく、意味もわからず快活であったが、ニュースを怖がり目を背けてきたこの男児のなかに、何かが無意識に植わってしまった。

特撮ヒーローが大好きで、見よう見まねでポーズをとり、銃やら剣をむちゃくちゃに振り回し、壊れた街を喜んだ。それでも、「本物」を目にすると、自分の部屋に逃げ込み、膝を抱えてうずくまる。

そのときの息子の横顔を、明美は、走馬灯を見るような目で黙って見ていた。

あれから、十年を迎える。歴史と確率が正しいのならば、次は、関東が揺れるかもしれない……。

「覚悟はしている」

そう言いながら、人々はすぐに忘れてしまった。このお話では、あえて触れない。

折りしも、日本は、幾多の茶番劇(憲法改正案)といわれのない軍国主義批判を経て、憲法九条がようやく改正され、自衛隊は、晴れて「日本軍」となる。

いやそもそも、自衛隊が憲法九条に違反していたのだから、改正と言うよりは修正かもしれず、自虐教育の洗脳体験者がこの世を去ることで、議論らしき公論が起こったともいえるだろう。

道のりは、ずいぶんと長かった。過去幾度となく、反動の“ホシュ”たちが政権を担ってみても、教条的な愛国精神の正体はネオコンどまりで、結果、九十六条が限界だ。

「だから変えよう――」

ただそれは、言語感覚による反応でしかなく、個人的な意見を書いておくと、GHQ製の憲法などはさっさと廃止して、日本に馴染む常識ある新憲法を作るほうがふさわしく、憲法改正が自主独立ではなく、主体性なく米国と一体化する決意表明であるのなら反対である。

なぜなら、日本の「公」は、決して米国ではないからだ。

もちろん、改憲にあたり賛否や国内闘争はあり、後に禍根を残す方式のまま、皮肉なことに、あからさまな外圧と、周辺の軍事国家がせめぎ合うパワーの十字路で平和主義を唱える愚、社会主義市場経済というデタラメのしわ寄せが、日本の田舎に押し寄せる移民と主権問題は、多極化する世界とどう向き合うかを日本人に再考を迫った。

このお話は、あくまでライトノベルのつもりで書いているので、きな臭い軍事的ドラマを描くつもりはないが、あえて、希望的観測に現実を照らし発言すると、米国の気を損ねないような弱腰ナショナリズムから出発する妥協的弥縫策が今日の改正憲法のようなものである。

しかし、このお話の“現実”も、たいそうなものではない。

日本のカナリアである台湾の行方から目を背け続けて来た結末が、経済原理(ECFA)に絡めとっ

た中国の台湾統一であり、一国二制度が骨抜き香港と重なる。そして、日本のシーレーンを抑えられた先に見えるものは、横暴な大陸の要求、共産体制の不満がそらす反日という軍事衝突。

そうなったとき、アメリカが極東から逃げ出して、穴だらけの核の傘から見える現実に対して、日本人は直視するより他なかった。

それもそうだ。世界の舞台回しに気づかないふりをして、相変わらず北は崩壊しないし、米国のシェール革命も不発に終わり、資源で脅し続ける露のくびきは維持されたまま。パワーとマネーという下品な価値観を共有するよく似た二つのナショナリズム(米中)も、仮想敵国という戦争ごっこによって、日本を頼りながらも嫌い続ける。

そんな子どもでもわかるような幻想が晴れ、日本にとっての「世界」の正体が顔を出したとき、むろん、矛を手取るしかないのは、近代国家の宿命だ。

それは、遅きに失したかもしれない。

イノベーションを伴わない新興国のガス抜き、外資の逃亡、汎用化という効率が呼ぶ巨大な失業。ともなって戦争……。こんなことは、何百年も前から、形を変えて体験してきた。

日本はどうだ。メタンハイドレートとレアアースによって資源国に登りつめても、侵略とたかりを増長されただけで、製造業はオランダ病を患ったまま、労組離れがもたらす、一見、幸福な国内回帰と一貫性なき規制緩和、グローバリズムというマネーの逃亡。

その全てから目をそらし、それでも追い求める市場経済という怪しげな見えざる手は、かつての敗北によって信じこまされた「自由」という価値観の亡霊が、商法を媒介に協調的保護を鎖国とすり替えてしまった。

ここに必要なことは、パワーという裏付けでしかない。それらを神の仕業であると信じる人々こそ、何もしない裸の神様であることも知らずに。

徳島も、地方都市とはいえ、かつての神戸ほどに膨れてしまった。

しかしそれは、金の使い道を知らない地域金融が移民と外資に抱きついた産物であり、文化伝統に沿った発展とはいえない。また、間違った地方分権が課税自主権を地方に与えてしまったがために、四国州の主要都市は、税はかつての半分で、誰が決めたのか（おそらく米）、法人税がなくなった。それが水ぶくれの発展を推し進めた。

確かに、都会のようになっている。区割りも出来たし、公選の区長も仕事をしている。

ただそれが、徳島らしさも消してしまった。

「ずいぶん変わってしまったでしょう……」

そう、帰省した郷人に都市化を果たした故郷を自慢げに嘆いてみせても、またひとつ大阪に似た東京が出現したのみで、歴史を喪失させてしまった代償は、誰がいつ、支払うのであろうか？

高さ制限の条例は経済原理に絡め取られ形骸化、日影規制や斜線制限もなし崩し的に緩和に向かった。徳島城公園には、スタジアムと複合施設、眉山もトンネル(大深度地下利用法)で穴だらけ……。

社会や国の変化は、しょせん人のしわざであるから、いくら抵抗しようがしまいが、変わるものは変わっていくのかもしれない。

何がいけないのか……。おそらく、すべてだと一路は思った。大切なことは、発展よりも継承であることに、いつになったら、我々は気づけるだろうか。

それでも、徳島は外資によって、土地の強靱化を果たしつつあるのは、なんと皮肉なことだろうか。

「血税の産物だ」

と、いまだに一部の市民は、口を揃えるが、徳島市の中心部を走る鉄道全てが高架化を終えたおかげで、車も入れないような木造住宅密集地の区画整理を果たしたし、それによって、倒壊や火事、治安の安定、地価の上昇をもたらせた。この変化から派生する公共性は、一種の同床異夢の状態であるのかもしれない。

京都大学の藤井聡教授の言う、『亡国へのシナリオと救国のレジリエンス』を引けば、日本列島は大震災からは逃れられず、震災を経験することで強くなり成長するという。

このお話を書いている現時点(2013)で話せば、三連動地震が危惧される中、四国をはじめ日本列島に投資し強靱化しておかなければ、自国による救援復旧が不可能になり、そんな中、首都がやられてしまうと“国体”を危険にさらすだけではなく、同盟国の治安維持法と共に野心的な近隣諸国が日本に有事をもたらす。

それには、どんどん大借金をしてヒトとモノをつなぐ「道」を整備し、インチキな財政論を論破すべきだと。つまり、国防とは、ドンパチだけではなく、国柄を守るための戦いなのだと。

徳島も同じように、のほほんと全てを失うくらいであれば、市民は、ジェネラリストとして生きねばならない。大事なものは、変化へのコントロールができるかどうかであり、たいていの災難は、一種の人災ではなく、複雑に絡み合った構造的なインターフェイスが、この街を脆弱にしている要因かもしれない。

それらの解消は、専門家をはじめ守旧派や現実主義者にも、担えないように出来ている。

だが、ここには陥穽がある。日本を取り戻すための世直しが、結果、壊すだけの破局へと向かい、過去から引きずったものに筋を通さずに、偽りの自我によって、繁栄を謳歌したように皆が踊った。

「踊ることは自滅なのか、自滅が踊ることなのか？」

そういう引き返すことのできぬ選択を(サヨクの発展をパトリへの利益誘導と誤解したまま)、あろうことか徳島特有の利己的な“へらこい精神”で、なんとか過ごしていたようだ。

なるほど、眉山が女になるわけだ。

話がそれたが太一に戻すと、どこまで出世するかは知れないが、不真面目で野球とゲームにしき興味のなかったバカな弟の頭の中で、「国家」というものが少ばかり意識されていた事実にも、一路は兄として胸のシンが熱くなるような動揺と感動をおぼえた。

「やっぱりな、いろいろ解決するには、拳を握りしめとかなあかんと思うんよ」

漫画と猥本ばかりの本棚に、「小林よしのり」の名がある。なるほど、太一らしい理解だ。

どういう触発と洗礼を受けたのかは知れないが、問題は、日本人の足腰だ。その足腰は外交で

あり、外交は、武闘会であり、その勝者が、世界の優劣を決めていく。

かつての日本は、単なる「舞踏会」と勘違いしていた。そんなことに、いまさら気づいた。

一路は、太一を軍に送り出し、讃えてやりたいと是が非に思った。

「国防義務を持った奴を国民というんや」

太一こそ、まれな日本人であるらしい。

一方、この時点での太一の国家観は、少しばかりの青い正義と親への負担軽減という、できそこないの自分を回避、律するための、いわば、修行のような決断だ。

家庭教師(一路)がいいのか、ずいぶん成績は上向いたが、

「ほんまに受かるんかな……？」

姉の幾美は、バカな弟が幹部候補に勤しむ後ろ姿をみては、少しだけ心配を混ぜて、
(落ちたらいいのに……)

と、本気で思った。

ところが、翌年のやわらかな風が吹く春の日、太一は、日本を守る人になる。

果ては、海軍、空軍、陸軍か……、いや、サイバーだろうか。

手のかかる子ほど可愛いという。三人の子どもの中で、間違いなく太一が曲者だ。その曲者が敬礼している。詳しくはしれないが、軍服のバッジや装飾をみていると、幼い頃の太一が裸で走り回っている姿が思い出せれ、思い出しているうちに、明美の顔は、無残なほどめっちゃくちゃになって濡れていた。

このお話は、国防を論ずるものではないので、太一は適当に成長させるとして、大塚家と徳島の変遷に戻したい。

「なんでやねん！ どないやねん！」

二〇四〇年になっている。かくもゆゆしき、徳島の膨張（関西化）は、地理と比喻を曖昧に、砂上の楼閣にあるようだ。

大都市制度は形骸化が進み、大阪は関西州都を飛び出し、大阪・堺両市で、特別州となってしまった。かつて神戸に向けた敵対的グレーター制度は、はかなくも散り、広域連合というひどく軽い言葉の同盟は、後を追う徳島に“飛び地”である現実を迫った。

この大なり小なり商人の街は、日本とアメリカの関係とことさら似ていて、結局、同盟は主従関係でしかないのだ。

飲み込みはするが消化はない。消化してしまうと、自身の一部になっていく(この時代の徳島の人口は大阪の1/4)今の徳島は、影響力が看過できない……。

「あとは神戸に負けよう」

そうやって大阪は、様々なものを逸らしてまとめて押し付けた。

関西州都・神戸の誕生である。

州都が近づく。という距離的要因だけで喜んだ徳島は、ややもすれば、大和時代よりなんら感覚に変化はない。しかも、大阪よりも神戸を喜ぶのは、この二つの大都市を比較して、神戸のほうが、

「やわらかく、ほどほどで、隣人だから」

という単純な消去法による心理的な自慰に等しい。

しかし、現実は甘くはなかった。

道州制が敷かれたさい、関西と徳島のパイプを強化するため、淡路島を南北で分けて、兵庫、徳島県領とした妥協的禍根が、いまになって吹き出した。

「淡路を返せ」

というのだ。

徳島からすると、淡路島は本来、

「徳島固有の領土」(※大昔のはなし)

であるという主張だ。南北をぶつ切りにしたのも、仲直りを兼ねた連携だ。

それを、なぜ、いま、返せというのか。

「南あわじ区からお越しの〇〇様、お子様がお待ちですので至急——」

週末のデパートの光景だ。それが、もしかすると、

「関西州・神戸市からお越しの——」

となるやもしれず、これは、帰属意識もあるのかもしれない。

少し脱線すると、大抵の人は、出身地を訊かれると「〇〇県です」というように行政区の最高単位を答える。ところが、兵庫県民は、よほど国の成り立ちに不服でもあるのか、
「神戸出身です」

であるとか、
「姫路です」「芦屋です」「宝塚です」

というふうに、土着的な誇りが根底にある。それらの集まりが兵庫という総称なのであって、“兵庫”に住んでいるわけではない。が、兵庫を構成する一部が土着的に失われようとしたとき、離島に関して神経質になるのかもしれない。その点では、徳島よりも淡路を丁重に扱った点では、敵ながらあっぱれと言えよう。

そういう帰属という認識からして、遡れば、淡路にまつわる悶着は争いに絶えない。
「徳島が捨てたから兵庫になった」
「いいや、お前ら（神戸）が無理やり分捕った」

こういうことを、かれこれ何百年も両岸はしている。
神話を少し持ち出しても、物質をつかさどる神々が生まれた後、日本列島は淡路島を皮切りに誕生し、続いて四国、隠岐、筑紫島一一、と造成していき、ようやく最後に本州ができたという。

徳島、すなわち阿波国とは、初めて誕生した日本の地が目指した最初の地であり、だから「淡路(阿波路)」というのかもしれない、個人的な希望的観測を述べると、淡路島は兵庫県であるよりも、徳島県であるほうが自然に思える。

さておき、淡路は自然豊かでリゾート地を抱える観光地である。玉ねぎくらいしか採れないが、阿波踊りのお歴々は淡路島の奴踊りをリスペクトしているのか、へいこらと教えを請うという間柄で、コンクリートに固められた、両岸の都市からすると、手放すわけにはどうもいかない。折しも、博覧会と四国新幹線の開通が眼前に来ている。

玄関口である鳴門は、先にも述べたように大開発され、田畑は高層ビルの中（植物工場）に揃って移った。

人口、およそ三十万。
それでも、神戸が気に入らないのは、大阪の危惧と同様、徳島・鳴門を合わせることによるその影響力が不気味で、淡路は死守に値する。ハイカラな都会ほど、田舎者に養われて、自給自足の大きな田舎が、潜在的には恐ろしい。人口は、相変わらずの少子化でパイの取り合いになるしかないのだろう。

いわば、徳島の悲劇は、発展をパワーとみなされるすり替えかもしれない。
以降、号砲のない宣戦布告により、その不毛な争いは解決もなく連綿と続いた。そして、妥協の解決策が南北の境界を東西に分けたものだから、境目の住人は、大昔の岩手と青森のような気の毒な目にあうというのは、いわば地政学的運命だ。

郷土愛を揶揄すれば、太一の守るべきモノは、この小さな島国ではなく、島国の局所であるのかもしれない。

さておき、大塚家である。

一路、二十八歳。あいかわらず、定職にもつかずにフラフラしていて、日中、マオの店を手伝い、翠を迎えるというのが日課だ。

（それでいいのか……？）

当然、明美は考える。

マオの店は、創業以来の“どんぶり勘定”で、手伝いだけで暮らせる保証はどこにもない。

いまどき、メニューだけの訴求は絶望的であり、店のキャパシティからしても繁盛しようもなく、談話室と化したカフェに回転率を求めるわけにもいかず、否が応にも儲からないのだ。

「それでええのだ」

と、マオは言う。

一丁前に元役員だった明美からすると、息子と運命共同体の経営感覚としては、すこぶる危ない。

しかし、不思議なもので、マオの店は潰れそうで潰れず、不安定ながら安定しており、「不安定要素の免震構造だ」

と、一路も賢い傍ら、おバカな顔を覗かせた。

「マオちゃんの店はな、“タバコ屋”なんやからいけるわ」

つまり、タバコ屋はサービスや品揃えは大して変わらないのに明らかに売り上げに差がある。それはなにか。看板娘だ。一路は、個人がやっているカフェなどは、店主の人柄で決まり、熱烈なマオのファンがいるかぎり、そうそうに潰れたりはしないとミクロな観点で話を流した。

経済学部卒。資格もいろいろもっている。母親には、

「ウチの会社でー」

働けといつも言われる。しかし、どうも気が乗らない。

「ほれは、あかんよ。みんな潔癖やから。かーさんが困るわ……」

それが一路の口実だ。

この男も明美並に偏屈なところがあり、そこに、少しマオ（B型傾向）が乗っている。

経済学を勉強したのは、経済に騙されないようにするためであるし、いつまでも絶滅しない「B層」の奴らが大好きな、改革とグローバル化と効率をもたらす幼児化の結末から目を背け、人を育てない、あまり美しくない日本において、即戦力の名の下のもラトリアムの搾取にテクニックが至上主義と化したリクルート姿の大学生。

一路に言わせれば、例外もなく

「大バカだ……」

ましてや、能力をパワーとみなす田舎者の中において、少々の小銭のために母親の風当たりを強めるわけにはいかない。

「結果が平等でないのに、ネクタイ締めてアホらしい……」

残念ながらー、歪んだ公正が、田舎の平等だと一路はいいたい。いつからだろう、市場が公的な制度を捨てたのは……。

本来、田舎は住みにくいのだ。すべてそれは世間体から始まる。

ところが、いかんせん、個人や家族、社会の中間共同体が音もなく崩れ去った現代において、災害のあるごとに絆を演じてみせても、心にすっぽりと穴が空いた人たちが、寄って集って世間体を築こうにも、怪しげな民主主義が、同調圧力を作り上げ、平等の名の下、飛び出た杭を必死に処理する。

そこには、ひとかけらの例外はなく、実に、陰湿で姑息で人間が小さい。

「デキる奴は都会に出て行って、“パァ”がお偉いやっとるんが徳島やろうー」

そう言われると、明美は口をつぐむよりほかなかったが、一路の机には、企業の名刺でいっぱいだ。

なぜ、不安定を好むのか？

(医者と軍人の兄ちゃんが、優秀やったら嫌味やろうー)

それが、一路のマネジメントであるらしい。

＊

太一が家を出て一年と久しい。

現在、大塚家は、明美夫婦と幾美親子の四人家族だ。この家は、決して広いわけではなかったが、手狭になると誰かが出ていく傾向にある。

はじめは、一路が“はなれ（マオの家）”に住み、翠の成長とともに太一が出るという、つくづく、よくできたスタイルであるが、徳島市の中心部から五キロほど南下した新浜(しんはま)というところに、大塚家は密かに家を持っている。

(いずれ、両親を呼び寄せよう……)

そう計画して十年以上が経ってしまった。

その新浜は、徳島環状線、エコライド新浜線が開通し、利便はすこぶる良いのだが、“みなし社宅”からの買取とはいえ、住み慣れた常三島のマンションから離れられず、結局、人に貸すだけの財テクだ。

しょうがない。明美夫婦は、ほぼ人生の半分を徳島で過ごしてしまっている。

「ほんの数年のガマンだ……」

そう信じてやまなかった夫の転勤は、神戸本社の分社化で、徳島に拠点を移してしまった。いまになって、

「千葉に戻る」

などとは言えないし、いくら気をつかっていても、言葉の端々が、関西のものになってきている馴染みように、抗うことすらおぼつかないのだ。

「もう、ホンマに、この子は！」

そういえば、かれこれ、十年も前から、西の言葉で太一を何度も叱った。近所の行事にも参加する。旅行に行っても、

「徳島から来た」

と臆せず人に接する。これを、帰属というのか。こっ恥ずかしい阿波おどりのナンバープレー

トも、州外で見かけるとホッとする。

そうということが、太一を送り出してやった後の明美は、いまどきダイレクトメールで送られてくる息子の手紙を読んでは、何度も何度も、くどいくらいに自覚するのだ。

「拝啓 母上様やって……」

決して明美は、反戦平和の理想主義者ではない。秩序のためには、何事もパワーの裏付けがいることくらい感覚的に知っていて、お国のためにというような教条的な愛国心こそないが、わずか十九の息子が、身の危険を覚悟に日本の盾となり誇らしく思える。

核の出番はありそうもなく、軍事的衝突もない。だからといって、平和というわけでもなく、いつまでも英霊と終戦を向かえられないことに対する焦りであろうか。

学生だから戦場とは無縁だ。できれば、そうあってほしいと願う心はどこかにある。

国語が苦手なのか、あるいはストイックな生活がそうさせるのか、平明なノスタルジックな文体に、わが子ながら関心したり、冗談で自分を鼓舞するような、固い表現が不思議と可笑しい。

そこには、この国は守られているので、

「のほほんとお暮らし下さい」

そんな短い手紙を読むだけで、何度も目が滑って進まなかった。

そして、決まって文末には、帰った暁には、

「ソーセージカレーを希望する次第で、よろしくご検討のほどお願い致します」

とある。笑うより他ない。インドとドイツが好きらしい。なるほど、十九の国際感覚として、唐揚げがソーセージになるわけだ。

そんな傍ら買い物に出かけると、適当に野菜を買ったつもりが、演繹的にカレーを作ろうとしている自分がいる。いつも、太一がわきにいるのだ。

「またカレーか……」

夫には単純化してきた献立に不満そうな顔をされるが、息子のことが頭から離れないのだからどうしようもなかった。

カレーと言えば、マオの店でも、学生やビジネスマンがカレーばかり注文するので、さしずめ“カレー屋”のようになってきている。

「ここは、“パン屋”やったのになぁ……」

古い常連が懐かしそうに言う。

「いいや、茶店だ」

だから、カレーくらいは置いておく。

「とくしまカレー」

であるとか、

「鳴門で作られたカレー」

というように、マオは、なんでもないようなものにでも、付加価値をつけたがる性分であるが、その正体は、ボンカレー（※徳島発祥）を暖めただけのものであり、なかなか手抜きといえるだろう。

若者とは、とりわけ学生は、カレーを好む生き物で、活字でも読みながら、ソレを食しコーヒーでもしばくのが、ある意味での健全性を測るものさしであるというのがマオの持論だ。

この女も若い頃は、カメラを首からぶら下げて、神田は神保町をフラフラとスナップしつつ、読みもしないのに埃まみれの本を買い、その辺の喫茶店に入って、カレーとともにページをめくる自分に少し見惚れる。気に入りのペンタックスのカメラは、そんな柄にもない主の姿に少し呆れる。

「味なんか、どうだっていいんだよ」

他には、

「食品偽装はやらない！」

というだけの冗談で考案した、

「本当の焼きそば」（小麦が原料ではなく、本当のそばをソースで炒める）

や、ときおり焼くパンのバリエーションにメロンを挟み込んで、

「本当のメロンパン」

などを考案して、「何屋」なのかをはぐらかす。いつか、“ウグイス”でも入れて捕まるのではないか。

「ここは、何屋さんですか？」

その判然とはしないありように、エコノミーを超越した、昔ながらの感覚があり、客は少ないが、いつまでも絶えない。

一路が、ミクロな視点でマオの店を好むのも、そういう理由であるのかもしれない。

ところで、そんな店にもバイトが入った。何年ぶりかの大学生。女。二十一だという。

黒髪で薄化粧の総じて大人しい出で立ちではあるが、申し訳程度のピアスが野暮ったさを演出し、が、よく見ると整った顔立ちが、それらの要因を中和している。

歳ほどに、それほど若くは見えない。が、さして老けているわけでもなく、身体の部位は歳相応の張りがある。が、その独特の器量と雰囲気は、不思議なもので、一見すると、若作りに成功した主婦のような女教師のような、どこか“男好きのする”匂いがしていた。

加えて、寝違えたのか、ただ無精なのか、身体よりも眼球がしきりに動いて、チラチラと受ける視線がどうも気になる。

どうやら一路が好きらしい。そして、マオが母親だと勘違いしている。

実に愉快的な設定だ。しかし、当の一路は、バタくさ女にかかりっきりで、乳くさい大学生になど興味が行かない。

(いつか乳でも揉んだらう……)

そう、心のなかでからかって、この間合いに無頓着なバイト女を面倒に思った。

「ちょっと来てくれ」

と、呼んだとする。するとこの女は、密着すれすれの距離まで近づいてくるため、犬のようなイメージだ。

「外国行ったら撃たれるぞ……」

ただ、接客に対してもこのようで、しかも座って注文をとるために、これがかえって好感を与えた。

「ええ子やないの」

と、マオは言う。

確かにそうだ。性格もおっとりしていて、大昔に誕生した「森ガール」なる出で立ち、少々、“洋梨っぽく”むっちりしているが、見ようによっては属性になりうる。

そつなく真面目だ。何に怯えているのか、一路の言うことには、思考が止まったように見をこなす。そんな、イエスマンを見ていると、今すぐ裸になれといっても、本当になりそうで、そういう不気味さをも、とっさに感じた。

また、このバイト女は、自分の属性を滲ませる手法を意図があるのかないのか、ふいに勤務中だけメガネをかけたり、エプロンとの調和をはかってか、シャツを着てネクタイを締めたりするので、しごく普段着のマオと一路からすると、バイトの方が正社員くさくて少し疲れた。

いつだったか、店の奥で“変身”するアルバイトの着替えを見てしまい、意外な胸の大きさに、この複雑な女を見る目が変わってしまった。

この男は、先に怒鳴ったほうが勝つ――、という関西特有の心理感覚をもっており、計らずしも覗いたことを咎められる前に、

「こんなところで着替えるなよ！」

と、動揺しつつも平常心で持ち場に戻った。同時に、このアルバイトは、上半身を見られ、見られたのに怒られたことで、心の作用が昇華した。

はじめは、反省を口実に一路に近づき、間合いを計っては心理的距離を縮め、いつの間にか、一路の女を演じているのだ。なるほど、少し垢が抜けてきた。これを恋する女というのだろう。それを一路は“嬌態”と捉えて疎ましく思った。

仕事が終われば、やれ映画に行こう、買い物に行こうと間髪も入らず、決定的な汚点がないから嫌うこともできず、しつこさが熱心にかかわろうとした頃、女の家が上がってしまった。男女の仲とは、ともすると、こういうふうに詰まるのであろう。

そういうつもりであるのは確信している。上がりこんだのは、ソレの確認にすぎない。

（なんの匂いだ……）

整髪剤のような、なんと特定しかねる嗅いだことのある匂いが、少しだけ眼前のバイト女に蠱惑的酩酊をおぼえた。

ところが、テーブルの上にお菓子のカゴが陣取られ、部屋のあちこちにクマの人形ばかりが置いてある。少し数えて、七つを超えると身震いがした。

（こいつは、あかん……）

とたん、女のさみしさを癒す惰性的な日常が鮮明に頭を駆け巡り、急激に関心が冷めてしまった。クマの人形でも抱いて、ボリボリとスナック菓子を食べ、くだらないお笑い番組を延々とみているに違いない。

それが、決定的に、一路の嫌悪に変わった。それでいて、嫌いだとわかると、なぜ嫌いなのかその理由を分析したがるこの男は、バイト女を凝視して、爪が短くて嫌だ、香水の匂いも嫌だ、

野暮ったいくせに鴨居に吊るした原宿系の服も嫌だ、と、そもそも、そういう女の思考感覚が嫌なのだと、無言で服をまくり上げ、どういう機能なのかファアの付いたブラジャーに文句を言い、なんだかんだ言って、こんな女を押し倒してしまうのは、母性とでもいう属性への飢餓であるかもしれない。

つまり、いつも、自分の心の秤に負けるのだ。

「“ドリル”と“穴”の話をしっとるか？」

「男と女のことでですか……？」

「違う。僕は、いま、無性にウサギが触りたい……」

(何を言っているんだ……)

と、このバイト女は思っているに違いない。この男の頭の中では、要するに、ドリルを買う人は穴を空けるためであり、穴さえ提供されればドリルはいらないと回っているのだ。

そんな奇妙なことを説明もなく、ファアをウサギだと思って朝まで過ごした。

ところが、翌日は何事もなかったかのように出勤し、一路には無関心な素振りでやり過ごし、バイト女は半月ほどで辞めてしまった。

「やっぱり、好かん」

何がか。こいつが“女”であるからだ。

「浮気したでしょ」

不倫女は、一路にそう言う。どうやら、“バイト”との風景を見たようだ。

「いつ？」

「買い物しとった」

この女は、ときおり阿波弁が口に出る。そんなことが奇妙に虚しい。

買い物くらいで浮気という先走った邪推は、この女特有なのかもしれないが、男女など無関係に見えても摂理上は、いつも繋がっているのだという、経験則上の反射なのだろう、いつだったか、特技が“芋掘り”と言ったわけがわかったような気になった。

そして、ひとまず一路は謝った。

(お前やってそうやろう……)

と、この男は、思っている。が、弁明する方が瑞和の前では、うそくさい。

少し、腹がたったが、それは、ことなかれ主義を甘んじる自分に対しての不満で、それでいてこの女を責めもできない。いやむしろ、いじめられていることに湿った楽しみすら覚えているのだ。

ドライで大雑把で、包み込むようにして年下に甘える瑞和から、マオの匂がするからだ。

「ちょっと来て……」

そうやって一路の手を引く瑞和から、遠い、幼かったころの記憶が降りてくるのだ。

(一路、カニがいるよー)

用水路だ。用水路であれこれ捕まえて、飼って、逃がして、また捕まえて、バーベキューをして道路に落書きをした。空き地で焼き芋を焼いて、警察にこっぴどくしぼられた――。

たいはんがダメだという、母親よりも、遊園地やサッカー観戦に連れて行ってくれた父親よりも、マオとの時間のほうが楽しかった気がする。

時間が経つにつれ、少なくなる家族の集まり。そんな家族に斜めから干渉して鎧(かすがい)になり、マオは、誕生日や節句を押し付けがましくも祝った。

五月には、鯉のぼりを挙げてくれたり、七月には七夕、月見をするからとススキを採りに出かけたり、意外なほど質素なクリスマスをしたりと、せわしない日々にかられ、なおざりにされる文化的な感覚を、大塚家にしっかりと植えつけた。

血のつながりもないのに同居している。

(母親だろうか姉だろうか……?)

屋上で、洗濯物を干していると、ふいに、そんなことを考える。いい年をして、学生気分の下着やファッション。つかんでも、性的興奮は皆無だが、隣のマンションの住人に見られて目をそらす。

周囲にどういう風にみられても、家族以上の関係だ。

(もし、マオが死んだらどうする?)

そんなことは考えられない。毎年CTスキャンに入って、「異常なし」

で帰ってくる。そんなマオがいなくなる未来が想像できない。いつまでも、いつまでも、一路には、緩慢な楽しさが日常の中に転がっているのだ。

そんな楽しさのカケラが、瑞和の中にあると気づいた。それは、マオとよく似た“自然”である。一路は、瑞和に近づくことによって、ソレを覗こうとしている……。

少し脱線すると、“夢”についてあれこれと語ったフロイトというオッサンは、夢とは自分の都合のいいようにプロデュースする独善劇場であるという節のことを、しばしば語った。

例えば、顔が好みのAという女と、身体が好きなBという女がいたならば、夢のなかでは、それらを掛け合わせたような人物が現れるのだという。

ゆえにか、この男が瑞和を好むのも、母親のような豊満な母性と、マオのような性格を掛けあわせ、母親に対して足りない欲求と、ときに父親よりも父性を発揮したマオの匂いを嗅いで、瑞和に重ねて甘えているのだ。

「一路、お風呂入るよ」

「一人で入れる……」

六歳にして、やせ我慢をおぼえた。

嗚呼、なぜ太一のように、もっと母親に甘えてやらなかったのであろうか。考えても、合理的な解はないのかもしれない。が、それを見透かしたかのように、瑞和は、片手間で一路をいじめる。

それがなんとも、心地良い。

その昔、寒さに抵抗する方法は、寒さに満足することであるとうそぶいたアランという哲学者がいるが、今はまんざら信用に足る。

おそらく、マオも同じかもしれない。健啖家なところも、恐ろしく同じい……。

裸で転げ、ぶらぶら出かけ、肉を食べてさようなら……。なんと、単純明快な女であろうか。

ただ、この日ばかりは酒をあおった。怒っているのだ。

「そんな甘ったるいのなんかやめなさいー」

少々気分の良くなった面持ちで、エビスをしきりに瑞和は勧めた。はじめは、ヤケ酒に似たほろよいで、にわかに気分がよくなった。が、次第に自分の限度を告白し、それでいて、注文を通しては飲み干して、気分が悪いといいながら、店員が回ってこないと言文句を言う。

「5%（アルコール度数）までは大丈夫なのに一」

酒癖に、酔うと理屈をねじ上げ人に食ってかかることを“ねぢ上戸”というが、瑞和の場合、もう飲めないといいながら、無理やり注がれると飲んでしまい、しかも、無理やりすすめなければ機嫌が悪いという、厄介な癖をもっている。これを、

「ねぢあげ酒」

というらしいが、そういう上戸に先回りして、無理やり酒を進める側に立ち、そのくせ、一番はじめに潰れるという性質をも、持ちあわせている。

（ここは、マオとは違うな……）

少し、一路は救われた。

さて、そのマオであるが、恐ろしいことに五十二歳になっている。本人は若いつもりであろうが、栗色の頭髪からは白髪が幾本も見つかるし、いくら若く作ろっても、手の甲だけは相応で、小さいながらも胸の位置は下へずれるし、細いが締りが消えてしまった。

大昔、

「“あたい”が三十になるなんてー！」

そう嘆いた過去は、微笑ましい。振り返ると、なんと、若々しい叫びであろうか。

食欲は落ちない。いくら食べても太らないのが持ち前であるから、毎日、酒と煙草をガブガブと飲み、理由もないのに暴飲暴食。ジャンクフード大好き、スナック菓子大好き、不健康のオンパレードである。

「もうやめとき」

そうやって、一路にとりあげられることもしばしばである。

「一路、人間は、キレイに死んじゃダメなんだぞ。」

五臓六腑、これでもかってくらい痛めつけて、骨ひらう人がびっくりするくらいの体で死ななきゃ生きた甲斐がないっつーの。

だから、マオちゃんには、まだまだ不健康になる権利があるのだー！」

奇妙な理屈だ。こんな理論にまたがって、一本、また一本とビールを開けては、一路に絡むのが、この五十二歳の楽しみ方であるようだ。

家業がカフェであるのは幸いだ。幾分、経費で生活が成り立つ。その分、昼間パチンコにふらっと出かけては、いつも一路に叱られる。そういう毎日の繰り返し、この奇妙な関係(親子)といえるだろう。

「マオちゃん、そんなもん（パチンコ）儲からんでえ」

「一路、マオちゃんはただ遊んでいるんじゃないよ。偶然で遊んでおるのだ」

その関係は、ときとして、奇妙な哲学すら一路に教える。

それは、必然でないものを偶然でいさめているとでもいうのか、なるほど、夏目漱石がガラガラしているのと同じ構造なのだろう。さしずめ、この女もルーデンス（遊ぶ人）であるといえるだろう。

説教のテーブルの上には、「マズイマズイ」と酷評しているくせに、見かけると、なぜか連れて帰ってくる“たぬきのケーキ”がある。えずきそうなほどくどい生クリームとガチガチのスポンジケーキを味も香りもしないチョコレートでくるんで目玉を付けたスイーツ(?)だ。

こんなものを青汁のように摂取して、“息子”の小言を逸らそうとしている。それが少しいじらしい……。

「マオ＝ルーデンスやなあ」

「いいねえ、マオ＝ルーデンス。“プラセンタ明美”よりかずっとイカすぜ」

「どーでもいいけど、ズボン履いて食べ」

「あたしゃ、サンキュロットなのさ・・・」

それでも、一路に言われるとしばらく自粛するこの女は、仕事中にハイデガーやらヤスパースなどを読んでは膝を叩いて笑い転げた。

「偉そうなくせに、ほんま、甘いわ～、傑作っ！」

とにかく、こういう感じがマオである。

一人、マオに似た女が身近にいる。妹の幾美だ。二十三歳。大学、四回生。

といっても、医学部なので、あと二年は学生だ。その娘の翠は、早いもので四歳になり幼稚園に上がった。

危なっかしいことに、登園は一人でバスに乗り、毎朝五時に起きて、家族のリズムを狂わせてハツラツとしている。偶然にも、出席番号に当たる“翡翠(カワセミ)”のマークが気に入りで、そのグッズをことさら集めて欲しがった。

「あの子、自分の“由来”ってわかっとるんかいな……？」

さておき、この優等生の幾美のどこがマオに似ているかというと、成人すると、酒と煙草は平気で飲むし、授業の合間に、スロットマシンで遊ぶはで、不良とは言いがたいが、イメージとしての幾美の存在は皆無に等しい。

また、人体のあれこれを見て、一日の大半を机に向かってしているとストレスも溜まるのか、帰りの夜道で、スカートを捲りあげて歩いたり、橋の欄干に靴を捨てたり、ポストに下着を投函したりと、限りなくはた迷惑な行動をやっている。

「没個性化現象」

のはじまりだ。ただ、不思議とばれることがないようだ。

それがいけない。ばれずに奇行を繰り返していると常態化してしまうもので、スリルがだんだんなくなった。コインランドリーでは、梶井基次郎の『檸檬』を気取って、人の乾燥機にいらな

くなった下着を放り込んで愉快になるのも飽きてしまった。

こんな女が、一児の母親なのだから、始末に終えない。

そして、ある深夜、風呂からあがってコンビニに向かうとき、警察官に止められた。

「なんですか？」

「何でズボンを履いとらんの？」

こういう「公然わいせつ罪」すれすれの事態を、幾美は何度もすり抜けた。無意識とは実にやっかいな病理だ。

無意識によって、象牙の塔が逆さとなる。それでも幾美は、気にしなかった。なぜなら、
「偉人は変態的やった……」

という都合のいい確信があるからだ。

そこから、妙な性癖を肯定すらした。もはや、幾美は、こういう生き方に定めたのかもしれない。

しかも、その異常な性癖を増幅させるために、薬物も少しやっている。

医師の卵だからというわけではないが、幾美にしてみれば、少しばかりの興味と探究心がそうさせた。

かつての幾美は、薬物などクズ人間のやるものであると存在自体を軽蔑していたが、ドラッグについての知識がついてくると、薬物知らずの薬物叩きに違和感を持ち、身を持って体験することで、“あちらの世界”を覗こうとしていた。また、世の中は、薬物はいけないなどと、手垢のついたトートロジー（同義語反復）ばかりを声高々に訴えているが、実際のところ薬物根絶の方法論がまったくもって語られない。

だから、そのような、わかりきった精神訓練から逸脱し、薬物とは何か？ から切り込みたかった。

そして、打ってしまった――。

すると、確かに気分がよくなった。しかし、何かが違う気がする……。

想像では、およそ、見たこともないフロンティアが開拓されるであろうことを期待していた。が、そうでもなく、実体は、自ら持っている内面の部分部分が増長されるだけで、人生史を数分のコマ映画のようにして、眼球の上からただただ流れた。

はじめは、昔、飼っていたハムスターの埋葬シーンからはじまり、続いて、小学生の頃のクラスメイト（男）が尻を出し、ペンペンと叩いていると、“実”を垂らしたことが、酔っているような感覚の中、何度も何度も繰り返されて、気がつけば、奇妙なほどはっきりした頭で朝を迎えた。
(私、どうもなっていないんやろか……)

手のひらを凝視して考える。考えていると、とてつもなく小さなホクロを見つけた。それが少しショックに思った。

そして、朝食をとりにヘテーブルに付くと、母親に、

「(夜中) 冷蔵庫の前で何してたん？」

と、そういう奇行をやっている。涼んでいたとでもいうのか？ 幾美は、明美の言葉に動揺しつつも、

（あるかもなあ……）

虚ろに考え、クラスメイトの脱糞ばかりが思い出された。そのくせ、そういう記憶や自らの体験には動揺もせず、胡蝶の夢をせせら笑った。

そして、鮭の切り身をほじくりながら、

（大したことないな……）

と、思い定めた。

想像とは、はるかに違った。確かに、妙な気分にはなれた気がする。芸術家がたびたび、そういう手法を使うことで創作を助けるにはわけがわかるような、しかしながら、薬をやって描いた絵画にろくなものがないように、やはり、薬は大したことがないのではないかと、思ったりもした。

結論として、薬をやることであちらの世界を垣間見、そこから戻ってこられるのが芸術家とするならば、自称プロサーファーや三流ミュージシャンなどは、己を持ち上げるポーズでしかなく、そういうものに頼ろうとするからこそ、うだつがあがらないのではないかと、これくらいの高揚であれば、尻を出して夜道を歩くほうが、よほど、何かが得られるのではないかと。

薬物阻止には、薬物体験が一番で、むしろ、アメリカのように合法にして、世間に流通させたほうが、マフィアが干上がって良いのではないかと。大げさに言えば、皆が麻薬をやれば、中東の争いも治まるのではないかと。

「――なんというか、歯に挟まったものが取れて、それが好物だった時のような……」

スロットを好む幾美も、そういう、埒外の幸せを、マオと同じく偶然世界に見出しているのかもしれない。

ギャンブルが合法化されて十年あまり――。

鳴門にはカジノが出来た、ホテルができた、会議場ができた、それらをまとめたマイルスもできた。

「ほら、やっぱり……」

市民は偶然を欲しているのだ。

二〇四二年。

大塚家の長男は、三十歳になってしまった。

「一路もおっさんやねえ」

そういうマオは、五十四。

「うちの翠は、今年、小学校なんよ」

と、ババアの明美は、六十一。

なんという、時の仕打ちであろうか。

徳島の膨張は、ゆるやかに止まった。かのように見えていた。ところが、しばらくすると、鳴門に761メートルもの見栄っ張りタワー建設の賛否運動が連日、報じられ、来る日も来る日も飽きることなく、

「反対！」「賛成！」

と、気が滅入るほど見慣れた光景が、一般論の枠から飛び出すことができない。

(そんなもん、ヒューマニズムで語るなや.....)

そんなバカな闘争を見ながら、暇そうに店番をするのが一路の日課だ。

マオは相変わらず、偶然で遊ぶこと(パチンコともいう)に余年がなく、遊ぶためにバイトを雇うのだから、ずいぶんな身分だ。

その新しいバイトも若い女で、またもや一路に惹かれてしまった。

「アンタも隅に置けないねえ」

「いやいや、※不協和解消の心理でしょう.....」(※いつも一緒にいると好きになる)

器量は申し分ない。ないが、いかんせん、文学少女っぽい雰囲気気が気に障った。

マオが母親であると勘違いしていて、気に入られようと取り入るさまも、いちいち、一路にはうっとうしく思えた。

それに気をつかって出かけるというのが、マオのサボリの正体だ。

「一路くん、ホント好きね、ソレ.....」

瑞和は、映画を見ながら黙々とチュロスを齧る一路が、“ビーバー”のようだと笑い、そう思うとおかしくなって肝心の内容が頭に入らなかったと、少し怒った。

一路は、なんとなく煩わしい職場関係に不満をこぼしながら、もうじき四十になる女に、いっになく愚痴を話した。

「その子ね、チェーホフやらイプセン好きいうんですよ」

「アッハハ。わかるわかる。私も偉そうだから大嫌い。何が人間解放だっつーの」

瑞和は、扇いでいるのかタイトルを遠ざけているのか、暑くも寒くもない部屋で、奇妙なジェスチャーをして大げさに笑った。

安心した。マオとよく似た理解だからだ。おそらくこの女も、太宰治は嫌いだろう。村上春樹にも容赦がない。

一路は、この恐ろしく北欧的な顔立ちの女に、日本的な裏付けがちゃんと通っていることが不

思議でたのもしく思えた。一方で瑞和は、一路の愚痴から背景を捉えているようで、
「モテるのねえ」
と、湿った皮肉でからかった。

色男 金と力は なかりけり――。

一見すると、この昼行灯は、女に不自由をしていないが、実に不自由であると、瑞和は一路に対して思うのだ。この男は、女に対してへいこらとおべんちゃらを使わず、えてして無愛想なところがあるが、女の直感とでもいう感覚をくすぐり、自動的に、好かれることがままにある。

終始寡黙でのっそりと人に近づけば、静かな凄みに押されて、たいてい、“公人”を“私人”にしよう。

例えば、標準語で話す店員や受付嬢に話しかけても、素の言葉を引き出してしまう妙な資質があるようで、瑞和と一路は、どこか似ている。

それは、限りなく左脳で物事を考えていそうで、その実、右脳から紡ぎ出される感性が人に揺らぎを起こすのだ。

関係があるかどうか、甚だ不確かではあるが――、幼少のころ、一路は左利きだったらしいが、母方の祖父母に右利きに強制されてしまった経緯がある。いまでは、すっかり右利きとしての人生を送っているが、左右の握力は大差なく、モノをつかむ場合、無意識に左手が出るという名残がある。

それが、どこか、右脳と左脳の働きに影響を与えて一路をたらしめているのではなかろうか。

その日は、瑞和の自宅に上がりこんで、セロリやらふ菓子といった、とにかく細長いものを、ビーバーのように食べてやり、さんざん笑わせておどけてみせた。なぜ、そうしたのか。おそらく、瑞和のような女が、おやつにふ菓子を食べているさまがおかしかったし、そう思った瞬間、

「こんな金魚のエサなんか食えるか！」

という、マオの顔が浮かんだ。それが、この女との差異なのだと気づいたとき、単に笑うよりもおどけるよりほかなかった。

瑞和が隣に座ると、香水や制汗剤と一緒にラベンダーに似た、

「お盆に嗅ぐような……」

線香の香がする。香でも焚きつけているのかもしれない。そのことを瑞和に問うてみたが、表現がまずかったのか、

「私がババクサイってこと？」

一瞬、ムッとなったが、千葉の祖父母の家の匂いだというと、郷土に近いせいか、とたんに、一路のルーツに話題を逸らした。すると、ルーツが深堀されて、

「私、アイヌかもよ？」

と、何を企んでいるのか、瑞和は、この男の返答をうかがうように、小声で放った。

この時代のアイヌとは、無知な国会議員らによる善意に絡めとられた文化保護法で、指一本でも触れると大爆発を起こす特権階級である。無知とヒューマニズムによって作られた人工物であるから、自動的に社会資本システムに組み込まれて、ただそこにいるだけで拍手と礼賛が投げられ、疑問を呈すると、文化破壊と人権侵害に問われる。

そんなことが二千年代の一桁で決められて以降、増長し続け、いまこのように書いている筆者も、いつか抗議を受けるかもしれない。

一路は、このカミングアウトによって人の根底を探るかのような、男を測るバロメーターの一端を垣間見た気がした。

「私、マフィアの女なの……」

と言わんばかりの告白だ。むしろ、マフィアの女であったほうが楽かもしれない。

しかし、下半身以外、この右に逸れてしまった男には、アイヌと聞いても、弱者利権を振り回し、民族を分断しているだけの奇妙な団体イメージしかない。(※混血が裏付けられ、沖縄人と近いと遺伝子解析されている)

「実は、僕もヤマト民族(つまりは日本人)なんです……」

瑞和は、北海道で生まれたというのが育ったのは関東州の東京だという。

「一路くん、どうせ私は、代官山あたりのお嬢様だとでも思ってんじゃない？」

「違うんですか？」

一路は、とぼけて返した。自分への戒めといって、年がら年中、ノースリーブの服を着て体型を気にしている瑞和のファッション感覚は、いかにも、山の手の女であるからだ。

「それがさ、旧江東のしがたいポストマンの娘なのさ、私は……」

一路は、黙って聞いていた。すると、なぜか、瑞和の瞳の中に仙台堀川公園や砂町銀座商店街が見えたような気がした。そこでは、柄にもなく柴犬を散歩させている。

瑞和は、その一路のさして関心のない表情をとらえて、驚いたのか安心したのか、よくわからない表情でとつぽくと話した。

「学生時代は、あんまり勉強しなかったし、あの頃特有のアンニュイな気持ちが自虐になってね、精神的彷徨っていうのかな――、東京を飛び出して徳島の大学に入ったの。

中学生かよっ！て。どうぞ笑って。そんで、卒業して、そのまま結婚しちゃった。

阿波弁もけっこう流暢に話せるんだよ。でも、男の人がよろこぶから面倒でやめたの」

そこまで話すと、食べかけのうどんを一気に流して、

「一本うどんが食いたいなあ……」

なぜか、阿波のイントネーションでつぶやいた。

好きになった女のことは、あまり知らないほうがいい。湯気立つ器を見つめる瑞和をみると、この三十路男は、なんだか、今日でこの女とは最後なのではないかという感覚をおぼえた。

少し伸びた瑞和の後れ毛が扇風機に舞って頬をこすって揺れている。

もうすぐ、七月。

瑞和は、幸せだと無言で言う。が、そういう態度を使って自分がやっていることを納得してしまうのが怖いかなのような、そんな不安が一瞬、のぞいた。

＊

そこかしこで囃子の音が聞こえ始めたら、マオの店は閑散とする。

徳島に移住して、ずいぶんな歳月が過ぎたが、この時期だけはうんざりだ。

八月に突入し、阿波踊り間近になると、老若男女、どこにそんな体力があるのか、総仕上げのごとく近所の公園や公民館で毎晩練習に勤しみ、ただただ、燃え尽きることが至上命題であるかのような踊りに、どこか暑苦しい感じがぷんぷんとしていた。

しかたがない。メインである徳島市中心部の阿波踊りが、かつての郊外であった北島のビル街でも行われるようになり、交通規制の緩和も相まって、本来、四日間の日程が、鳴門、北島を合わせるところ十日間に拡大していて、燃え尽きる阿呆の練習量も格段に増えたということか。

どこで間違ったのか、観光客獲得のために、踊る阿呆は、見せることが最重要となり、フォーメーションと称されたふるまいに、見る阿呆を踊りに引きこむ情熱が置き去りにされてしまった。

「達者だけど、二連(二組)見たらもういいよねえ……」

美人は三日で飽きるというが、虹は半時間で飽きるという。

いま、阿波踊りが目指しているものは、弱小軍隊の行進のごとく、ただただ揃って、文化交流の名のもと、奴踊りだのすずめ踊り、エイサーに小型のねぶたと相容れないものを二拍子でやる。

これが連日、夕暮れから明け方まで、チャンカチャンカ、チャンカチャンカ、と、既に「盆踊り」の趣旨が飛んでいるのだ。

文化とは、ときに文化を破壊する可能性を秘めているが、そんな自戒を置き去りにしたなりふりかまわぬ集客が、文化保存の名のもと、神事までもを観光資源として捉える人々の心に組み込まれた受信機は、不具合があるに違いなく、さぞ、先祖や蜂須賀公は、あ然と眺めているだろう。

「昔といっことも(※まったく)ちゃうんぞ……」

そう、飽きもせずに日がな一日座っている年齢不詳のじいさんが、寂しそうにコーヒーを啜った。

そんな中、市内中心部の住民は、お祭り気分とは裏腹に、期間中、旅行に出かけたり、親族のもとへ避難するなど、穏やかな日常はないらしい。

さらに、徳島でのお盆は、正月であるともいい、つまり、この街は、阿波踊りを起点に一年が回っているといってよく、この特殊要因のとばっちりで、期間中は、客足がぱったりと途絶えてしまい、

「商売、上がったたりだ！」

と、ろくに店にいないくせに、マオは不満に思うのだ。そのくせ、せっせと見物としゃれ込ん

で子どものように遊ぶのは、両価性ゆえの興である。

さて、そんなマオの店である。

実質、主は一路で差し支えない。いやそもそも、喫茶店などお遊びで、マオの伯父の財産を半分贈与されてから、入居するビルを買い取ってオーナーになり、花街で得た人脈に投資して、いつしか、身体が冷えるほどの小銭の音が実感もなく聞こえた。

しぜん、それなりの付き合いが出来ていて、さしずめ一路はなんだろう。

普段着はパーカーとジーンズというラフな出で立ちで、カットは五百円の美容院。ひどく中性的な顔をしているくせに、核心をついたような物言いは、公論を生み出せない世間に対して手厳しい。

徳島人の気質というものは、議論が好きなくせに、その実、一般論に行きがちで、原則論も戦略論にも着地できずにいる。無知なのだ。その正体は、今ひとつものにしてもいいくせに、知っているとは勘違いしているチェスタートンが名付けた病理に等しい。

そんな彼らを阿呆と呼び、ニワトリのように愛でてしまうのは、叱咤激励の一種かもしれない。

商店街の集まりでも、

「対案がないなら従えー、発言せんら帰れー」

と容赦がなく、その悪者を引き受けてしまう個人主義は、しばしば青年部をすっ飛ばし、そのくせ、年寄りの意見を概ね正しいとする判断は、不思議な均衡をこの町(北島区)に与えた。

女も何人、からかったであろうか。ふと端末の手帳を開けてみた。「正の字」が四十もある。気持ちの悪いことに、この男は、そういう行為を把握している。

「どうしようもない人誑しや……」

そう自分に対して嘆いてみせても、徳島、強いては四国州の人口を浮かべて、その中の女の数をもとに、多いか少ないかという光明思想で気分を鎮めるという方法は、どこか妹の幾美と構造が似ていた。

だが、こんな男に群がった男と女は、一路に酷評されて喜んでいるのだから、一路という男は、一種、教祖じみた天性の何かがあるのかもしれない。

また、手先が器用で造形物が得意だから、いつしか「先生」と誰かが呼んだのを契機に、その“先生”という響きが独り歩きして権威をまとわせ、美少女のフィギュアを熱心に制作してホビー展に出店するという意外性が、一路がそういうふうであるから、こそ、類まれであるかのような雰囲気を作った。

「みんな、アホちゃうか……？」

近頃では、五十を過ぎたような州の役人が、一路の元へやってきて、

「どない思います？」

「社会を保障せんと、是正もなにもないでしょうー」

それを横目に、アルバイトの一路への眼差しは、一見すると、夫婦のような雰囲気である。こ

れがかなり疎ましい。

例えば、あれしろ、これしろ、と、阿吽のツーカー。一路が座ると、コーヒーを出し、自宅の家事まで勝手にやる。下着がくたびれていると買ってきて、

「パンツ、買っておきましたよ」

「あ、そう……」

「商工会からお電話ですよ」

「あ、そう……」

と、そんな昭和の“天皇”のような受け答えが、かえって親しさを演出するのだ。

今時、男の後ろを三步下がって歩くのだから、やりにくくて仕方がない。おまけに、一路以外、誰も見えていないのか、いっこうに常連の顔を覚ええないのだ。

「相貌失認症(人の顔が覚えられない)かもよ——」

そう妹の幾美にからかわれても、お構いがなく、いつだったか、小学生になった翠が、店に遊びに来た時、

「結婚したらあかんの！」

と、泣きだしたほど、この一方的な関係は本当くさい説得力がある。

「違うんよ。お姉ちゃん、ここのアルバイトやけん、お兄ちゃんとは結婚してないんよ」

そう、バイト女は、翠に言い訳論していたが、そのじつ、関係を勘違いされたことが嬉しいかのような表情を、一路はあざとく読み取った。

少し、想像してみた。この女との結婚生活。だが、無理だ。一路の頭のなかでは、男の保護本能を、いつの間にか義務にすり替えてしまわれかねない。それが、とても息苦しい。

(生命倫理にしたがって……)

そうやって、裸の体操が、すべて子作りになりそうな偏屈の暴走が、このアルバイトのなかに見えるのだ。

マオは一路の隣についた女をまるで自分が小姑になったかのようにあれやこれやと想像して、感慨深くなるのが“母親ごっこ”の常らしい。

しかし、マオは、この菜食主義者が気に入らなかった。まかないを出しても、まったく肉に手を付けないのが健啖家の対象物として気に食わないし、植物には命が宿っていないかのような生命差別が下品で、休憩時間には、大江健三郎などを読んで何かに浸ってうっとりしている……。

行儀よく振舞っているつもりか、パンはいちいちちぎって“おちょぼ口”で食べるし、パスタはスプーンの上でグルグルと——、

「あういうのを江戸っ子の半可通ってんだよ」

嫁と姑が上手くいく道理などないことくらい、独り身の想像だけでも事足りる。心配ができるのも、親の特権なのかと、この奇妙な不満へのなだめ方を自分に施し、ふと気づく。

(お姉が一路の親だった……)

その母親の明美も、三十にもなる長男が、所帯も持たずにフラフラしていることを、いつも気にかけていて、若かりし頃の自分を棚上げに、

「いい人がいるのなら……」

そうそうに結婚して、落ち着いてほしいと考えているのだ。

この女は、あくまで観念において、決して封建的ではないが、家族構成における序列や時間軸でいうならば、長男から結婚して孫の顔を拝んでいくことを自然に思った。だから、息子に女の噂が流れると、姑にたてつかない大人しい花嫁像を想像しては、いつもがっかりさせられてばかりで、これも“遺伝”なのかと肩を落とした。

「遅れてきた反抗期」

そう、マオは一路を呼んでいる。

どういうことかという、この男は、普段は温厚で何を考えているのかわからない昼行灯ではあるが、怒ると誰にも止められないという。

先日も、歪んだ思想とぶつかり、警察の世話になってしまった。

眉山山頂で行われる、パゴダという仏塔での阿波踊り中止と、その意図の変更。いつまでも遷座を知らせない護国神社の所在地、教育委員会による人間崩壊のオンリーワン政策、地元メディアの言論テロ――。

「ほれは、変やぞって言うてるだけやのに……」

人は一路を右翼と言う。“人権委員”とも犬猿の仲で、なるほど、そのレッテルは、とても危ういものがあるかのように惑わせる。田舎でいう「保守的」とは、警察用語でいう暴れん坊だからだ。

ときに己の“感覚”を守るためには、それに限定される品行を拒絶しなければならない。

そして、それを貫くには“民族派”であろうとも、“プロ市民”であろうともした。

「いいかげん、右か左かの神学論争やめんと、(分割統治された)被保護国のままや……」

弟の太一が、国防(防衛)大を目指したとき、一路は少し後悔していた。もし、十代で太一と同じ決断をしていたら、少々はマシな“国民”になれたのかもしれないが、税金もそこそこに、日本人をやらせてもらっていることに、いつも居心地が悪く、他方、世界は、混沌を極めるばかりで、情報戦に敗れ続ける日本においても、内側から喪失される歴史に向かって、申し訳ない気がしている。

だから、密かに決めたのだ。

「三十までに死んでやる……」

それが、のほほんと姪っ子のことが可愛くて、志は空回りし、太一のようにはなれずじまいだ。テロリストとして殺してやりたい人物もおらず、陰鬱な気配ばかりが己の身体を取り巻いて、ろくでもない連中と付き合う傍ら、瑞和に甘えて、あとは翠のことでいっぱいだ。

「お兄さん、捕まるなら、もっと派手なことやらかして捕まらなきゃダメだぞ！」

不思議なものだ。問題を起こした日に限って、帰宅すると、マオがカウンターの裏で座っているのだ。この第二の母親も、たるみきった徳島にストレスを与え、緊張感を維持させる、いわば一路のソーシャルキュアに異論はない。

が、相変わらず運動家を書いたような紙面ばかりが常識として駆け巡る徳島において、全体(民主)主義という圧力によって、息子の身も危険にさらされる日があるのではないかと。

と、奇妙ないいかかりで送られてきた一路への訴状をボンヤリと眺めながら、鬱々としていた。

普段は、明美とよく似たやる気のないタヌキ顔が、ふとした拍子に、秘めたる“戒体”がにじみ出て、

「怖い……」

という形容にこの男を導く。瑞和は、そんな一路を、

「健康的だ」

といい、明るすぎて陰さえ見えない不健康な輩よりも、この男のように、のほほんと周囲に睨みをきかせて、それでいて自覚もない生け簀のナマズに可笑しみを感じる。

眼光は炯々としていて、ひとりでに人が射抜かれる。腕っ節があるわけでもないのに、圧力に対して、人よりも怖いという感覚が鈍いらしく、いかなる人物とも別け隔てなく対峙することのできる、腰のすわり用が周囲は畏怖と映るのかもしれない。

これは、説明ができない。超能力があるわけではないが、人の唇の先が読めるのだ。しかも、この男の思考には“獣道”があり、神経の信号が頭を介さず五感に行く。

だから、ソレが先回りして、なだめたり、言い負かしたりといった言葉の駆け引きが並外れ、決裂で刃物を向けられても、刺すか刺されないかが、なんとはなしにわかるのだ。

これは十分、恐ろしい。威嚇が通じず、見透かしたような心理作用をもって、己の感覚にのみに頼った不満を排除していく。

それは、しごく、勝手な社会学とでもいえる“公”かもしれない。その辺にいるサラリーマンや商売人が、一路より抜きん出て優れているわけもないから、

「空き缶を拾ったら喜ばれるだろう……」

という程度の感覚を持ち前の子供性に絡め取られ、それを美意識と同列に置いているのだ。

なにが、この男を、そうさせるのか？

それはひどく、単純かもしれない。

この男は、日本の停滞は、欧米アジアの情勢でも、五十円台に突入した為替問題でもなく、「情報戦争に負けっぱなし……」

だからだという。

金融緩和と財政出動、一貫性のない規制緩和――。

しっかりとした日本という国柄を進んで身売りする商法支配によって、間接的にへいこらと、諸外国のお為ごかしが“ビンの蓋”になるように、

「いつまでも、砂漠に咲いた毒花や」。

世界各国のように、我が国は、情報機関を有しない。米国を真似て作ったNSC(国家安全保障会議)も、分析こそすれ肝心の情報収集をやらない。これが何を意味するか？ 不自然な文化の衰退でしかない。

それには、戦前と戦後に筋を通し、情報戦争に立ち向かわなければ、日本人が十全であること

が難しく、どうにも、不条理な現実を、甘んじて受け入れるしかなく、小手先の対策や協調など、もはや、茶番劇でしかないというのだ。

それには、拳を握りしめたきな臭い交渉からはじまり、もっと子どもにならねば、骨の髄までしゃぶられ、台湾の諺にもあるように、

――柔らかい土は深く掘られる。

かつて徳島の急速な発展は、遅ればせながら機能した至上主義経済に絡め取られて、左と右が、自分たちの役割を忘れて、つかの間の「中翼」になってしまったことにある。そこには、おおまかな社会観がない。

「この街には、フリードマン(市場の競争)やシュンペーター(イノベーション)、ケインズ(金融緩和)はおっても……、

ダニエル・ベル(公共計画)とカール・ポランニー(社会に市場を埋め込む)がおらん――」

世の中の九割は間違っている。それに、ノーと言っているのだ。

それは、正しい。正しいが、明美が心配しているのは、この州（四国）では、「保守」をマフィアか何かと勘違いされていて、ふとした拍子に、本当に捕まったりはしまいか。

それが、しごく、心配だ。

マオは、そんな公人としての一路を見ていると、喜ばいいのか嘆けばいいのか、悩ましい想いが、頭の芯に、いつも、奇妙な疲れをもたらせた。

＊

マオの母親が生きていた頃、夏休みになると、大塚家の子どもたちを引き連れて、神奈川の実家に帰省した。

「来てくれてありがとう。好きなだけ居てね――」

そう、亡き母は、まるで自分の孫に接するかのように、一路たちを家族のようにもてなした。実家は、横浜といえども、ずいぶん閑静な場所にあり、周辺は、ポツポツと田んぼや畑をやっている。用水路もある。そんな、都会に帰省した田舎臭さを脱するため、いつも東京方面へ遊びにやり、そのさい、九段の社で手を合わせた。

「誰のお参り？」

「みーんなにお参り。一路や、一路のとーちゃん、かーちゃん、じーちゃんばーちゃんがいるのは、ここの人達のおかげなんだよ」

人はみな、歴史に生かされているということを、自分に対して示していたのかもしれないが、おそらく、これが一路の思想的立脚点となったのかもしれない。太一が軍を目指したのも、遊就館を喜ぶかたわらのパトリかもしれない。

祭り好きの次男坊に至っては、阿波踊り真っ最中の盆の暮にも、高校生の分際で、一人で東京に飛んでいく。中学のときは、金を借りに来たぐらいだ。

「ご苦労なこったね……」

「いや、ホンマは祭りで女の子と遊びたいんよ。ほんでも、行かなあかん気がする」

なるほど、公の心が、太一をそのように操作している。一路も同じだ。そう思うと、マオの父親の死が、別の記憶と連動していた。

マオは母親の影響で、ミッション系の学校に通った。夫を亡くした母親が、宗教にでもすがりたいと考えるのはわからんでもなかったが、神との契約という奇妙な感覚に、子どもながらにして、マオは違和感をもっていた。

不幸なことに、勉強の嫌いなこの少女は、エスカレーター制度にあぐらをかいて、のうのうと大学まで進んでしまったが、敬虔なそれには程遠い。クラスメイトは、議員や企業の令嬢ばかりで、みんなバカだと思って過ごした。

大学時代は特に不まじめで、学校にはろくにも行かず、フラフラとカメラ片手に出かけたり、絵を描いては公園で売る。これが不思議と売れるのだ。そんな日銭で牛丼を注文して、その上に卵を割ると、生きているような感じがした。

その辺の電線や落ち葉に芸術など見出しているわけではなかったが、アニミズム的な完成が“ゆるふわ”という女のポーズ表現としての効能と結びつき、ずいぶん男と遊んでしまった。さしずめ、モノを捉えるうえでの、“ミッション的センス”は、どこか頭でっかちで不健全な感覚を、二十前後の感覚がとらえていたのかもしれない、聖書など、

「鍋敷きか睡眠薬か——」

およそ、吹けば飛んでしまうかのようなものでしかなかった。

好きでもない年上の男と何週間も部屋にこもって寝起きする。

同棲と呼べるほどたいそうなものではない。ただ息を吸い、目的もなく、食べては寝るの繰り返しで、男に対する行為は、フィリアでも、もちろんアガペーでもない。この感覚は、いまでも迷いが生じているが、求められるとエロスが介入してきて、がぜん思考が停止する。

（今日は何曜だろう？）

サザエさんをやっている。シンドロームさえすっかり忘れた。おそらく、明日も大学をサボるだろう。留年も、また、良い。

こうなると、まるで自分は動物のようであり、いや、“さりげないサル”にすぎないことに自らを笑った。

掃除を放棄したピンク色の浴槽、枕元に這うゴキブリ、ベランダに積もるゴミ袋の山、万年床、せんべい布団、カビた床——、放り出された生理用品に集ったコバエを見ても他人事に笑える乾燥した精神……。

そんな中でも、顔を洗って無駄毛の処理をするこの心は、おもしろいことに、ピンクと茶色でできている。

たまごかけごはんは、相変わらずおいしい。風呂で飲むハイボールも、いつ払い終わるか知れないマッサージチェアーで年寄りヅラするのも、裸の体操よりも心地が良い。だが、そんなひと

ときの虚しい快樂と比較しないと、自分の存在が薄ぼんやりしている。

来る日も来る日も、伯父の金で懇ろに、世間体はお嬢様。

感覚的には、自分はバカだと知ってはいるが、その動物的センスを磨き上げ、墮落しきってみると、どういう世界になるのか、二十そこそこのマオには、逃避に近い欲望である。

はじめは、単なる実験だ。

「電気を止められたらどんな気分か？」

二ヶ月程度払わないでおく。金はあるがあえてやる。すると、止まった。

惨めな感じがしたが、そういう実験的な墮落が、マオのオトナへの覚悟を形成し、また、湿った彩りさえ与えた。

坂口安吾も、人間を救う正当な道は、生きながらどん底へ落ちてみる以外にないといい、なるほど、マオもそうした試みに徹しているのだ。

ガスが止まった、水道も止まった、携帯も止まった、訪問の集金すらもあしらいつづけた。あげく、区役所から役人がやって来て、

「生活保護はどうですか――」

なんと、気ままな女であろうか。

そういう後ろめたさと世間から目を背けるために、男と寝たが、かえって虚しさに拍車がかかった。

それは、モテることと寝ることの区別ができない、二十過ぎの青春だ。この時分のマオも、空っぽの現代人で、自分という器に向き合う旅に出かけ悪い、心の平和を失い無意味に自分を否定した。

ふと眼前に、目の生え出したジャガイモがある。おもむろに手に取り、嚙った。数分後、確実に腹を下すだろう。トイレットペーパーを切らしているというのに……。

そういう湿り気は、マオは子どものころから持っている。

マオは、ずいぶん快活な少女ではあったが、ときおり、繊細なものを壊したくなる。それは、破壊、破滅願望があるのではなく、その壊れる音が聞いてみたいという思考感覚は、絆創膏を貼ってもらうためにわざと転んで怪我をしていた、あの頃と同じだ。

いまのマオは、墮落しきった人生に誰かが終止符を打ってくれる、「その音」を聞いてみたいに他ならない。

「ライカのカメラを買ってやる――」

そう男に言われて、急激に熱が冷めたのだ。

(このカメラを手にする)自分の感覚が誰かと並列化しそうで、いままで、ずっと避けてきた。銀座のサロンで一目見て、いらないと誓った代物だ。これが、自分の首からブラブラしている。それがとても悔しくて、涙腺が緩んだその瞬間、対価とばかりに男は求めた。

マオは、スタイルがいいわけでもなく、色気もない。が、こんな日に限って、オレンジの下着を着けていて、みかんのようないさまだ。自分が男ならば、げんなりするにちがいない。

そんな女をあえて抱く、男の感覚を知りたいと、体のどこかが、欲しているのだとすれば――

、

(よくみたら、醜男だ.....)

結果、男は妻子持ち。すぐさま、男の伴侶が乗り込んできて、マオの頬を死ぬほどに何度も打撃した。これが、“愛”だと思った現実だ。

「ごきげんよう、さようなら——」

毎日の挨拶。形式に拘泥した、やらされている感じの信仰心。

仏教は布施の精神を説いて調和を広げたが、キリスト教は愛を説いて争いを招いた。

(ほら、みたことか.....)

カミはいるとマオは信じてやまないが、しょせん、“GOD”しか理解できない欧米人の一神教の教えなど、マオに適合できるはずがなかった。

クリスチャンではあるが、神社にも寺にも参拝するし、手を合わせるというアニミズム的感性。

草木にもカミが宿っているなどとは、その頃のマオには信用出来なかったが、少なくとも、胸と頭の中には、カミ様はいると思うことにしていた。

二人のカミ様。何もしないカミ様。意志によって選べるカミ様。滅んでも、カミを生むカミ様。

ここは、八百万の国。多神教の国。クリスチャンだと言われようとも、どうしても、マオは、日本人であるらしい。それは、形式に拘泥しない、勝手な思い込みに似た、軽い神道であるようだ。そのことが、マオに十字架を踏ませてしまった。

「だから、パレスチナが気の毒なんだよ.....」

その後、中退。専門学校に入り直し、後は、フラフラとしながら今に至る。案外、(やっていけるもんだな——)

思ったらふと、カウンターの招き猫に手をあわせて、冷めた大判焼きを備えているのだ。

そういう生き方を、図らずしも、一路に伝えていたのではないか？

一路は、賢い子だ。マオが感覚的に体現していることも、この男は、きちんと知識体系化している。おかしいことにはノーという。だから、いくら騒ぎをおこそうが、警察方になろうが、自分だけは、いつまでも、一路の見方に違いない。

つい今しがた、囃子の耳鳴りから開放されたのもつかの間か、気がつけば、そういう音が、どこからともなく聞こえ始める。

初夏。夕暮れ。一年という速度は、緩衝もそこそこに唐突に巡って、油断すると、いつでも隣で待っている。踊り子にとって幸福なことでありさえすえれども、せわしなく流れる進歩なき時間を見送るだけの、齒がゆくも物悲しい秋の空気を、夏の前に感じる。

湿気の混ざった冷めた風が、汗ばんだ肌に当たると、かすかに体温をうばって抜けていく。

一路、三十一。

それほど熱心ではないが、昔のよしみで阿波踊りの「連」に誘われて、柄にもなく笛を吹いて参加している。

なぜ、笛なのかというと、運動不足の“オッサン”が突如、踊れるわけもなく、重い太鼓や鐘を叩く体力があるわけでもなく、消去法的に鳴り物を選んだ。しかも、団体での演奏中は、苦しくなって休んでもわからないという不順な動機があり、さも熱心に肺活を効かせているふうに見せることが、最大のサボリであるらしい。

いや、本当は、市民のくせに「連」に参加していないことに後ろめたさをもっており、この千葉生まれの徳島ボーイは、帰属意識として、伝統芸能を齧ることはやぶさかでない。

いつか、翠もやりたがるかもしれない。

常三島にある実家のベランダから、徳島城公園の方角を眺めると、恒例の練習風景がマンションの谷間からうかがえる。数時間したら、自分もその場へ駆けつけねばならない。

不思議なもので、一キロ以上はあろうその距離でも、はっきりと囃子の音が車や街の喧騒の中を伝って、大塚家まで響いてくるのだ。

一路が子どもの頃、近隣の高層物といえど、携帯会社の電波塔だけで、市内の中心部にある城山の間からのぞく徳島駅や吉野川を挟んだ北島地区まで見渡せた。よく平屋二階の友人を呼んでは、

「ええ眺めやろう」

などと、十五階の優越に浸ったりもしていたが、しかし今では、見渡す限りの凸凹で、ずいぶんつまらない眺望だ。

望遠のカメラでも持ちだそうものなら、盗撮しているように見えるのか、

「やめなさい！」

と、白髪の混じった母親。それを見て、七歳になった翠がケラケラと笑った。

その母親の幾美は、無事、医学部を卒業して地元の研修医としてせわしなくいる。翠は聡い子どもだから、そういう事情は承知していて、模倣的な子どもでいようとしている。

それが、なんとも一路には気の毒に思えて、いつまでも翠から離れられない。

この日も、

「釣りに行きたい」

そう姪っ子が言うと、一路は、
「わかった、わかった」
と、二つ返事である。

翠が小学校にあがると、どういうわけか、釣りに興味を持つようになるのであるが、それは、自分自身が釣るわけではわく、一路が釣り糸を垂れているのをひたすら見るのが好きらしい。

一路は、子どもの頃、マオに連れられてよく新町川に出かけていたから、翠を連れて釣りをしていることに不思議な気分をいつも味わう。

釣り場の新町川は、大塚家から南にtekuteくと歩いて助任川(すけとうがわ)の川の駅まで出て、そこから「ひょうたんアイランド(※旧ひょうたん島)」と呼ばれる徳島都心部をぐるりと回って、新町川まで出る。

少々、遠回りになるが、翠はこの船に乗るのが好きらしく、橋の下を幾度もくぐり、州庁横のヨットハーバーを進んでいくと、ビルの谷間から、眉山がうっすら見えてくる。

途中、往き来する外回りの船と観光船の乗客から手を振られるが、翠は、恥ずかしがって、いつも引っ込む。それを見るや、どこか、幼い頃の妹に似ていて、やはり、幾美の子どもなのだと一路は思った。

釣り場の両国橋に着くと、馴染みの釣具屋で竿を借り、猫の缶詰も買って、水面をのぞいてポイントを探した。水面には、奇妙な円盤が浮かんでいる。ソーラー浄化装置である。

これが、夜になると、川の底から七色の光を放つので、見ようによっては、ある意味不気味だ。

「今日こそ、鯛釣らなあかなあ」

水面には、うっすらとクラゲが浮いている。

新町川、というと誤解を招くかもしれないが、この川は、目と鼻の先で海と繋がっているために、街中のその辺の川にも、ときおり、鯛やらヒラメが紛れ込んでくるため、まんざら嘘ではないらしい。

翠は、そういう一路のまんざらを真に受けて、
「(新町川で)タイ、釣ってくる！」

などと意気込むので、大人たちは、不思議な顔で翠を見ている。

田宮川にいたっては、うなぎが生息しているらしく、丑の日が近づくと、釣れもしないのに懲りずに出かける。

(昔、ようちんが釣ったなー)

そんな思い出を展開しながら、しばらく歩き、両国橋と新町橋の間あたりで腰を下ろして漁場とした。

少し説明すると、一路たちが釣りをしている場所は、公園として整備されているため、一般的に想像されるような、川でもなければ漁場でもない。

そういう、たいして磯の香りのしない淡水と塩水の混じったような、小奇麗なビルの隙間の一角で、釣りという“ごっこ”で遊んでいるのだ。

「この辺で釣るか」

すると、まるまると太った猫が、待ちかねたように翠の方へやってきて、犬のように座った。
「平ちゃん来たよ」

翠は、さきほど買った缶詰を開けて、太った猫に差し出した。釣具屋で猫のエサが売られているのはこのためで実にあざとい。

そして、嘘か本当か、擬人法的解釈で、
「美味しいって言える！」

とか、
「きょうは、昼寝しとったって！」

と、猫の感情を代弁しては、仰向けに転がして、腹のあたりをこねくり回した。
猫の名は「ドラ平太」といい、一路の勝手な命名だ。メスであると後に気づいたが、名付けてしまった以上、翠も、「平ちゃん、平ちゃん」と呼んでいて後戻りできない。

餌には困らないのか、まるまると太って毛並みはいいが、正真正銘の野良である。野良であるが、シャム猫のような毛並みなので、金持ちの家から遊びに来たかのような態をしている。

翠は、この猫に触ることも楽しみなようで、いわば、釣りといっても、その言葉以上に、姪っ子は、多くのことを感受している。

幾美や明美には内緒で、ほとりのカフェでクレープを食べるのもうれしい。転んで怪我をしても、おぶってもらえるのも嬉しい。

(いつまで、なついてくれるやろか……?)

日が、沈みつつある。明日は、雨かもしれぬ、その弱々しい西日が、川沿いのビルのガラスに映り込み、少し、水面に反射して、順光であるのにどこか眩しい。

オレンジ色の翠の横顔を見つめていると、幾美の顔がぼっと浮かんだ。

「幾美ちゃん、そんなものばかり食べんでも……」

夜食くらい作ってやると明美は言う。

日付が変わった。今しがた、忍び足で帰宅したかと思うや、すぐさま部屋にこもり、ぐちゃぐちゃの机の上で、グラス(ウェアラブルコンピュータのこと)もかけずに臓器のホログラフィックを模写しながら、ドイツ語とフランス語が混じったようなヘビのような字で、何やらカリカリとやっているのだ。

どうやら、日々の忙しさは、幾美の潔癖をも治してしまった。ベッドには紙袋やら下着が無造作に積み上げられ、床には化粧品や雑誌の切り抜きが足の踏み場もないほどに散乱している。

同じく机の上は、本棚にしまえばいいものを、半分以上もソレにスペースをとられ、傍らには、漫画本や動物のフィギュアが置いてある。牛、アrikui、パンダ、ゾウ、なぜか宇宙人にカワセミ……。ここには何の法則もない。

さらに、この女は、その辺に置いてあるものは、
(クレプトマニア(病的窃盗癖)というのか……)

ひとまずポケットの中に片付けてしまうという考古学者に似た回収癖がある。しかも、質の悪

いことに、そのまま持ち帰ってしまうことが、しばしばあり、他人のものとみられるセロハンテープやらスティックのりが、フィギュアと漫画本の間に緩衝帯のように置かれているのだ。そんな中に縮こまって、作業をする娘が、一幅の絵のように見えて、明美の笑いを誘った。

「※蜂須賀公がそうしろって言うんよ……」(※阿波藩の初代藩主・山賊だったという説)

そんな奇妙な言い訳を、まるで子どものように真顔でいう。おそらく、片付けろといっても、占星術だかなんだか知らない理由で、散らかりを正当化しそうな顔もしている。

こういうところは、奇妙に可愛い。しかし、一児の母親としては危なげだ。

この親子の接触は互いの寝顔を見ることで完結していて、幾美にいたっては人格的な母性が他人より少ない。それは、シングルマザーという自分への戒めが依頼心を嫌い、翠には厳しくあたってしまう。反動で、周囲がちやほやしてしまうから、実に損な役回りだ。

ことさら、研修医として、母親として、一番しんどい時期であるのはわきまえている。

遊びにも行かず、同じ服を着回して、いつも眠そうな目をしている。冬場は風呂にも入らないことがしばしばで、油っけの飛んだ髪を束ねもせずに、ボソボソと文句を言いながら少女漫画を読んでいる姿も慣れてしまった。

「なんでそうなるんや……」

と、胸の内を読まれてしまったかのように、一息つくと、ジャージ姿でカップ麺をすする娘をみるのがいたたまれないのだ。

(似ている……)

幾美は、夫(父親)にいちいち似ている。

新婚時代、同窓会に出席して遅く帰宅すると、夫が、貰い物のまんじゅうをムシャムシャと食べていた光景が、心と降りた。

それを見て、

(私がいないとダメなんだ……)

そう思ったかたわら、店屋物でもとればすむことを是としない、思考の止まったその場しのぎに呆れて、いじらしくも見え、なんとも寂しい気持ちになった記憶がある。

同じ事を、自分の娘にも感じるのだ。また、

「こんなん食べたくらいで病気になんかならんで！」

という何か人体の秘密でも知ってしまったかのような幾美の物言いに、おやつすら手作りで育てた娘に、その愛情と食育を否定されているようで、おもしろくない。

「ママのパンは、おいしいなあ！」

食パンも自宅で焼いた。おもちゃにつられてファストフードを食べたがると、こっそりそれだけ買って帰った。インスタント禁止、レトルト禁止、炭酸飲料は、骨が溶けると執拗に脅した。

そんな娘が、忙しさにかまけて、戒律を次から次へと破っていくのだ。

「安藤百福(※インスタント麺の生みの親)はな、毎日ラーメン食べても100歳まで生きたんやで」

もし、いま幾美が死ぬとすれば、おそらくそれは過労死だろう。

医者の不養生とはよくいう。これほど体を痛めつけ、異様な精神状態を継続し、それを普通に

せねばならない。

ある意味、それは、責務かもしれない。

それでも、資料だといい、セキュリティ会社の検閲員さながら、一般人には、スプラッタとは思えない映像をネットからダウンロードし、それを見ながら、口に物を放り込む娘が、人間ではないような感じがした。

それは、誰かがやらねばならない。そんなことは百も承知だ。が、そういうふうに見てしまう網膜の向こうの心境は、言葉での表現が難しい。

「あんまり、無理したらあかんよ……」

そう明美は、引っ込んだが、中学生くらいの少女の検死映像が突然、飛び込んできたとき、ここにいてはいけないと思った。

しばらくして、幾美がトイレにたつと、洗面台から吐瀉物(としゃぶつ)の匂いが微かにしていた。その臭いを嗅いだとき、多忙に埋没した、デリカシーのなさに気づいた。

「病気や、私――」

そして、すこし冷静が戻った。このような精神は、日常に持ち込んではいけない。当たり前であるのに、見慣れているから、配慮が欠けてしまった。

研修とはいえ、人体を開いてあれこれとほじくりまわしている映像に慣れてしまうと、あたかもそれが、人形のようにしか見えなくなるときがある。それは、魚をさばいているのとさして変わらず、大掛かりで珍しい案件に立ち会おうものならマグロの解体を喜ぶ観衆のように、もはや、生命の美しさを忘れている自分がいるのだ。

夢にまで見る。亡骸なのに甘暖かいそれを開く夢。昔、見学した牛や豚を潰す現場の記憶……。誰かがやらねばならない。どちらも、差別と混じって、社会の仕組みとして機能している。

「慣れる、というよりも想像して心をかけないことです――」

そんなことを、教授が昔、言っていたのが頭をかすめた。そのついでに、軟弱な男どもの嘔吐合戦に、スタンドバイミーかと付け加えて、不謹慎ながら、青々とした血管が張った臓器を見て笑ったのだ。そんな自分を、同期が訝しげに見ていた。

母親が部屋を出る間際、その顔には、侮蔑を含んだような眉の歪みを、それでも理解しようと必死であった、形容に絶する、あの表情。

本当は、命は、怖いのだ。

昔、マオが、

「献体してやる」

と言っていた。冗談かもしれないが、もし、そうだとしたら、それを、自分が担当するとしたら、さて、できるかどうか……。むろん、できるはずもないが、生々しく想像してみたら足が震えた。

東医宝鑑を書いた許浚(ホ・ジュン※李氏朝鮮時代の医者)は、師の体を解剖しながら筆を持ち、ひとつひとつ、臓器を取り出しながら、紙に写しとっていったという。

敬愛する師の死の直後、解剖に移るその異常さと崇高さ。現代の医学は、やれ免疫だの超音波

だのと物理(レーザーのみ)を伴わない手法で治してしまい、人体にメスをいれることは、ほとんどない。

現場は、もっぱらロボットで、いわば、ネット回線が生命線。どこかにあるスーパーコンピュータがオペレーションを実行し、医師はその横で、推移を見守る、全自動飛行のパイロットのごとく、ただただ、機械の動きを眺めて、訴訟のリスクに怯えているという、不健全な世界だ。

「万が一に備えるのが、医師の勤めである！」

そんなこんなな裏腹に、デリバティブと化した保険商品をつらつらと読みながら、規制に怯え、大昔のダヴィンチ(手術用のロボット)をマニュアルで操作し、ハモの骨を完全に取り去るのが“気休め”であるのだから、転職したら、

「魚屋にでもなるか……」

かくいう、実感のない金融商品のような現場において、肝の冷えるような人体の怖さの体現こそが、心構えの前提であるのに、鬼手仏心はおろか、触れずにきたモノへの、興味本位になっているのだ。

「死体に尊厳を！」

という奇妙な人権団体に、献体を否定されはじめて、いよいよ、医者とは何かを問われ始める。

もし、医者として執刀する日が来た時、この日のことを、自分はどんな気持ちで振り返るであろうか。

少し、散歩をしようと思った。夜中に出歩くのは慣れたものだから、パーカーとジーンズに着替えて、マンション内の公園に出た。そこで、ふと目に飛び込んだブランコにとっさに飛び乗ってしまったが、防犯カメラに気づいて、小さくなってしまった。

(何しとるんやろう……)

何をしでかしたわけでもないが、深夜にいい年の女がブランコに揺られている光景が、その背景を否応なく想像させて自分が自分に対しておかしい。

昔は、外からでも出入りが自由であったのに、いつの間にか、高いフェンスで囲まれて息苦しい感じがしたが、翠を公園デビューさせたのは、ここだったな、と、懐かしんで、とたん、兄の一路に預けっぱなしでそれ以上の記憶が無いことに気づいた。

忙しかったのは、確かだ。だが、それにかまけてかこつけて、翠が一路をせがむので、いつだったか、夫婦と見られた。それが、妙に気恥ずかしくて、母親の義務を兄に投げてしまった。

(週末こそは、遊んであげよう)

そう、いつも思い、ついに、翠は七歳だ。

吉野川の方へ歩いた。夜が白み始めた。睡眠不足のためか、まぶたが重く、頭も今ひとつはつきりしなかったが、河川敷に近づいてくると日が昇ってきて、振り返ると、眉山が明るくなっていく。

十一月だというのに、紅葉はいまひとつ進んでおらず、青々としていて、立ち枯れもある。山の裏からは、カラフルなビルが景観をぶち壊して奇妙な光景であるが、それでも、綺麗だと幾美

は思い、冷めた缶コーヒーを握ったまま、いつまでも山を眺め続けた。

＊

二〇四四年。

明美は、六十三になってしまった。同い年の夫も、定年を待たずに隠居した。

「あと二年、努めようがいまいが――」

手取りは同じであるという早期退職優遇制度に乗じた利己的判断を演じてみせたが、折しもこの年、娘の幾美が晴れて医師としてスタートを切る。

おそらく、年々強化される製薬業界の規制が医者との会話すら禁じてしまったことが早期退職の原因だ。

幾美の研修先の病院に、新薬の売り込みなどに行くと、一丁前に白衣を着た娘が、ひと目も気にせず、

「パパ、パパ！」

と掛けてきて昼食をせがまれるのは嬉しい半面、厚労省に対して何か悪いことでもしているような感覚だ。

「パパ、ご飯と麺は一緒に食べたらあかんで言うてるやろ」

「白ご飯ないと食べた気がしないなあ……」

人の食べ物にはうるさい娘が、若いころの明美に似ている。これはただの家族の場面だ。

しかし、父と娘は、難儀な職についてしまった。公取協(医療用医薬品製造販売業公正取引協議会)が教条的にもたらす、

「あれもダメ、これもダメ！」

という、くだらない法的呵責に苛まれ続けるくらいであれば、いっそ、辞めてのほほんと暮らそう。

「パパはな、薬のことなんか、なーんも知らないんだぞ――」

リタイア後は、やることもないのか、家でテレビばかり見てすごし、一方、妻の明美は、家でじっとしてられない性分らしく、手当たり次第、習い事をするというスレ違いの毎日だ。まれに二人で出かけても、買い物の“足”がもっぱらである。

映画も見なければ食事もせずに、ホームセンターに赴いては、家庭菜園用の土にしか興味のない明美のカートをついてやる程度だ。この先、いつか、“杖代わり”にカートすら取り上げられるのではないか。

(土なんか、どれも同じだろう……)

その一目散に、土の方に掛けていく明美の後ろ姿は、どこか翠に似ている。いや、翠が似ているのか？

香水のおまけが付いた菓子をせがむ孫娘が、お菓子コーナーに走っていくその背中と。

以来、その“土オンナ”は、家庭菜園に飽きたらず、神山町という都市部からほど近い田舎に畑を借りてせっせと世話をしに通っているのだから、エゴに近いモノ好きだ。

「おたくの畑にも補助金、出るんかいな……？」

マオは、そんな明美をいぶかしく見ていたが、そんな女に、

「心が洗われるよう——」

などと言われ、柄にもなく生花を始めてしまった。

当初は、馬鹿にするつもりでいた。生花など、しょせん、自然を正しく見ない人間のエゴを美的な作法としてとらえる下品なものであると考えていたし、流派が互いに批判し合う基準のなさ、表現という価値相対主義にバカバカしさをもっていた。

ところが、生の花を下しくそな手つきで切り、生けていく自分が、奇妙な感覚をもって罪深く思えたし、だからといって、練習用の花材（造花）を切り、剣山に生けるのも、何かに反する抵抗がある。

それでも、近頃の造花はよくできたもので、偽物でも出来上がってみると、それなりに綺麗だと思える心境はなんなのだろう、という受容態度に潜んでいる「倫理」とか「美」という精妙な関係を不思議に思った。

たまたま聞き知ったから書いておく——、西村清和の『プラスチックの木でなにが悪い？』にもあるように、人間のエゴでもてあそぶ生花を造花に代替しただけで、とたん、その意義に躊躇を感じる心の基部にひそむ美学の醸成源、いや、造花ごときに見とれてしまう自分の置かれた条件下はどんな作用か。

そこからみえる、自然という概念のあいまいさや造花と生花という二元論がはらむ、手前勝手な中心主義。

つまり、生花の方が、無条件に良いに決まっているという倫理的枠組みが無意識に起動して、同時に、自然をどうみるかというそれ自体の倫理性が忘れ去られている自己完結型自己忘却が、マオの躊躇の原因だ。

だとするならば、マオは、いままで、何を見て、綺麗だの汚いだのと論じてきたのであろうか？

若いころ、落ち葉や電線に芸術を見出すのは、アニミズムの混じった作られた感性であると信じていたが、その頃のほうが、よほど、自然を正しく見て、まがりなりにも自然に向き合えた点で、純粋だったといえるのかもしれない。

「佐伯さん、喫煙は廊下でお願いしますよ。佐伯さん！」

そう、苗字を呼ばれて我に帰った。

「こりゃあ、失敬！」

剣山の上には、煙草の吸殻が突き刺さっている。その横に、ユリの花が生けてあり、
(これも自然だ)

なるほど、心の現れた五十六歳の初夏である。

虚ろだ。何に対して虚ろなのか。

それは、ロジックを持ちだすと「虚ろに対して虚ろ」なのであり、なんとなく、無心でいられる心のありようが、そうさせる。

正午の、客も途絶えた、自分の城。近くに、スタバがあるのに、潰れない自分の城。小奇麗に整備された元用水路地帯。地図で見ると、存在もしていない自分の城。

「洋式でない！」

そうクレームを付けられた男用の小便器。電波法に訴えられた周辺住民への無線開放……。

屋上から見える、エクステ山(眉山のこと)……。

もしかすると、その虚ろさは不安であるのかもしれないが、それは、金銭や健康といったものではないように思える。

突然、相続した母の金、叔父の金、どれだけ痛めつけても「正常」と判断される身体。

結婚を諦めた判断……。

キリスト教のような一神教に馴染みのない日本人は、家族や共同体に、ともするとすぎる。同様に、しょせんマオも平凡な女で、何がしたいわけでもないのに、自己実現といった欲求をかりうじて持ち、そのくせ、それらを受け入れてくれる男になど退屈であるのは想像だけで事足りた。そんな男の子どもを生む気もない。結婚という制度に逃げることも恥ずかしい。

ならば、孤独に甘んじるより他ない。

幸いそこに、ミッション教育の名残なのか、一種のユニバーサリズムによって、他人の子どもを愛してしまい、その血統を超えた愛情で、結果、創造された共同体という擬似的な家族を手に入れて日常へ頹落していく自分が不安要素の根源だ。

もしかすると、結婚ができないのも、心の淵にあるマリア像が、宗教的感覚をもって、自分を律しているのかもしれない。

――絶対に別れてはいけません……。

(ああ、沖縄にでも生まれればよかった！)

読書して散々、こき下ろしたハイデガーは、そういう人間を世人(ダス・マン)と呼ぶ。

(まさかね――)

いや、そうかもしれない。俗人が必死に追い求めるモノが、計らずしもマオの手中にはいつもある。それを手にするには、ときに痛みを伴うが、その痛みを忘れて痛がる自分が不気味で不安で嫌なのだ。

マオは、タバコをプカプカとくゆらせながら、

「タバコ吸う料理人なんてクズだわな」

と、どういう意味かきいてほしそうな顔でつぶやいた。そして、弁明というよりは、差異性をみせつけるかのように、

「マオちゃんは料理人じゃないからな！」

二言目には、必ずこう言う。調理師免許こそもっているが、さして味にこだわりもなくやっているから、これでいいのだ、と。

大事なものは、安心と愛情であり、ご大層な料理人かぶれに水をかけながら、<カミとの交信>だといひ、なにやら、天井に煙を吐いては、暇そうな目で虚ろにしている。

一路は、そんなマオを横目で見ながら、店のテーブルを拭いている。

平和だ。恐ろしいほどに平和だ。道行く女子大生の露出の多さ、一人で散歩する偉そう犬。老人もか。老人には手を焼く。六時開店だというのに、早朝の散歩がてら来店するので、五時には店を開けねばならない。

「邪魔するでえ」

「邪魔するんやったら帰ってー」

ふと、煙をみると、<カミとの交信>が、換気扇へ勢いよく吸い込まれていて、そのことが可笑しくてどうしようもなかった。

「何がおかしいんだよ?!」

「換気扇がおかしい」

「変な子だねえ、一路は……」

その日の午後、マオの店に、幾美がふらっと立ち寄った。二十七歳。どこを指しているのかわからなかったが、

「そこの病院の応援ー」

といって、三十前後の太ったの男と席に座った。幾美は、

「同僚だ」

と疑わしげな顔で見る、兄とマオを一蹴して、向かいに座ったクマのような男と何やら難しい話をやっている。

一路は妹の“連れ”に興味津々に無関心を演じていたが、翠の顔が浮かぶと、複雑な意味でいやらしさを感じた。が、人をとやかく言う権利がないことくらい承知している。

ただ、二十七の妹も、やはり一人の女である。ひとつの文化として、男というものは必要なのかもしれないが、ふいに連れてくる同僚と言う名の男たちは、その都度、顔が違うという、腹立たしさもある。

(人のことは言えんけど……)

いや、むしろ、幾美の安全感として、親族の前に引っ張り出せる男という怖じけなさ、貞操であるという証明なのかもしれない、ただ、それらの男たちは、幾美に不釣り合いなほど、身なりや身体がだらしない。

医者ではあるのだろう、目つきこそ鋭いが、無精髭が生えていたり寝ぐせが立っていたり、伸びきった服を着ていたり、とにかく、薄化粧で清楚な幾美を見ていると、自分が父親にでもなったかのように心を煮やした。

(こんな奴のどこがええんや……)

ふと、連れの男のたるんだ腹を見ながら、想像で女になってみた。だが、どこがいいのかさっ

ぱりわからずじまいで、男女の仲をシュミレーションすればするほど、気味が悪くなってきたので、好きならそれでいいのだ、ということにした。

スタンダードは、こういうことをクリスタルザシオン(愛の結晶作用)などという歯の浮くような“病名”を付けたが、こんな肉の塊に覆い被されて甘美なものが生まれるのか、はなはだ疑問だ。

こういう感覚は、マオとも似ている。若いころのマオも、そういう、だらしないクマのような男をことさら愛した。

それらは、
「癒される――」

という観念を根底に、外見で判断しない心の寛容、その作用の裏にある好意の互惠性（好きになられると好きになる）、ことさら愛されるという男の劣等感、心理的リアクタンス、協調精神……。いや本当は、少々、髪が薄くても股の付根が短小でも、コンプレックスまみれの下手に美男なオトコよりかは己の精神が楽なのだ。

幾美もそれに近いのかもしれない、スマートで清潔感のある男が、どうも不自然でうそ臭く、持ち前の頭脳は、アスレティカ・ネルヴォーザ（神経性過剰鍛錬症）にうんざりしているに違いない。

この、舌を噛みそうな症状は、過度なまでにボディを鍛え上げる男のことをいう。彼らは、往々にして、身体作りに重きがいき、内面磨きは二の次だ。

裏を返せば、内面よりも見目形さえよければ、万事うまくいくと思っている短絡的な薄っぺらい人間で、幾美の感覚では、そういう表面だけ作ろう男よりも、社会にもまれた日常人に身を捧げるほうがはるかによかった。

また、身体を鍛えすぎる男ほど、デート相手がいないという傾向もあり、そもそも、そういう男と付き合って面白いわけがないのだろう。

なるほど、妹も、結婚すれば絶望的に退屈な男が良いようだ。

――その女がもし男だったら親友に選んだであろう者でなければ、妻として選んではいけない。

その逆もしかり。ともすれば、それが世間ということであろうか。この言葉を発したジュベールというおっさんも、大昔から、ややもすると、鋭い。

透けている。透けている上に面積が小さい……。

どこで買ってくるのか、明美は日ごと派手になる娘の下着に赤面し、母親としての自覚について、つらつらと文句でも垂れようと算段しながら、ソレを無言で畳んでやる自分が、妙だと思った。が、とうの幾美は、

「実用性と精神鍛錬……」

などと、知力と体力が自在になると、ふんどしと勘違いしているのか、意味のわからない論理でケロッとしている。

＊

二〇四五年。

占いなど信じているわけではないが、昔から、三十三で結婚すると散々言われ続けて、バカバカしいことに、本当にプロポーズを受けてしまった。

「私と銀行口座を開かない？」

古いアメリカのトレンディドラマが口走りそうな、そんなセリフを、郊外のショッピングセンターでの買い物中、瑞和がカートを押しながら、さりりと言う。よくある話では、こういうとき、きっと、時間が止まるのかもしれないが、間の悪いことに、はしゃぐ子どもにぶつかられ、拍子で、人ごとのように抜けてしまった。

「いけるか？ 前向いて走れよ」

「うん……」

こういう場合のこの女は、何かを企んだような目をする。

が、眼前の瑞和は、精肉の上に映し出されるAR(拡張現実)の生産者コメントを茫洋と眺め、現実を少し逸らしたような物言いだ。

一路は、この何を言い出すかわからない半ば統合失調症のような瑞和という女をいぶかしげに見ていたが、ふと、主とうまくいっていないのではないかと察した。そして、あれこれと思案するうちに打算的な解が溶解して、またもや、道義に逃げ込んでみるも、

「事実婚でもいい」

と、法律の改正と、互いの間合い感覚からもこれがベストな選択であることや、子どもができないのは「器」の問題なのではなく「種」の問題であることを野菜を手に取りながら他人事のように告白し、

「こんな、オババでよかったら……」

もらってほしいと真顔で言う。

一路の把握している瑞和は、もっと大人じみた女であると思っていたが、照れを隠した単調な態度に、少し心が揺れてしまった。

確かに瑞和は楽でいい。距離のとり方を自ずと知っているし、不道德で怪しげな恋愛観をまるで姉弟の有様のようにデオドラント化し、ただ何をするでもなく、男を文化として感じ取り、性への位置づけが至上ですらない。

出会ってはじめて瑞和の家にあがったとき、ピアノをふいに聴かされた。部屋の隅に追いやられた、古いが大事に使われていそうな日本のピアノを、さも過保護に鍵盤を叩く女の感情の詰めように琴線を触れられた気がした。同時に、

(めんどくさい女かも……)

とも思って、今日に至った。

「私、一路くんに『死ね』と言われても、たぶん死ねるわー」

そんなことを、事がすんだ裸体で涼しげに言う。瑞和は、体温が逃げていく汗だくの身体が心

地いいのか、身をひねりながら一路に近づき抱きついた。

「でも、一路くんは、私のためなんかに死ななくてもいいわ……」

そして、プロレスの技でもかけるように一路に絡みつки、奇妙な大勢で眠ってしまった。

倉田百三の『愛と認識との出発』には、男が男として、女が女として、いかなる場合に偉大であるかを挙げ、それは、異性に対して死を肯定せしめることであると説く。なるほど、ずいぶんと好かれたものである。

瑞和は寝ていると、ときおり無呼吸になることがあるが、はっと飛び起きてするクシャミが妙にかわいらしく、そんなことを考えながら、一路も微睡む。ところが、瑞和の体重や胸に圧迫されて、いつも嫌な夢ばかりみて朝を迎える。

――確か、今日も、そうだった……。

一路は、帰路を黙って運転して、忘れかけていた瑞和の年齢を計算していた。

「四十一か……」

それが、うっかり口蓋を走ってしまった。

瑞和は、そうよ、と、開き直って、いつまでも身を固められない長男(一路)の親孝行になるぞと、またもや他人事のように言い、高規格道路からの景色を見ていた。直前、焼肉を食べたせいか瑞和の口から発せられる音と同時に、肉とミントの混じったような奇妙な臭がしていた。

動揺している。それは、道が違うことで気がついた。

瑞和の自宅は、徳島駅のお隣、阿波富田駅前にある。それなのに、川内から住吉に抜け東環状線の上におり、広末大橋をひた走り、一般道に降りればいいものを、新浜から“しらさぎ区(旧八万)”の方までゆくところ、眉山を一周して、いつの間にか高速に乗り、またもや郊外のショッピングセンターに戻ってくるという経路をたどった。

さなか、仮にそうだったとして、四十の女を両親の前に引っ張りだしたさいの反応は、どんなものになるのか。反対、賛成。どちらに転べども、こっ恥ずかしい展開が待ち構えていそうで、そんなことを理由に瑞和を捨てそうな心の作用を少し恨んだ。

男とは、息子とは、往々にして、母親像をオンナに求める。が、同時に、母親と女が別物であることも知っている。

「決心はついたかい？」

瑞和は、どこか吹っ切れたような声色で一路にせまった。不思議な事に、返事などどうでもいいような目つきで、一路を見ていた。

そんな反応を引き金に、

「やっぱり、やめる――」

と、一瞬、思考が妙な働きをした。この男は、自分がどう考え、どういう選択をしているかわかっていても、心の作用が空回りして、しかし、いま口にしたことを冗談というわけにもいかない強がりと、そういう奇妙な“つまづき”を優柔な自分への覚悟だと錯覚していた。

すると、こんなときに限って、電話が鳴る。

瑞和は、出ろと目配せすると窓から顔をだして、ただ髪をバサバサにしていた。

「タバコを買ってきておくれー」

マオからだ。そう、たった一言、話したかと思えば一方的に切られてしまった。おそらく、ほろ酔いでかけたに違いない。ちゃんぽん酒の光景が、まじまじと頭に浮かんだ。

案外、この快活な母親もさみしいのだ。

家路には、下品なほどマヨネーズのかかったイカ焼きを買って帰ろう。

少し、状況を忘れて笑ってしまった。

「いまの誰？」

「官房長官です」

「うそ。女の人の声やった」

「あ、公安委員長やったかな……？」

何を持って白々しい。素直に、母だと言えれば済むものを、そう呼んでやれない自分がなぜだか可笑しい。なぜかは重要ではなかった。

マオという存在は、ときに母親であり姉であり、意識を向けると極の違った磁石のように、その性質が裏腹に逃げていくのだ。いまは、歳の離れた姉なのかもしれない。

しぜん、気まずい空気が流れた。だが、この女は、

「そう」

と、表情ひとつ変えずに車から下り、駐車場わきの焼き鳥屋で何本か買い込み、戻った。

そして、一路に袋をもたせて、タレが口元に付いても気にせず黙々と口に押し込んだ。

その姿が、やけ食いしているように見えて、少し、いじらしく感じた。

「私の世迷言、聞く？」

(……何をいきなり?)

一瞬、あっけにとられていると、この女は、はじめて、主のことを、とうとうと語った。

「うちのダンナ、自由になるために私と結婚したんだって。

どういうこと？ って訊いたら、好き勝手生きるのも不自由なんだと。

だから、うっとうしい女をそばに置いて、帰属して、存在を認めてもらうという束縛があって、はじめて落ち着くんだって。

ちょっと分かる気がしたわ。楽になったかもね。子どもいないからなおさら。

しょせん、女は“装置”なの。装置だから、その機能が働いてないと、とても不安なのよね。

(子どもを)あきらめた“ふり”をするのも疲れちゃった……」

そこまで話すと、瑞和は、タレで汚れた指を舐め、おもむろにスカートで拭いている。

この女はだらしないことに、手を洗ってもハンカチで拭かずにスカートで拭く。

いつものことだ。はじめて見たときは、意外な感じがしたが、これが、八年も付き合った女である。

だが、瑞和の話を聞いたとき、嫉妬も経験せず、実態のなかった主のディティールがぼんやりと浮かび、かすかながら眼前の女が妻として振舞っている風景に、あえて英語でいうジェラシーのカケラが頭のシンから湧いてきて、自由の牢獄から出所してみるのも人生なのではないか？

と、ためらいが生じた。

どうしてか。この女が誰と繋がっていようと平常心を保てるはずなのに、家庭での夫とのささいなやり取りを想像するだけで呼吸が乱れた。

ややもすると男とは、単なる、やせ我慢のみの動物だ。社会的、文学的スタンスを乗り越えられるだけの器がしごく人工的で、しかもはかない。つまるところ、とっさの一言に対して、意地っ張りで臆病で――、ヘタレなのだと。

頭の中には、瑞和が洗濯をして、暇そうに茶を呑みながらテレビを見て、昼寝したり、髪を洗ったりという、とりとめのないことが次々と流れた。その中で、どういうわけか、マオがお好み焼きを焼いていて、油が飛び散ったと騒いでいるのだ。

「ノースリーブでなんか焼くからや……」

世話のやける母親だ。一路は、どれどれと中年オンナの腕を掴んで、火傷の有無を確かめる。ところが、掴んだその腕は、ひどく酒に酔った瑞和になり、ワキを舐めろとおかしげにぐずった。

この男は、駆け引きという心理戦には勇敢で、挑発されるとままよと従う性格だ。

しぜん、そのようにしてやると、制汗剤の味で正気に戻った。

「やっぱり、(結婚は)できませんよ。スカートで手を拭くし、自分の食べかけ僕に食わそうとするし――」

「それから？」

瑞和は、一路の口から出る愚痴のような不満を興味津々に聞いている。

「お酒飲んでも平気で運転するし、すぐにモノをなくすし、葛根湯で何でも治ると思とるし、トイレに鍵もかけんし――」

挙げだすときりがない。が、誰の不満をいっているのか、一瞬、マオと重なった。

「それに、消臭剤(スプレー)浴びて喜ぶところ……」

「アッハハ！ ゴメンゴメン」

「“瑞和ちゃん”に興ざめる瞬間やわ」

なぜか瑞和をそう呼んだ。その際、胸元の見慣れないネックレスに目が止まって思わず細んだ。

「肩こりのやつ。自分で買ったの……」

「へえ。そんなんする歳には――」

「見えないって？　じゃあ、見ないで」

「見てませんよ。胸元見とるだけですから」

「じゃあ、見てなよ……」

それきり、欠点をひとしきり言うと、何だかおかしくなって、眼前の四十一歳が愛おしく思える。実に勝手だ。こんなところも、誰かに似てきた。

「やっぱり僕、もう少し、親孝行しときます――」

学問とは母親の面倒を看ることであると、江戸時代初期の陽明学者・中江藤樹は言っただろう。が、一路にとって、母親の面倒、すなわち孝行とは、親に安心する隙を与えず、常に心配させておき、寝転がって読書でもしていることが正解であると考えている。

つまりそれは、もう少し、フラフラと瑞和と突き合っていたいという甘えであるのかもしれないが、瑞和との銀行口座だけはなぜか作った。

他方、視点を少し鳥瞰し、日本の方へ向けてみる。

このお話では触れないが、他国におもねった相変わらずの謝罪恭順外交、国防意識のない選挙権の引き下げ、対価なき拡大する人権と自由というまやかしの個人主義が限界に達し、見かねた米国に灸をすえられた結果が、国内クーデターを招いてしまった。

「お歴々は、何を考えとるんや……」

二十四歳、二等海尉。

この時の太一は、幹部といえどもペえペえで、国家のやらかしに関わることは皆無であったが、モニターの向こうに押し込められた現実が、ときとしてリアリティを喪失させ、戦争を“ごっこ”にしてしまう。

「オレらは、近代主義の錯覚の中で、なんとなく“白けた安全”を提供しているつもりやが……」

現実とは、明確に違って、ほどけようのない団子結びの日の丸に、敬礼だけして、“背広組”の犬でしかない。

それもそうだ。国家の“こぶし”を議論している最中に、内なる暴力装置(警察)と対峙しなければならなかった外なる暴力装置(軍隊)のふがいなさ。世論も世論だ。警察を賛美して、警察の派生組織(日本軍)には、軍国主義のレッテルを張り、置き去りにされた有事法制に正体をばかされたまま、何に対して踊らされているのか、書いている筆者もわからない。

(オレらは、軍人ではなく自衛官のままや……)

そんなことが、中央と各地の駐屯地でおきていても、人ごとのような空気のあった隊内と政府の対応、国内メディア、戦後の“ホシュ”だけを守る保守政党。

「二〇四五年には、外国軍の撤退を――」

実に不思議な現象だ。日本がそう宣言して三十数年が経ち、度重なる反発で日本人をフヌケにしようと企んだ米国が、しっかりしろというのであるから。

折しも同じ頃、台湾が中国に吸収されてしまい、どさくさに紛れて、与那国島、石垣島に人民解放軍が上陸し、日本はようやく、長い夢からさめたかのようにみえたが、その教訓がいかされないままに、古い安保体制の踏襲が、憲法改正となっていく。

そんな主権問題の背中を押したのが、ドルの崩壊というマクロな悲劇の間接ショックであったことには、いささか笑える。

この国の住民は、米軍を追いだすポーズこそとりすれ、戦う気はさらさらなく、庇護下において、ソフトに管理されたいというお上意識は、台湾をとられても見知らぬふりを決め込んだ。

「そりゃ、米軍やって逃げるわな……」(※かつて人民解放軍国防大学の朱成虎教授は、台湾海峡

の武力紛争に米国が介入したら核攻撃を辞しないと発言した)

吉田ドクトリンはなおも健在で、米国と手をつなぐ代償が竹島(米軍基地)と主体性なき身売りの改憲なのだとすると、残るは都合のいい集団的自衛権が織りなす片棒でしかない。

自主独立という言葉は美しい。が、実態は日本軍は米軍と一体化することを意味し、のちに米国の侵略戦争に巻き込まれるという道をたどってしまうのは、いつか来た道(イラク戦争)に似ている。

国連憲章に、ここに詫びよう。おそらく、太一の日常にバックミュージックを添えるなら、デクシー・チックスの“Not Ready To Make Nice”でもかかっているに違いない。
(俺らは日本の商社やのうて、イスラエルなんかを守っとる……)

あれから、幾年か。

一路は、連絡もなくふらりと帰ってくる太一に合うたびに、気の毒そうにいつも接した。
二十七歳。まだまだ、勉強の日々で実戦経験は一度もない。が、その体躯や顔つきからは、同世代の男とは比べようがない。

太い腕。腕相撲は両手でかかっても負けるかもしれない。本もろくに読めなかった弟の眉間にある縦ジワが、なんとも不思議でそんなことがおかしい。

太一は、
「制服では目立つ」

といって、帰ってくるときはいつも私服であるが、どうすればそんなに変形するのか、分厚い胸板がぴっちりTシャツにラインを作っていて、しかも、ロボットアニメがプリントされたものばかりを着ている。

母親が、いつまでも子ども扱いして息子の好きそうな“ママカジ(親が服を決める)”を押し付け、その息子は、さして気にもとめずに身につける。上官に言われるのか、それをズボンの中へしまい込み、

「ちっとは、マシな格好しなよ……」

そう小言とともにマオに身体を触られながら、手抜きのカレーを食べている。

不思議だ。こんなカレーが、なぜだか美味しい。太一は、食べながら、床や天井を見渡した。

開店当初から、何も変わらない店の風景。いい塩梅に時代の付いた柱、壁、回転するカウンターの椅子、なぜか隅っこにいる招き猫、観葉植物のパキラたち――。

変わったのは、トイレとパキラの形態くらいか。どうも元気がなさそうなのは、おそらく、几帳面な兄が、せっせと水をやるからだろう。

そんな兄の一路も、三十六になる。が、六十のマオと共に、たいして老けずにのうのうとしていて、似てもいないのに、なまじ血の繋がらない親子よりも本当くさが漂う。

大塚家は全員、黒髪で、太一だけが焦げた茶色だ。これは、遺伝のイタズラであるが、髪の色にせよ、ハチャメチャだった性格にせよ、太一のほうが、マオの子どものような形をしていた。

父性も、優しいだけのフヌケた父親よりもマオから受けたし、思春期に対立したこともなけ

れば、尊敬したこともない。

「オレは、杉本五郎中佐が好きなんや……」

そんなことを作文に書いて、母親が学校に呼び出された記憶が、いまになって降りてきた。

デザートには、たこ焼きが出てくる。

ふとカウンターの中に視線をやると、古ぼけた“たこ焼きがプレート”を見つけた。

いつだったか、兄妹でマオに送った品物だ。それが契機で、店でたこ焼きも焼き始めた。

が、飽きたらず、甘い生地を流し込んで「たまごボール」やら、プレートすれすれに焼いた「イボイボケーキ」を生み出した。マオは、よく洗わないから、ケーキにタコの風味がいつもしていた。

あれから十年は経つが、太一は、こんなものを大事に使っている第二の母親に、さわやかな温もりを感じた。

地震でもあろうものなら、

「命より大切――」

と、身なり構わず、プレートを持ちだすのだと兄から聞いた。

ほんのささいな、ホームセンターで買った、テフロン剥げきった鉄の穴。下手の横好きでも、年季が入れば奇妙な出来栄え。櫛に刺せば、「たこ焼き団子」とマオは言う。

「ところで、大塚中尉。ちゃんと家には帰ったのかい？」

「帰ったよ。けど、誰もおらんかった――」

これが、明美とマオにまたしても軋轢を生む。

一路はマオにとられた。手のかからない子だったから、放っておいてしまった。

幾美は、夫が溺愛している。

残る太一は――、一番叱り、保護して、愛情を注いだ……、つもりではいた。

国防大学に入学したときも、正式に幹部になったときも、一番喜び、そのつど泣いた。

江田島(海軍兵学校)の午餐会以来、生の太一がひどく愛しい。だから、帰ってきたら、太一の好物は腹がはち切れるほど作ってやるし、身の世話はうとましいほど率先し、尻を拭けと言われれば、喜んで拭きそうな勢いだ。

そんな太一が、真っ先に帰宅せず、マオの店に寄って、よりもよって、出来損ないのカレーを食べさせられることが、どうもおもしろくない。

陰膳のつもりなのか、金曜にはカレーを作り、太一の分を皿に盛る始末だ。おかげで少し太った。そんな子離れできない愛情のはけ口を、なかなかどうして、実の母親が先ではないのか。

とはいえ、海軍とは気の毒なもので、定期的な休みはなく、任務上、休日も漏らせないうえに、太一も太一で、

「びっくりさせたら……」

と、ひょっこり帰省するため、家族とすれ違うことが、しばしばである。こういう運の悪さを明美は呪った。

そんな経緯があるために、太一のいるときは葬式でも執り行うかのごとく家族に大招集がかかるが、マオものこのこと入り込んでくるのが気に入らないという、若作りに励む、ばあさんの独占欲に似た嫉妬かもしれない。

「ちょっとは遠慮して！」「それは、太一の分よ！」

こうなると、集まる趣旨がわからなくなる。家族は、そんな女たちのじゃれあいを横目に、少しずつズレていく家族の時間を並行にしようと、いつになくはしゃいでがちがない。

太一は、確かに代謝していく食卓を眺めて、感慨深い思いをしつつ、帰るたびに成長する翠にいつも驚かされてばかりだ。

「太一は、(仕事)なにしよるん？」

「俺はなあ、船に乗っとるんじゃ」

「漁師さんなん？」

そんなことを、ついこの間まで言っていたかと思えば、

「最近の日本はどうなっとるん？」

と、妙に発育のいい翠に言い寄られた拍子に胸元が見えて目をそらしてしまった。

(痛いこと訊くなあ……)

ふと、話を逸らそうと母親の手料理にしては下品なパーティーメニューに手を伸ばし、ピザを五枚重ねて頬張った。

「みんながクジラ食べんけん、魚取れんで困っとるわ！」

どうやら、太一は、漁師のようであるらしい。同時に、この姪っ子の“弟分”でもあるらしい。行儀が悪いと怒られて、とっさに身構えてしまった自分を可笑しく思った。

さて、その最近の日本における漁師はというと、任務からも察するところ、米軍とお手繋いで、自衛隊時代を引きずったまま駆逐艦(護衛艦と言ってはいけない)に乗り、他国の船に張り付いて、盾屋かガス屋か、国民の駄賃で飯を食うという行尸走肉。我々の守るべき最優先が同胞ではなく、ユダヤ人であることが本当に正しいのか自問ばかりしている。

徴兵制のない我が国においては、集まる有志はひどく優秀ではあるが、海軍の人気は相変わらず低く、軍事費の包括化の行く末が、末端の若者を苦しめた。

なにせ、日本の核武装を米国が容認して、イグニッションキーを共有したあかつきには、実験場、ミサイル、配備する潜水艦、サイロ、爆撃機などの開発に予算を取られて、最前線であるはずの設備が今をもってなおざりだ。

国防予算は増えたものの、それはゆるやかに歪んだGDPという分母のせいであり、1%しかもらえないのは、今を持って変わらないというのに。

「1%にしたんは、確か徳島の総理やったな……」

携帯が使えないのも、精神衛生上、よろしくないのは、いつの時代も若者は同じだ。

ときおり、姉の幾美が基地を通して送ってくる翠の写真が気晴らしだったが、すっかり“娘”にされてしまった。もしこれが、本当に自分の子どもで、仮に潜水乗りだったならば、狭く手足も伸ばせない薄暗い空間で、ときに魚雷の横で、どんな気分で微睡むだろうか……。

そんな夢を故郷で見て、ガタイのいい大男が泣きながら布団にくるまった少女のように目覚めた。

「ちょっと散歩してくる……」

およそ、一年ぶりの我が故郷。次の休暇も、そのまた次の休暇も、何事もなく帰省できるに違いない。それでも、感傷的に街を眺めてしまうのは、自分が軍人だからだろうか。

空は快晴。消えそうな飛行機雲が一本、何月なのかわからない表情をしている。いま、知人に会ってしまったら、決意を新たにするのか、心が弛緩するのか……。

そんな煩いを抱えて、ゲームセンターを覗いて、牛丼をたらふく食べて、まるで高校生に久しく帰った。

ほんの、狭い街(常三島)での憂さ晴らしだ。やけに広がった田宮街道、民家を縫って林立する場違いな高層マンション。ジェットコースターのような新型交通。下からの眺めはよろしくないが、こんなところで、太一は育った。

するとふと、高所の景色が宙で浮かんで、思い立ったらなんとやら、すでに眉山の頂上にいる。

どうというわけでもない。ただ、高所の景色が、街の雰囲気を変えるから。

頂上では、軍歌などを小声で歌った。こういうところは、肝が小さい。

ふるさとは、遠きにありて思うもの。そして悲しくうたうものだと、室生犀星はこう、言った。なるほどしかし、なまじ、近代の軍人というものには、肌で感じる“ふるさと”は毒なのかもしれない。

無意識に自宅の位置を目で追った。少し、視線を西へずらすと、古いショッピングセンターがある。そこで、菓子を買えと母親に駄々をこねた思い出が、公の心を侵食していく。

悲しきかな、二律背反な骨休みだ。

すっかり日差しも傾いた。

吉野川の向こう岸(新都心)は、昼間のように煌々としていて、足元の都心はほの暗い。

少し、わびしい感じがしたが、太一は、このままでいいと思った。

それからしばらく、薄暗い山頂のベンチに腰掛けていると、ランダムに七光する電波塔が鮮やかな赤一色に切り替わったのを契機に、“夜の山”という観念的な恐怖心が悪寒を誘い、急に“へたれ”になっていた。

「翠にやろうと思って……」

帰路、駆け込んだ麓のコンビニでお菓子ばかりを買い込んで、“叔父の顔”で帰宅した。

姪っ子は、そんな経緯を知ってか知らずか、

「ダイエット中だ」

と、可愛げもなく、残りは母親(幾美)に持っていかれた。

そんな姉にすら、文句も言えない気の小ささに、

(俺は、まだまだ弱い――)

と、奇妙な自信が湧いてきた。

いや、本当は、これでも優しい。しばらく合わないうちに、ずいぶん丸くなったように思える。

言葉遣い、視線、振る舞い。

食事の時、黙ってご飯を装い差し出した照れくさそうな姉。上座に座れと言った姉。からむ翠を諭す姉――。

どれも、太一の姉ではないようだ。

幼い頃から、太一は幾美が苦手である。姉は優等生だったが、ときに、カミソリのような鋭さとポリカーボネイトのような分厚さが、周囲をしばしば困らせた。トラウマをいくつももらった。

首にヘビを巻かれたこと、指に絡みついたお気に入りのカブトムシを引き千切ったこと、過去の失敗を、いつまでも話すこと、グロテスクな映像を見せたこと……。

いま、姉の左手の指は人より少ない。極道の世界でもあるまいし、胃ろう(腹に穴を開けて栄養を送る)を中止した実行者として、尊厳への戒めだという。

本人は、ケロッとしているが、指が足りないだけで、別の世界の人間だ。

こんな姉が、母親をして医者をしている。大人しい兄も、いまでは、危険分子で、悪たれの自分が軍人だ。つくづく、人生は、不可思議だ――。

ずいぶん適当に書き散らしてしまった。

このお話は、特別なにも起こらない。起こらないし核心もない。

お遍路ガールのその後、子どもたちの成長と、それでも人は成長しないということを、断片的に綴った。

えてして人々は、“何もない”ことにうろたえて、テクノロジーとカルトにすがって生きながらえて、「無知」という病で死んでいく。

主題は、アンチ・ロマンではあるものの、情景を蓄積するところロマンに昇華するというクロード・シモンな意図もない。あるとするならば、豆腐に刺さった針のごとく、ふてぶてしい牧歌的な日々への警鐘で、継承を忘れた発展をどう克服していくのか。

そんな冗長を紡ぎつつ、愚痴を並べているうちに終わりを迎えようとしている。

「一路お～！ 一路くんや～い」

今しがたカウンターの内側でカメにエサをやっていたかと思いきや、目を離すと、いつもこの男は行方をくらます。たいてい、店の周辺をちょろちょろと歩き回り、危ないと諭しても一人で用水路に行ったり、溜池で釣り糸を垂れたり、近所の商店でかまってもらったり、民家の屋根を歩いたり――、何やら自分だけの世界で冒険している。

「どこに行ってもいいけど、三時になったら帰ること！」

冒険が終わると、音もなく帰ってきて、店の二階にある自宅で寝転がってマオの漫画やら雑誌をめくっては、気ままに過ごす傾向だ。

ところが、この日ばかりは“コイ”のように、手を叩いてもあらわれないので、仕事をほっぽり出して飛び出した。

自宅をひっくり返して、挙動不審で小走りに、デタラメに進んだ。

エプロンをしている。馴染みの店に声をかけるたびに、まるで母親のようだと思って巡った。巡りながら、似たような記憶が降りてきた。

昔、飼っていた犬が迷子になって消えたこと。思い出すと、もはや涙も枯れた想いでに一路が被さり焦燥とした。

頭のどこかには、一路だからという楽観がある。束縛も管理も嫌いだ。だから、預かった“息子”にもGPS(みちびき)を渡さない。そんなことが少し悔しい。手元の端末は、帰宅していると“母親”におしえた。

それから半時間ほどして、警察に駆け込もうとした。ところが、どういうわけか冷静になり、（トイレ探していないや……）

と、一路の紙使いの粗さをおかしみながら店に帰った。

すると、何食わぬ顔で、常連のじいさんの隣で電子図鑑に見入っているのだ。

「あんたのボン、ここにおるでえ」

無邪気なものだ。人の心配を裏腹に、気味の悪い生き物の分裂や増殖の解説を一丁前に聴いて

いる。

「一路、おやつは？」

「あとで食べる……」

(小生意気なジャリボーイが……)

ヘッドホンをもぎ取られ、振り向いた顔が、母親の明美にことさら似ていた。忙しい時に話しかけられて迷惑そうな、あのいけ好かない女と同じ表情。実に笑えた。

「いま、何時だと思ってんの？ 三時半だよ。子どもは、三時におやつ食べなきゃいけないんだぞ！」

「そうなん？」

「そうさ」

「ほな、食べるわ」

「よろしい」

この屈託のない一路の性格は、いったい、誰に似たというのだろう。母親でも父親でもない。(マオ、でかいハンバーガーはな、こうやって食べるんだ)

そう言って、ペシャンコに潰したマオの叔父。

(オジさん、下品だよ)

(下品もクソもあるか。アゴが外れたらどうするんだ！)

(それもそうだね！)

またもや、昔の記憶が降りて重なる。

「なあ、マオちゃん」

「なに？」

「この(図鑑)続き見たいんやけど、ページがめくれん……」

なるほど、図鑑が増えていくわけだ。さしずめマオのそれは、学者の道具(タブレット)のようである。

「わかった、わかった。買うよ。買えばいいんだろー」

あれから十数年経ったが、同じような光景が眼前にある。子どもの頃、よくみた夢のなんたるか。

まどろみが醸す情景の、白い光の真ん中で、男と少女が手をつなぎ、見果てぬ家路に歩き続ける。

あれは、自分と叔父だと信じてやまない。しかし、違うような気もする。一路と翠を見てみると。

「ほの靴、可愛らしいんとちゃう？」

「ほんまやなあ……、こっちも可愛い」

「買え買え、買うたるわ」

「ええて、ママにどやされるて」

「黙っとけばええやないかあ」

「履きつづすまでは、新しいん買うなって」

「“けったい”なママやなあ……」

二〇五〇年になっている。

あいかわらず、徳島は平々凡々としていて、継承のない発展という貴重な警鐘が、いまだに普遍化できずにいる。

古いものは大事にされない、景色は金でガラリと変わる、条例も住民に曲げられる。そんなことは、明美がここへ来てから茶飯事だ。六十を過ぎた相棒(マオのこと)も、左うちわでのうのうと、鳴門のカジノで遊んでばかりだ。ずいぶん、物騒な交友もできているというのに、いつからだろう、この女が学者のように見えたのは。

一路は、あいもかわらずフラフラしている。幾美は今年、再婚した。

(何かが変わるかもしれない……)

そう思って飛び出した千葉の里。しかし内実、あの頃、想像した未来はついにおとずれず、恐ろしいほどに平凡な毎日をも明美は過ごした。

「ママは偉いわ。毎日、同じ事しよる……」

利器とITによって、家事は皆無に近づいた。が、毎日、献立のことばかり考え、子どもたちの心配をして、夫のことを生暖かく愛する。

欲しいものはあれこれ買った。資格もとった。全国、ほうぼう巡った。将来へのビジョンもあった。

だが、埋める気のない白地図を大事に握りしめて、禅のように生きてしまった。

自然のまま、自ら計らわず、物来順応――。しかし、違うかもしれない。この女の握りしめたソレは、白地図などではなく、何ものにも還元できず、どうしようもない白色浮き出しのような、ただれた模様だ。そんな最後に残った白い模様をキャンバスだと信じて、大事に視線を節約してきた。

これが、正解かどうかは、わからない。

ふと、昔巡った四国八十八ヶ所の納経帳をパラパラとめくっていると、親鸞聖人が頭に浮かんだ。

(よく勘違いしたな……)

道中、その銅像に何度も出くわす。そのたびに、空海だと信じて歩いた。歎異抄も知らないくせに、そうではないと否定して、それに近づく。

『最後の親鸞』という本によると、知識にとって最後の課題は、頂きを極めて、その頂きに人を誘うのではなく、極めたらそのまましずかに「非知」に向かって着地するのがよろしいと、およそ、そういう認識が課題であるという。

なるほど、明美はこれでよかったのかもしれない。

本当は、何がしたかったわけでもないし、苦勞も、振り返ってはじめて気がついて、まだまだ、お迎えも来そうもない七十を手前に、踊るほど見てくれもせぬ踊りに一生を費やし、空回りしながら生きていくのだ。

「かーさん、いけるかぁ?！」

段差もない家の中ですっ転んで、マヌケに顔からぶつけてしまった。幸い、一路が泊まりに来ていて起こしてもらったが、早朝のことか、大人になっても寝ぐせを爆発させる息子の心配そうな顔が、おかしくておかしくて、別の心配があたまを巡った。

「ちゃんと、髪乾かさないかんでしょう……」

そして、激突したショックに、幼い頃、遠足で訪れたどこかの公園ですっ転び、起き上がる寸前に見たツツジの花が思い出された。

すると、
(ツツジを見よう……)

と、このバアさんは、思い立ったが吉日か、一人でソレを探しに旅に出た。

だが無茶だ。ロープウェイにも乗らずに眉山に登り、途中、野犬にからまれたあげく、蜂にも追い回されて、今日日、このような喜劇を演じられるのは、徳島ならではの興かもしれない。頂上のホテルから下ってくる観光バスの乗客からは、どういうふうに見えるだろう。

火事場の馬鹿力なのか、ずいぶんと達者に走ったが、やけに荷物が重いのは、遊山箱のせいである。

(遠足か……)

遊山箱(ゆさんばこ)とは、巷でいう弁当箱のことであり、これを重ねて、木箱に納める。

いわば、小型のタンスといっていいい。

食べきれもしないくせに三人前も拍子で作り、三月の徳島城での花見の余韻を引きずったまま、ツツジで乾杯という腹だ。

バカなのだ。バカだから、
「段差は疲れる……」

という理由から、二駅も離れた旧道まで周って、歳も考えずに、てくてくと歩いてしまった。

案の定、膝が痛く息が切れ、身体のアチコチが、ちくちくと痛いのか熱いのかわからない感覚が走り、いっそのこと、このバクバクと威勢のいい心臓が止まってさえくれれば、どれだけ楽であろうかと考えた。

常々、
「長生きしたってしょうがない……」

などと言いながら、栄養剤とサプリメントをかかさないう奇妙な女は、山頂の自販機で柄にもなく炭酸飲料を買い、買おうとしたら、指紋が潰れているのか油が足りていないのか、決済の認証ができずに、ジュースごときで現実を見る。

そして、よよか、若いカップルにおごってもらい、申し訳ない気分でツツジを探した。

探しているうちに、何も眉山でなくとも生えていそうなことに気づいた。同時に、その花が、どういう形のものであったか、記憶があやふやなくせに、見たら思い出すという楽観と、徳島城でもよかったという徒労が葛藤している。

少しうつ向き、さらに公園の上を目指して階段を登った。登り切ったところで、階段に沿った

花壇が、満面のツツジであることに気がついた。

少し触れると、その漏斗(ろうと)型の花びらから水滴が滴り落ちて、それが指につたい、関節のシワに染み込んでいくことに心地よさを感じた。その拍子、手のひらが覚えているのか、無意識に摘みとり、花片の蜜を吸ってしまった。

(ああ……)

すると、六十年以上も前の少女の記憶が降りてきて、その他にも、砂に水が染み込むように、欠けていた記憶が戻っては流れた。

明美は、その戻ってくる記憶を書き留めようと、リュックから手帳を取り出そうとごそごそしていると、トンビが頭上を飛んでいて、一瞬、眺めた。通過すると隠れた日差しが現れて、そぞろ感傷をさそった。

人は、記憶を手繰るときに、よく上を向いたり、目を泳がせたりすることは、神経言語が関連しているとされるが、蜜を吸いトンビを眺めたバアさんの、この満ち足りた気分は何なのか。溢れ巡る記憶と同時に流れ行く記憶の相克。

おかしい自分は自覚している。酔ってもいないのに酔った感じになり、初めて酒を飲んだときのように、腹のあたりが熱くなり、軽い浮遊感が訪れる。汗ばみは、春の日差しのせいだろう。上着を脱ぎたい気分だが、パーカーの絵柄が恥ずかしい。

そんな頭の片隅は、どういうわけか、十九の明美が、“克己”と書かれた張り紙を背に、受験勉強をしている風景……。高校時代のジャージを着て、肩がこるのか、胸を机の上に置いて前のめりになり、辞書でも引いているのか遊んでいるのか、小さな画面を凝視している。

「もう(朝の)四時半か……」

あくびをしながら背伸びをして、そのまま机に伏せ込んだ。そんな自分の記憶を他人事のように見つめて、見つめていると眠くなり、後はどうにも思い出せない……。

「ママあ、しょーもないことで運ばれんってよ！ 恥ずかしい……」

目覚めると、呆れた顔で腕を組む、白衣の幾美が立っていた。

花壇で倒れて、蔵本にある幾美の病院に運ばれたのだという。その主因が、“花を食べた”ことによるもので、運ばれてきた老人が、まさか、自分の母親だったとは、この三十三の外科医も夢にも思わなかったことだろう。

「昔はね、みんな蜜吸ってたのよ……」

「毒があるのも、あるんやで」

「ええ?!」

「なんや、知らんとチューチューしとったん？ 血相変えたパパ以外、みんな笑っとたで」

そう娘に説教され、ようやく、自分のしでかしが人様に迷惑をかけてしまったことに赤面した。同時に、知らぬ間に医者として自然体になった娘に安堵を覚えた。

幾美は、怒りながらもカルテを眺めながら、ポケットのあめ玉を探るという、器用な脳をもっており、会話こそなりたってはいるが、明美は、どこか落ち着かない気分でした。

そして、幾美がポケットからセロハンテープを取り出してしまったのを見逃さず、

「それ、人のじゃないでしょうね」

と、今後は形成を逆転しようと試みた。

「ああ、これ……、誰のやったっけ？」

幾美は、いつもこうなのだ。小物は自分のポケットへ。

何の冗談か、再婚相手を須賀(すが)という。もとは蜂須賀(はちすか)という姓を名乗っていたが、蜂須賀家最後の当主である正子氏の死後は、揃って「蜂」の字を返上している。

藩主の出というわけではないが、戸籍法の緩和に絡めた敬愛である。

しぜん、幾美もそういう氏名になっており、ますます、盗賊まがいになってきた。(※初代徳島藩主・蜂須賀小六は、盗賊だったと云われる)

「それはそうとー」

娘は思い出したかのように、母親に、ガンが見つかったとさらりとおしえた。

明美は、少し驚いたが、バイオでちょちょいと治されてしまう時代において、治療を拒んでも、生命至上主義の名において、置き去りにされた尊厳に、生かされるのだらうと思うと、むしろそのことにがっかりもしていた。

「ママもメジャーねえ……」

やるせない表情で幾美に話した。これから半月も、病院の監視下にいなければならない。

どうしてだろう。ショックだったはずなのに、やけに落ち着いていて、献立の心配をしている。

こういう感覚には、覚えがある。悲しくないのに、周囲が腫れ物にするから、期待に答えて泣いたのだ。

明美は、死ぬ気もないのに、安全な死の疑似体験がしたくて、背中をまるめているさまは、しごく文学的な贅沢のなかに原因がある。

確かに、命は、重苦しい……。だが、一筋縄ではいかないほど、人間は、たいそうな生き物でもない。ということを齢いとともに気がついて、自分のことよりも、病室の角の花瓶が曲がっていることが、気持ちが悪くてどうしようもなかった。

そんな“泳いだ母親”に、幾美は、呆れるように答えた。

「メジャーは中絶やで……」

そうつぶやくと、怒ったように病室からすっと出ていった。

享年、七十。

変わりゆく時代のなかで、結局、変わらなかったものは何だろう。

それは、自分自身に他ならない。

――変わらずに生きるためには、変わらなければならない。

イタリア映画でかつて観た。

そうであるならば、明美という人物は、そういう『自分』という設計図を大切に握り締め、線を引きなおしては、いつも不満で満ちていた。

そして、「何か」が自分をうんざりさせた、その「何か」とは自分のことだ。それでいい、そういうものだ。そういうモノが明美である。

南無大師遍照金剛。

ただ過ぎに過ぎるもの、帆かけたる船、人の齢い。春、夏、秋、冬――。

それは、長くつまらない暇つぶしに徹した、明美の数瞬間の出来事であったが、この女は女なりに、

「ずいぶん、よい人生ではないか……」

書いている筆者も、そう思っている。

翠が目を覚ますと、少し天井が近づいているような気がした。よく見ると、自室のそれとは少し違った色合いだったが、焦点の定まらない寝ぼけまなこには、さしてどうでもよかった。

飛行機の音がしていない。代わりに、近くで滑車のような音がしていて、横になったまま薄目を感じる窓の気配で、状況がふいに降りてきた。

一路(伯父)のもとで外泊したのだ。昨晚は、地べたに布団を並べていたのに、いつの間にか移動していて、気づくとベッドで自分が寝ている。一路が隣にいないのは、開店準備のためだろう。

軽く触れておくと、一路は明美(母親)の親友であるマオと共に暮らしていて、家業のカフェを継いでいる。鉄筋六階建てビルの下(一階)に店を構えていて、他の階は事務所や民家だ。

築五十年以上が経過しているが、リフォームを何度もやっていて、見てくれは案外、新しい。その二階部分に、一路とマオが住んでいる。

さて、翠は、今年で十七になる。一路の妹(幾美)の娘だ。

高校二年。見てくれは、幾美の若いころと生き写しのように似ている。が、医者の子というわけでもなく、勉強はいまひとつ苦手で、休日の学校へ補習に出かけるさまは、もう一人の叔父である太一と同じだ。

それでも、羊頭狗肉の外見は、イメージが良いのか、

「休みの日なのに勉強？ 偉いなあ」

近隣住民からの誤解は、複雑ですらある。

(偉くないから、行っとるんや……)

さしずめ、医者の子という神話の正体は、BL漫画のワンシーンを想像していても、立派に見られてしまうというはた迷惑な買いかぶりかもしれない。

一路に憧れて後を追った、つもりではいた。だが、ついていけない……。頑張れたのは高校受験まで。太一を除けば、一路と幾美は、四国州でも第一席の進学校。もし、努力と才能の他に遺伝というものがあるのならば、早く繋がっておきたい代物だ。

幸い、幾美は娘の素行にこそ厳しいが、慰めのつもりか成績はカリカチュアな無頓着さで、それがかえって悔しさを煽った。

「ま～た無駄な努力え？ 翠さん。女は偉くなったらいいやらしい。パアでおり、おりー」

「アホ言わんといて。お兄ちゃん(一路)に教えてもらうわ！」

そういう具合に、飛び出すこと幾度となく、小学生でもあるまいし、年頃の娘が、四十一にもなる男を好きこのんでなついている訳のわかりようは、少々、複雑かもしれない。

昨日から振り続けた雪は、大寒だというのにすっかりやみ、肌に刺さるような冷気だけ残して、日が昇ろうとしている。いつつけたのか、テレビの天気予報士は、雪のマークばかりのテロップの後ろで「もうすぐ春だ」と白々しく微笑み、春は名のための風の寒さだ。

厳しい放射冷却な朝でも、おそらく、その澄み切った空気や空は、気持ちのよいものに違い

ない。

だが、あいにく、この娘は、極度の低血圧で、目覚めたからといって起床するわけでもなく、しばらくは血の巡りと対峙しなければならない。これが“あの日”と重なると、女に生まれたことが難儀だと感じる。

寝かされた布団が、一路のものであると気づいたときには、またもや眠気が翠を襲った。

幼い頃より、よく抱えおぶられしてきた翠にとっては、一路の匂いがとても眠たい。それが、心地よいものだと思いついたときには、子どもというには少し苦しい、女子の論理が完成している。

肩をたたいてやったり、腕組みしたりは茶飯事だ。しかし、後ろから抱きつき、背中の匂いを嗅ぐような、そんな破廉恥は、この薄い毛布で我慢して、またもや、うつらうつらと微睡んだ。

とはいえ、目覚めの尿意には抗えず、スタスタとトイレに駆け込むという朝の儀式は、いくつになっても変われずにいた。途中、鏡に映った寝起きの自分が、嫌いな母親とそっくりだ。ほったらかしにするくせに、怒ってばかりで他人には優しい。

そんな女を反面教師と思い定めて、次第、似てくる自分も付随して嫌らった。

用を済ませ、部屋に戻ろうとすると、戸越にマオが翠に話した。

「起きたのかい？」

「うん、おはよう……」

そろりとドアを開けると、器用なことに、マオは寝ながらタバコを吸っている。

煙こそないが、刺すような臭いの中で、一瞥もくれずに宙を見ている。眼の色が移動しているので、テレビでも見ているに違いない。その上で、印刷物のペーパーバックも読んでいて、さすが一路の“母親”だと思った。

「何、見とるん？」

「につけいしんぶん……」

そう言ったわりには、空間上に印をつけているような動作をしていて、およそ、競馬新聞でも読んでいるに違いない。

この娘も、母親の影響か、人体をいじめることがほうっておけないらしく、

「寝るときは、グラス型にしたほうがええよ」

などと、マオの眼球に小言をこぼした。

この時分の映像というものは、およそ眼科と直結していて、掛けるかはめ込むかというメガネと同じ扱いだ。倫理的観点からいえば、再生医療の進化も手伝い、先人が夢見たような人体の電脳化の世界は訪れそうにもない。

「コンタクトは外して寝なさい」

そんなことを、昔、祖母が母親に言っていた気がする。同じようなことを、また自分が言っているのだ。

マオは、へいへいと表情でこたえと、上半身だけ起こしてタバコの灰を落とした。

「朝メシ、食べた？」

「まだやけど」

「ほな、下(店)でもらいな」

「うん……。マオちゃんは？」

「あたしゃ、これから寝るんでお構いなく——」

そんな、他愛のないやりとりをしていると、マオが一路を媒介とした“祖母”という感覚ではなく、むしろ、この六十五歳が友達であるかのような錯覚がしていた。

湿っぽいのでさらりと流せば、翠の祖母である明美は、二年前に他界した。その前の歳に、母親の幾美は再婚して、これを契機に家族が別れた。

再婚相手に遠慮して、祖父は一人で高専賃。叔父の太一も、小松島で所帯を構えた。

聞く話によると、祖父は娘の幾美を溺愛している。それは、一種の下僕のような枯れ方をしていて、妻の他界後は、かまぼこ一本でも“食事”と呼べるこの限定合理主義者は、己を装置として振る舞うことができるという。すなわち、明美の幻影ともいえる娘の荷物になるならば、豊饒(かくしゃく)としていても、

「また小便漏らしてもたあ！」

と、面倒なジイさんを演じて孤独を選んだ。そこへ、幾美との「一緒に住む」、「住まない」という悶着のまま、ケンカ別れという形で着地した。

ときおり翠は、そんなジイさんのもとへ出かけるが、ふと握らせてくれる小遣いの多さに、かえって足が遠くなる気がした。案外、祖父母と孫の関係は、下心がある方が円満なのかもしれない。

とにかく、各々、ほどほどに、かつての生活が変形していく。見渡せば、翠もそのうちの一例でしかない。

まず、母親の再婚とともに苗字が変わった。

新しい姓を須賀(すが)という。その下に、翠という名がぶらさがる。はじめは他人のような気がしたが、三年も演じると慣れてしまった。

その間、歳後の弟妹もできていて、翠の思春期は駆け足だ。

はやいもので、長男のはやとが三歳で、次女のゆきえが二歳になる。同じ腹から生まれたが、似ているようでどこかが違った。

とりわけはやとは、父親に似たのかゆるい顔をしていて、すぐ泣く。鳥の子でもあるまいし、歩けば後から付いてくる。それはそれで可愛いが、ひっぱりぐせが腹立たしい。無邪気なもので、この男児の“ぶら下がるというスキンシップ”は、一張羅の服を遠ざけて、さしずめ、白服のカレーうどんといっている。

「お姉ちゃんの服、引っ張らんとといて！」

とはいえ、はたから見ると、翠が後ずさりして伸びているような風景でもある。

座っていても気が抜けない。少しでも“つまめそうなモノ”があれば、ボタンであろうがブラジャーの肩紐だろうが本体(翠)を素通りし興味津々で、こういう狭窄的な散漫は、案外、母親(幾美)に似ているのかもしれない。

結果、言葉の通じない動物のような弟には、額を中指で弾いて泣かせるしかなく、それでいて

、怒られているのにあやしてほしいのか、今度は、

「ママ、ママ……」

と、翠をそう呼ぶのだから始末におえない。この姉にいたっては、母親から厳しくされていたので、叱ることが教育であると思っていれども、可愛さ余って、よけい、いじめたくなるという感性は、幾美と太一の関係にことさら似ていた。

「ママは、“あの人”やろ」

ところが、当の母親は、幼い息子は猫可愛がりするというダブルスタンダードな愛情が、翠にはおもしろくなかった。一方、妹のゆきえは、おとなしい子で扱いやすいが、弟ほどなついてくれぬところもまた、面白くないという小さな不満の連続だ。

ついでに書いておくと、母親の再婚相手は、小太りのエンジニアで、テレワーカーのかたわら主夫もしている。突然できた大きな娘に幾美の面影を見て、遠慮気味に接したりするのが、いつまでも気まずく、

「お父さん」

と呼ぶのが限界だ。よそよそしい感じはしている。が、この男の中でも、完全に娘ではないようで、翠もうすうす知っていた。母親は、あいも変わらず忙しく、いつ眠っているのか、首を絞めてやっても、おそらく死因は過労死だ。

そんな、新しい家族が、どこかしんどい。翠が一路をたよるのも、そんな日常からのささやかな逃避なのかもしれないと、手すりを伝いながら階段を降った。

「あれ？ 翠ちゃん、お泊りしとったん？」

するとそこには、翠もよく知る顔がいる。アルバイトの女だ。雰囲気がいつもと違うのは、目にする時間のせいだろう。

急いで出勤したのか、少し髪が濡れていて、ズレたエプロンの肩紐や、薄い化粧が、朝の弱さを披露していて、なんだか笑えた。

年格好は二十代半ば。太い眉毛以外はさして特徴もなく、美人でもないところが、翠には可愛く見えている。他方、一路はどうだろう。

この娘は、一路の周辺でちょろちょろする女が無条件で嫌いだが、このアルバイト女は例外にしている。

翠は、偏屈なことに、よく知る間柄とそうでない関係においては、厳しい反応を示すのに対して、その中間に当たる立ち位置が、なんとはなしに心地よい。そこに、少々の子供っぽさが加われば、すっかり相手と友達だ。

マオは、昼前に目覚めて、気取っていえばランチを済ませたら、散歩がてらパチンコに出かける。そこで金にすればいいものを、どっさり菓子や玩具に替えてくる。その戦利品を、正午の店でひっくり返して、客に配るのがなわらした。

「マオちゃんは、もも太郎系やからなー」

そんなことを、いつぞや母親が言っていた。そこに紛れて、菓子を選ぶアルバイト女にささいな安心感があるのかもしれない。もしくは、マーブルチョコのピンク色ばかりより分けて、

「便秘に効くかも……」

などという発想が、一路とどこか似ている。

「翠ちゃん、何食べる？」

バイト女は、察しているのか、拭き掃除をやめてカウンターの中に入った。翠も反射的に拭き掃除を代わって、テーブルを拭きながら決めかねていたが、このバイト女は訊いておきながら勝手に準備をやっている。その手際の良さに、少し妬けてしまった。

店内には、一路の姿が見当たらない。そんな一瞬の挙措を読み取って、
「植木の剪定――」

だとマジックカーテンを切り替えた。マジックカーテンとは、ある時はガラス、またある時は鏡、テレビといった発電付きのサイネージ窓であり、いままでは目隠しされ景色が遮断されていたが、“ただのガラス”に戻すと、斜めからの朝日とともに、一路の姿が現れた。

外からは中の様子が見えないのか、職人のような顔で剪定をしている叔父がおり、しぜん、老後もあのように暮らしているのだろうと想像するとかなり笑えた。

一路という男の剪定理念は、部分最適を否定して、周辺の要因を取り込んだ、いわば、全体最適を好む傾向がある。無造作でも、隣の植物や周囲の建物と調和さえしていれば、それで良い。近づいたり下がったり、下から覗き込んだり、ガラス越しに見えるその人物は、一見すると不審者だ。

「なんか、変な人が外におるなあ」

「ほんまに……」

そんな話をしていると、朝食がするする運ばれた。翠の好きな品書きだ。

コショウのきいた玉ねぎと牛肉の炒め物を、野菜とともにパンで挟んだパニーニと、サラダとオニオンスープとお代わり自由なコーヒーが付く。

これだけのものが、たった五百円で売られているのだから、身内としては心配だ。
(こんなんでも儲かるのかなあ……)

と、そんなことを考えつつ、サンドイッチ(パニーニ)にかぶり付く。七時を過ぎると、ちらほら常連客がやってきて、そのまま翠も手伝った。

＊

「公ちゃんはホンマに可愛いなあ」

午後からの幾美は、小松島の中田(ちゅうでん)にいた。

ここに、従弟の公司(こうじ)が住んでいる。妹のゆきえと同じ二歳で、太一の息子だ。

「アルバイト代だ」

と、一路から小遣いをもらってしまった。時間をつぶせということだ。

その足、買い物でもしようと思つて旧市街(徳島都心)の方へでかけてはみたものの、一人の街ほどつまらないものはない。ウィンドウショッピングという冷やかしも、神戸ほど目の正月にもならず、

かといって、いまから三宮というのも億劫で、
(もう一人、誰かが、ここにいたらいいのに――)

と、どこから手を付けていいのかわからない厳ついパフェを眺めて、無理にため息をついてみた。

(これ食べたら、二日はごはんいらんな.....)

何がほしいでもなく、したいでもなく、ひと時のお一人様を満喫してみたが、充実しているふうに見えるのか、誰も男は声をかけない。結果、映画を見て、喫茶店をはしごしてしまうのだから、

「趣味は映画鑑賞とカフェ巡りです」

などというありがちなプロフィールは、こういう状況を指すのだろう。

ふと店内に視線をやると、対角の席に、若い子連れの女が座った。まもなくして、女の横の窓ガラスにベビー用品の広告が映しだされて、会社の顔がぼっと浮かんた。しぜん、小松島行きの列車に乗っていて、右に至った。

小松島に住んでいるのは、妻の実家近くに置いておくという、この留守の多い太一の気遣いからくる。近くには、海軍兵学校(江田島)と一文字違いの和田島というところに海軍駐屯地があるが、さして住居理由とは関係がない。

マオの店から国道五十五号線を十五キロほど南下したところにあり、「徳島市」のくせにいくぶんのどかだ。

かつて移行された道州制の時分、小松島市は徳島市と合併して、「小松島区」として運営している。区章がイカリのような形であるのは、港湾都市の名残であり、いまや、単なる医療福祉の街である。

「いつも悪いなあ、翠ちゃん.....」

「ううん。ただの自己満足」

ふいに抱きかかえて、頬ずりをした。日向の匂いがする。その中に、微かな乳臭さもある。それがなんとも、かぐわしい。ぎゅっと抱きしめて、柔らかい肌の芯にある熱にただ近寄る。可愛さ余って、潰してしまいそうな衝動を抑えながら、指揮者のように男児で遊んだ。

会社は、されるがままに、翠の腕の中でウトウトしている。いやむしろ、翠から受けるはた迷惑な愛情が疲労感を生んで、眠気を誘うのかもしれない。無意識に指の数を数えたりするのは何故だろう？

こうして従弟を見ていても、歳が離れているせいか、それとも身内の子どもだからか、母性のはしりをくすぐられて、まるで、親にでもなったような気になる。そして、
(子どもも良いものだ)

などと十代の小娘が一丁前に女の手をしてしまうのは、先日、済ませた初体験のせいでもあらう。

翠は、幾美と動揺、人に見られる顔をしている。母親ほどツンとしていなかったから、学校では言い寄る男は数えるほどいる。ところが、好みは親子で似るようで、翠もパツとしないような男を選んでしまった。

中肉中背で何が優るでもなく、平凡な顔つき。三限目の休みには、いつもメロンパンばかりを食べている。そんな男に目が止まって、掃除当番ではち合うと、ついつい声をかけてしまった。それきり、なんとはなしと一緒に過ごして、伯父の一路にも合わせてしまった。

たいてい、“年頃”というものは、異性を身内に紹介するさい、すでにそれなりの儀式が済んでいる。

ところが、翠と幾美という親子は、貞操であるという証明がゆえに、先に身内に紹介することが健全であると考えていて、こういう感覚の違いは、しばしば周囲を踊らせた。

「父親みたいな顔しちゃって……」

マオが動揺する一路を揶揄して笑った。あの当時は潔白だったから、無邪気に笑ってみせたが、しだい、健全というパラドックスにはまって、どちらが誘うともなく何も始まらない男女の仲を詰めたのだ。

好奇心だった気がする。そこに、恋だの愛だのというものは、おそらくない。

あるのは、乙女でもない冷めた自分と、“大人”としての具体的なものに身を寄せてしまい、ただただ、ラブハンドル(腹の贅肉)をさするボーイフレンドの手が心地よかった感覚だけかもしれない。

そのくすぐったさが無頓着になるにつれ、少女ではなくなっていく自分が、社会的にわかっていくようで、翠を女として、たかをくくらせている。

(これくらい普通や……)

以来、不倫妻が夫の機嫌をうかがうように、男と転げてしまうと、懺悔的反動で一路に会いに行くという分かりやすい自分がある。

一路は、父親でもなければ兄でもなく、まして恋人ではない。伯父だと言われても実感がない。そのわかりにくい男性像が、翠の思春期を複雑にしている。

このお話は少女漫画ではない。ないから、一路と翠は、どうもならない。

ただ、この解くのが難しく、解いてしまえば何かを壊してしまう関係に、面映いクッションを挟んで、少し間を置く。そのくせ、自分の心理作用を決定づける所作をひねって、一路に会いに行きたいがために、ボーイフレンドとどうこうしているというのが正解に近い。

(いっそ、血筋が違えばよかった……)

会社は、二歳にしては身体が小さい。言葉はさして話さないが、髪の手は誰かと同じだ。

性格はいたって大人しく、ひっくり返っても微動だにせず、鳴き声一つあげない。

(我慢強いというのか、鈍いというのか――)

その上、誰に似たのか“拾い癖”があるから、カゴのありかを教えると、この年にして掃除を覚えた。

それにしても、公(おおやけ)に司(つかさどる)とは、実に太一らしい命名だ。もしこれが、女の子だったならば、公子(きみこ)とでも名付けたに違いない。だが、男でよかった。

この軍人の父親は、息子の可能性を肯定していれども、

「お前は、庚申新八(こうしんしんぱち)みたいやなあ」

と、どこか自分と同じ道を歩ませたいと考えていて、口数の少ない軍曹のような、そういうメタファーによって息子の成長をおかしんでいるのだ。庚申新八とは、阿波狸合戦の金長方に就いた寡黙なタヌキのことである。

母親は、おもしろくないから、
「(公司を)タヌキと一緒にせんといて！」

と怒りつつ、津田に住む友人の悪口を、どうしてか、伝説に因縁を重ねて叩くのがストレス発散のはけ口だ。

ゆえにか、いまでこそ、この男児は大人しいものの、遺伝上、騒々しい“お子”になるのは、時間の問題とっていい。

少し想像してみた。父親の太一は言うまでもないが、その配偶者の名を一美(かずみ)という。器量はそこそこに、スラっとしていて、どこかマオと雰囲気似ている。豪快で快活で、見透かしたような目をしているくせに、その実、何も考えておらず、当てずっぽうで、それでいて鋭い。

総じて、何かを割ったような性格で、昔はずいぶんと暴れたのだという。

ひと通りの非行に手を出して、何度も補導をされている。成績は太一顔負けで、死のうと思ったことがあるのか、手首にはうっすらと線があり、化粧で脂ぎった携帯の画面が何もかもを物語っていた。

ところが、年を食うごとに丸くなっていき、妊娠を機にタバコも止め、いまではただの母親だ。

髪は黒いが耳にはピアス穴がぽっかりと開き、腕にはタトゥーの跡がある。その模様がイカリのような形をしているから、「愛郷の証だ」といつも言う。ローライズのジーンズからは紐のようなショーツが覗いていて、なるほど、脱衣所に吊るされたソレが頷ける。

それでも、どこか安心感があるのは、人の親であるからだろうか。暇さえあれば、保険の資料をいつまでも見ている。

もしくは、なんだかんだ言っても、自分のことを見てくれて、一路とは違った接し方をする太一が選んだ“お墨付き”だからだろうか。

どこで知り合ったのか、太一よりも年下だ。いつだったか、女子としてのたしなみで、馴れ初めを訊いても、

「恋愛に決まっとるやん」

と、太一など見合いで選ぶような男ではないと豪快に笑い、夫を見事に手なずけているさまが、見ていてどこか心地がよかった。

「太ちゃん、帰ってきたらアイロンばっかりかけとるんよ！ キモいやんなあ……」

会社がぐずっても、
「気の済むまで泣け」

と、放っておく教育方針は、さしずめ父親のような感性だ。または、自らを反面教師としているのか、息子に対してはずいぶん厳しい。

そんな嫁でも、義理の兄である一路の前では、どういうわけか、しおらしく、小さい。

顔色をうかがい、機嫌を取るようなその仕草は、どこか怖がっているようにも見てとれて、そ

れでいて、上目づかいなさまは、いくぶん女のような体をしている。

一路に近づく女は、大きく二つに分けられる。それは実に極端だ。

遠慮気味に依存してしまうパターンと、生理的に受け付けないという気の毒な恐怖だ。

翠は、そういう一路に対する評価がわかるような、わからないような、そんなわかったような気になって、伯父の背中をぽっと浮かべた。

確かに、交友関係は幅広く、州の役人から強面の男まで付き合いがある。とりわけ、左巻きの人々からは何件も訴訟を抱え、公然と批判をされることは茶飯事である。花街でもで仕入れてくるのか、議員の悪さをよく心得ていて、しかも、公の場でポロツと口にするから、案外、弱みとして脅されるよりも、

「知られるとマズイ……」

という心理効果を生むのかもしれない。その上、気の毒なことに、この男は、本当に知り得ないことでも心得ていると思われて、口をつぐんでいても無言の圧力になるのかもしれない。

「一路さ〜ん、なんか、内容証明が届いてますよ〜。見ていいですか？」

「ええよ。適当に笑ろってー」

一路は決して運動家ではない。わかりやすい不正になど興味すらない。己を手本ではなく見本であると思い定め、ただただ、日本的な感覚や美意識を壊す勢力に物申しているだけで、居丈高に暴れまわって、日常からはぐれてしまう連中を批判こそする。

いやむしろ、世の中の仕組みの上、少々の不正や不平等は、必要であると考えていて、単なる「かわいそう」などというヒューマニズムや安っぽい福祉思想もどうでもいい。

それは、酒の席で子どもにきかせる程度の常識をこぼして、顰蹙(ひんしゅく)の代償に公論を言う。個人主義者なのだ。

えてして、田舎はコネと世間で出来ている。だが、この倫理観は、事なかれ主義と右へならえの圧力に成り下がり、現実を直視できる“子ども”がいなければならない。

杓子定規と紋切り型の受け答えが嫌いで、自分の言葉でモノを言う。それが、思考停止した人々には、予測不可能な存在として白い目で見られるのかもしれない。

本当は、静かに暮らしたい。しかし、図らずしも影響力をもってしまった。

(ノブリス・オブリージュってもんは、個別の意思(ネット世論)やのうて、嫌われ者が言うたらええ)

いつだったか、旧友が事件を起こしてインタビューされたときも、

「アホまるだしでしたわ……」。

頭を掻きながら、その可能性を肯定して、スタジオを凍らせてしまったことがある。

幾美も同じだ。徳島人の健康に関する学会で、

「(徳島人は)食文化を否定することです」。

ああ、やはり、この男と幾美は兄妹なのだと。

それでも、いまどき手作業でフィギュアを作り、大学生のアルバイトに小言を言われてシュンとなり、暇さえあれば少女漫画ばかり読む四十歳は、やはりある意味――、

「怖いかもしれん……」。

翠は、いつの間にか眠ってしまった公司を見つめて、顔が緩んだ。

太一の嫁は、そんな翠を一瞥すると、ニカッと笑った。そして、寝ている公司を抱きかかえ、前髪を直しながら、しばし黙って見ていた。そこには、言葉では形容してはいけない疎通がある。

これが、普通の母親というものであろうか。翠には、そういった記憶がみじんもなく、その不思議な光景にさみしさすら感じた。

昔のことは、よくおぼえている。けれども、その全てが一路がいつもそばにいて、手をつながれ、腕の中にいた記憶ばかりだ。生まれでた後も、そうだったのかもしれない。思い返せば、ずいぶん一路には、“パパ友”を作らせてしまった。

それもこれも、
(ママがおらんから――)

このどんよりとした気持ちは、自分が“年上”になっていくことに比例している。

もう少し、振り返ろう。

公司は未熟児として幾美が務める病院で生まれた。目と鼻の先に産婦人科があるにもかかわらず、通院、距離にして十五キロ。幾美が取り上げるわけでもないのに、

「お姉さん(幾美)がいるところが――」

安心だろうという観念的理由がそうさせた。だが、間違いだったかもしれない。この外科医は、しばしば、関西的な湿り気(ウィット)で、

「失敗したってええやない。人間やもの……」

などと昔の詩人のつもりか、強面の患者をドクハラまがいに脅すクセがついており、義理の妹へも右に同じだ。

一美の両親は、はじめて関係した身内の医者言葉に、すがったり動揺したりして、院内を何度も徘徊する奇行が滑稽で、妊婦は、少し安らいだ。

「(出産の)ビデオ撮っとく？」

「別にいりませんよ……」

「太一、あれで“おじくそ(怖がり)”やけん、後で見せたったらおもしろいで」

「ほれも、ええですね――」

そして朝方。想定外に陣痛が来た。幸い、あっけなく公司は飛び出したが、そのあとは生死をかけるドラマがあり、夜勤明けのぐったりしたような顔で甥を眺めていた母親(幾美)の横顔が、少し胸を突いたのだ。

あれから二年が経ったが、この居心地の悪さは、なんだろう。父親がいないことは克服している。ルーツが不明であることへの虚無感ややみくもな怒りも、思春期に飽きるほど悪い悩んで、母親とは何度もぶつかった。このストレスが成熟したら、きっと奇妙な変形を遂げて、消えぬ心労となるやもしれない。

それなのに、煩いに近づく癒しにふれて、抜き差しならぬ不胎化への介入を無意識にやるのが

、翠の衝動であるようだ。

「ほな、お姉さん(幾美)によろしく」

何をどうやって過ごしたというのか、いちいちが思い出せない記憶を残して、公司の元を後にした。歯の裏に湿ったクッキーがへばり付いている。およそ、菓子でもつまみながら、女子会でも催したに違いない。

振り向くと、眠った腕で無理やり「さよなら」をさせられる見送りの公司が少し笑えた。

(ええかげん、家に帰らな.....)

と、帰りの列車に揺られながら、そんなことを考えている。

翠が外泊をしたのは、母親とのささいな口論が原因だ。ささいすぎて、理由すらも忘れてしまった。いつも何かに不満なのに、とりとめのないことが治まりもせずに蓄積して、平常心を保ってみせても、周囲には難しい年頃を演じるしかない。

そんな家族の調和を壊す腫れ物に、母親の言葉は少し冷たい。

「須賀の人らに迷惑かけんといて.....」

三年前、そう言われたことを、今でもハッキリと覚えている。たった一言だったが、この少女も一路と似ていて、口蓋を走る前に、相手の心が音として聞こえる。

あの頃は、あからさまに反抗して、再婚相手(父親)にも憎まれ口を叩いた。目が合うと逸らすし、廊下ではち合えば舌打ちをする。母親に叩かれたのもあの時が最初だ。

それでも、家族が増え、母親が職場に復帰したら、不完全燃焼のまま、なんとなく家族をやっていて、うっかりすると、溶けこんでしまいそうな自分がいる。

億劫に振る舞ってみても、学校帰りにおむつを買って帰るし、弟妹のふいなしぐさを写真におさめる。泣かせると母親がヒステリックに騒いだりするが、それでもほうっておけない。

料理を作っても、

「食べ飽きたわぁ」

と、お世辞の一言も言えない幾美の間で、義理の父親との距離が、少しずつ縮んでいくのは、ひとえに母親が正しくないからだろうか。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず一。

(嫌なことがあれば、一路のところへ行けばいい.....)

そんなことを繰り返し、翠は須賀をやっている。

＊

北沖洲(きたおきのす)駅のホームに降り立つと、南口から自宅のマンションが見えている。フロアごとに回転する円柱形の建物だ。

北沖洲というのは、渭東区(いとうく)にある。旧市街地からひたすら東。吉野川デルタ最下流部に位置する。かつては中央卸売市場や木材加工所などがあった地区であるが、臨海部という立地

が津波ブレイン(移住権利(義務)地区)に指定されたのをきっかけに、公官庁の集積と避難所としての高速道の高架化という利便性の勝利で、郊外という性格をビジネス街へと変えてしまった。

土地はそれほど広くはない。が、高さ制限の形骸化とともに、日影規制や斜線規制が緩和され、ここ十年足らずで、ビルが林立してしまった。そこから発生する日照権対策として、ビルが回るというわけだ。

一見すると、面白そうな建物だ。しかし、日によって変わる角度は、新鮮であれども、その定まらぬ風景が心理的ストレスであるのもまた事実だ。

早朝は、街の上を飛行機が飛ぶ。こんな凸凹した風景でも、成長は天井を打ち不景気で、土地資源が足りないから、上へ、沖へとひたすら広がっていく何かに偏重した市政。

特産品は、青々としたねぎ。マリントーミナルがあるのに、「港区」というような洒落た区名でもない。

翠は、申し訳程度のドーナツを引っさげて、エレベーターの中で自宅の階までどんよりしていた。

おそらく、ドアを開くと、はやとがどっと駆けよって、足にさっとしがみつく。そんな弟を抱えて廊下を進むと、カウンターキッチンの中から、夕食の支度をする父親が気まずそうに、「おかえり」と言う。その向かいのリビングで達観したようにテレビを見ている母親は、一瞥もくれずに、

「あら、お姉さん、お早いお帰りで――」

などと、さらりと言うに違いない。

＊

今、この瞬間に生まれでたようなまどろみの中、

「お姉、お姉」

と声がする。

揺さぶられている。触られている。財布を探られているような感覚もする。

明美はとっさに飛び起きた。

「お寝坊さんだね～」

そして、視力を疑った。眼前には、妙に若いマオがいるのだ。これは、夢か現か幻か。

夢見心地でどこかに着地した感覚は確かにあるが、その足元が自分のものではないような、奇妙な境界で茫洋としている……。

マオは、そんな寝ぼけ眼の明美の言動を一笑して、胸をつねった。

「アンタ、何歳？」

「まだ寝ぼけてんの？ お姉、傑作！」

そういうと、マオは、明美の布団を剥ぎ取り片付け、部屋の掃除をせっせと始めた。

海岸沿いの宿。和室。枕元には大きなリュック。無造作に脱がれた白衣。

免許証がない。ポケットに飴がない。硬貨ばかりの財布。指輪のない手。「阿刀」と書かれた

納札……。

波の音が鮮明にきこえる。ふくろうの声が、魂でも引き抜いていくような、脱力に満ちた跳躍感を与える。何月なのか、風が妙に心地よい。テーブルの上には、よく見るビールのパッケージ。テレビは時代錯誤のブラウン管。奇妙な形のコンセント。映画のCM――。

「そうか……、そうか……」

なんという、駄作であろうか。

夢とは、自らの有限性の確認のためには必要だ。その有限性は、常に、現実と隣合わせで、人は夢を見ればこそ、すれ、その夢の内から、夢見る少女をからかうように放り出す。

おそらく、明美は死んだのだ。

(一路……)

などと、架空の息子の名を呼んだところで、眼前の女は、笑うかもしれない。

(幾美、太一……)

少し、小声でつぶやいた。

確にお産は痛かった。死ぬかと思った。あれが、本当に嘘だということか。

明美は、呆然とした自分を客観的に見ることはできたが、この生々しい空想から覚めてなお、夢の続きを必死で探った。

だが、妙に冷静な頭は、既にこの現実を受け入れようともしている。

こぼれ落ちる記憶を手繰れば手繰るほど、それは鮮やかさを失い、別の意志と摩り替わり、考えながら、それすらこぼれて正気が戻った。これを、胡蝶の夢というのだろう。遠くで、カワセミのさえずりが聞こえたような気がした。

「マオ、こんな話知ってる？」

「まだ寝ぼけてんの？」

「ちょっと前に、孤独がほしい女がいたの。だから、それを手にした。

すると、さみしかった。おわり……」

「なんだよ、それえ」

マオは終始、明美にあきれた。明美は終始、孤独にあきれた。

どうしてだろう、まだまだ――、歩く必要があるからだ。

「カワセミの賦(ふ)」

<http://p.booklog.jp/book/70674>

著者 : 4951

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/4951/profile>

参考文献

「SAPIO」「MAMORU」「徳島人」「おじさん・おばさん論」

西部邁・小林よしのり・黒鉄ヒロシ・西尾幹二

堀辺正史・小浜逸郎・金美齢・司馬遼太郎・峰なゆか

他、引用は本文に記す

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41243>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.